飛ばされてその先

ニガ屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
飛ばされてその先

【Ｎコード】
Ｎ７６５８Ｍ

【作者名】
ニガ屋

【あらすじ】
突然現れた自称神様に戸惑う藤本博美。
適当な対応に拗ねた自称神様によってヒロミはゼロの使い魔の世界に飛ばされてしまう。
ゼロの使い魔の世界なのに使えるのはＦＦＴのアビリティ。なんでぞ！！
特に説明もないまま異世界に放り出されてしまった
こうなったらもう原作に介入して楽しむしかない！？…原作そんなに知らないけどねっ！！

ヒロミのハルケギニアでの生活が今幕を開ける…

第一話

「ふあぁぁぁぁ疲れたぁぁぁ」

お風呂からあがりそのままドスンとベッドに倒れこむ。
私は藤本博美、大学生になったはいいが将来の夢があるわけでもなく毎日ダラダラ過ごしてる。
趣味はテニスと読書
テニスはサークルに入り週に2、3度軽く汗を流す程度に、読書もラノベ中心とした簡単な本が多い。
腐女子?違う違う!!BLとか好きじゃないし違うはず!!オタクであることは否定できないけど腐っては無い!…はず。
まぁ腐ってるとか腐ってないとかそういう話は置いといて、今日も学校にバイトにで疲れて今に至ると言うわけだ。
風呂にも入ったことだし今日はもうさっさと寝る事にしよう…

第一話「自称神（笑）」

「ワシが神だ」

今私は夢を見ている。それもとびきり変な。
どれぐらい変かというと、夢にいきなり自称神（笑）が現れるぐらい。
長い白ひげ生やしたいかにもって感じの老人。
どうせなら語尾を「〜じゃ」にしたらもっとらしくなるんではなか

ろうか。

しかし自分の夢のクオリティの低さに正直がっかりだ…
こんな厨臭い夢を見るとは大学生として恥ずかしい、なのでさっさと目が覚めないかと思いつつ自称神（笑）に返事をしておく。

「へぇ神なんだ、凄いなぁ憧れるなぁ」

「ねぇ全く信じてないよね?ワシのこと小馬鹿にしてるよね?」

「いやいや信じてますとも、あ、グラットン凄いですね!」

「グラットンってなんだぁぁぁ!!さっきのワシの発言にそんな要素無かったよね?信じてないでしょ。私神だからね?大事な話しに来たのよ」

「あ、マジッすか?お疲れっす。自分忙しいんで今度にしてもらっていいっすか?」

「軽ぃよ!!先輩からの誘い断るみたいに断らないでよ!!もう今から話すからね!!君異世界行ってもらうからね!!」

出ました異世界いってら発言。間違いなく夢です。
しかしこのじいさま元気だなぁ…
あ、そっか夢だもんね。そりゃ元気だわ。夢でリアルに疲れた様子とか描写されてたら嫌だわね。

「…君全く信じてないね。いいよもう信じなくて。夢だと思ってくれれば。で、どこ行きたい?」

「は？」

「行く世界選ばしてあげるから決めて。そこ連れてってあげるから。」

「ああ、はいはい。んーとね、ＦＦ７がいいかなぁ」

「適当！！…一応理由を聞いてもいいかの？」

「えぇ…理由？あー…クラウドかっこいいし、ヴィンセントもかっこいいし、レノもかっこいいに違いない…まぁカッコいい男が多いとこに行きたいってのは女の子として当然の考えだよね」

「絶対今適当に答えたよね！？そうじゃのう…ワシＦＦ７よりＦＦＴのほうが好きなんでそっちでもいいかの？」

「ああ、もう何でもいいです。そろそろこの夢終わりにしたいんでそれでお願いします」

「急に敬語はやめて！なんか冷たく感じるから！！…いいもん。ワシが神だと知った時に後悔するはずだもん」

自称神（笑）が拗ねたところで目が覚めた。起き上がるとそこは草原。

どうやら広大な草原のど真ん中に放り出されてしまったらしい。

少なくとも自室のベットの上ではなかった。

来ている服も自分のものではない、安っぽい布で出来た服とズボン、それに安っぽい皮のブーツだ。

「…え?ここどこ?ＦＦＴとか言ってたったことは…イヴァリース?」

「違うよ」

「のわぁ!!」

さっきまで誰もいなかったはずの目の前に自称神（笑）が現れた。
びっくりした…ん?なんでここにこいつがいる?
落ちつけ私。とにかくこの人に色々話を聞いてみないと…

「あの…なんでここに居るの?」

「言い方ひどくない!?いや、わかるよ。言いたいことはわかるけどさ。もっと優しい言い方あるよね?だからワシ神だから。さっきの夢じゃないから」

「え?じゃあ異世界に飛ばされた?でもここイヴァリースじゃないんだよね?」

「うん。ここはトリステインだね」

はて?トリステイン?どこかで聞いたことはあるが…なんだっけか、うーむ思い出せん。
わからんことは尋ねてみますか。

「トリステインってどこよ?」

「ゼロの使い魔の世界だの。ゼロの使い魔はしっとるね?」

突然の宣告に頭が付いてこない。
ゼロの使い魔？何で？ＦＦＴじゃないの？
そもそも本当に異世界に飛ばされるとは…あれ？ってことはこの人マジで神なの？

「あの、本当に神様なんですか？」

「神だよ！！言ったじゃん！最初っから言ってるじゃん！」

一応敬語で話しかけてみたものの…胡散臭い。
しかし一応今までの無礼は誤っておこう。変な力はあるみたいだし。
長いものには巻かれて行かないと。

「心の中で自称神（笑）とかあだ名付けてほんとすいませんでした」

「えぇ～そんなこと思ってたのぉ？まぁ反省してるならいいけどぉ」

「本当にすいませんでした。アンタ見た目ただの汚いジジィだし嘘だと思ってました」

「反省してないよね！？絶対してないよね！！」

はっ、しまった。謝った時にされたどや顔があまりにもむかつく顔だったからつい煽ってしまった。
何だろうこのジジィすっごいムカつくんだよね。
いやいや、そんなこと言ってる場合じゃない。ここは何としてもとりいらないと…へそ曲げられて何の説明もなしとかは勘弁してほしい。

「いやいや、冗談ですよ。冗談。神様ともなると器大きいから許してくれますよね？」

「えぇ～まぁワシ神だし器大きいけど」

にやけてやがる、キメェ。しかしこのチャンスを逃すことはない、今のうちに色々聞いておかないと。

「ここゼロの使い魔の世界なんですよね？なんでまた？」

「君イケメン多い世界行きたいみたいなこと言ってたじゃない？あの時ワシちょっとイライラしててね、失敗しちゃった。テヘッ」

「（うぜぇ）もしかして私魔法とか使えるわけですか？」

「使えるよ。ＦＦＴのだけどね」

「ゼロの使い魔のは使えないのですか？」

「使えないよ。才能とかないし。ＦＦＴのアビリティ使えるから大丈夫」

「なんでそんな面倒くさい事を…ゼロの世界の魔法使えるようにしてくれたらよかったのでわ？」

「だってそんなことしたらつまんないじゃん、目立つようにして困ってもらわないと」

「ええっ！？もしかして私になにか恨みでもあるんですか？あれですか？私の言動にそこまで怒りを覚えました？」

「それほどでもない」

「怒ってるじゃないですか！！グラットン凄いですねを未だに引っ張ってるとかどんだけ執念深いんですか！！」

「それほどでもない」

「もういいですよ！！ＦＦＴのアビリティ使えるって言ってましたけど魔法全部使えるんですか？」

「魔法ってかＡアビリティは全部使えるようにしといた。温情措置という名のチートだね」

「おお、さすが神様！！ありがとうございます！！」

「褒めるでない褒めるでない」

何だろうこの中途半端な優しさ。
そんなとこで温情措置とか使ってくれるなら元々嫌がらせ自体をしないでほしかった。
しかし言えない。そんなこと言って機嫌損ねてしまった日には更なる嫌がらせが待っていることは間違いない。

「元の世界に帰れたりは…」

「しないね」

「貴族だったりは」

「しないね、そもそも君の家自体が存在しない。じゃあワシそろそろ行くから頑張るんだよ」

「え、家ないの!?ちょまっまだ聞きたいこととかあるん…」

「何とかなるさ、その為の温情措置だよ。ハハッ」

チッ、ムカつく…あいつ消えやがった「おーい」とか言ってみても返事はない。

放置ですかそうですか、まぁ能力的にはチートみたいなもんだしなんとかなるでしょう。

こうして何もわからないまま私の異世界での生活が始まった。

第一話（後書き）

第一話書き終わりました
誤字脱字またはアドバイス等あればお教えください、お願いします
今後ちょくちょく続き書いていきたいと思っております
原作とも絡んでいくつもりですがどういう風に絡むかはまだ決めておりません
楽しみにしていただければ幸いです

第二話（前書き）

あれ？思ってたより長くなっちゃいました
一話一話をもう少し短めにしていけたらいいかな。と思ってます
さて今後どうすっかなー、展開全く考えてない；；；

第二話

第二話「トラウマ技はデスの追加効果」

あぁ、置き去りにされてしまった。
トリステイン？原作知識もさほどないのになぁ…とにかく宿とか食料とかを確保しないと。
とりあえず街だ、街に行こう。街…どっち？
周りを見渡してみるものの辺りは一面平原。超平原。
…えっととりあえずどっちかに歩いて行くしかないの？…ないですね。
歩きますか、まぁ主人公補正で街がすぐに見えてくるのは知ってるので問題は無い。

1時間後――――――――――――――――
どうしてこうなった？完全に迷子です。
最初っから草原のど真ん中に落とすとかどんだけ鬼畜設定だよ。
当然周囲の風景は全く変わってません一面草原です。泣きそう…
そうだ！アビリティ使えばいいんじゃん！！
テレポ移動とか使えるのかな？あれ使えるなら移動楽になるはず！！
…どうやればいいんだろ？イメージするだけでいける？
んむむ…そこにテレポそこにテレポ…できてない？
何で出来ない？わかった！パッションが足りないんだ！！
そうだよね全く疲れないで移動しようという考えがおこがましかっ

た、多少の疲労は仕方ないよね。
よし！！全力でテレポ移動すればいいんだ。
そういえばテレポ移動って両手挙げてたはず、「ヘアッ」って感じだった気がする。
それぐらいの意気込みで行けば大丈夫に違いない！！
わかってしまえばどうということはないね。余裕っすよ！！んじゃ試してみますか。

「ヘアッ！！」

…あ、あれ？おかしいな？しっかり両手でバンザイもしてるのに１ミリも移動してなくない？
ヤバい恥ずかしい、間違いなく顔真っ赤だわ、誰にも見られてなくてよかった。

「ブハハハハハ！！」

「誰だっ！！」

「ワシだ。ワシ」

「なんだあなたですか」

そこにいたのは自称神の爺だった。見てやがったな…ニヤニヤしてやがる相変わらずうっとおしい奴だ。
しかしこいつには色々聞きたいことがある。
内心で悪態をつきながらも丁寧口調だけは忘れない。

「なんです？」

「クッ、み、見てたよ。プッ、クッ。いやいや、意外と可愛いところがあるじゃないか。へアッって言って両手あげた後、ククッ、真っ赤になってキョロキョロしてるとことか萌えポイントだったよ…アハハハハハハハ！！」

「…テレポ移動したいんですけど、どうやったらできるんですか？」

「ひーひー、…テレポ移動は使えないよ。Aアビリティしか使えないって言ったよね？Aアビリティはアビリティ名言えば使えるんよ」

「デ…ファイア」

おおっ、ほんとだ、爺に向いてファイアって言ったら出た。
ただジジイには全く効いてないみたいなのが悔しい。どうせなら悶え苦しんでほしかった。

「デ…ってなに？まさかデス？ワシのこと殺そうとしたの！？」

「いやいや、思いとどまったでしょ。そんなことより何しに来たんです」

「そんなことって何？ワシの命そんなに軽いの！？」

「どうせ効かないでしょう神なんだし。ほんと何しにきたんすか？凄い歩いてイライラしてるんすけど」

「ううっ…確かにあまりにもひどい状態で放置したなと思ってね。神反省。で言葉ぐらいわかるようにしてあげようと思ってね」

「ええっ！言葉わからない状態だったんですか？詰みゲーじゃない

ですか」

「うん、さすがにかわいそうだと思ったから助けに来たわけよ。他にもなんか質問とかあったらしていいよ。答えてあげるし」

チャンスだ。いや、チャンスというよりもここでちゃんと話聞いとかないと死ぬ。死活問題だ。

何聞く？街の位置。これは必須。ＭＰも聞いとくか。

他は？他は…思いつかねー、とりあえず思いついたことから聞いて行こう。

「まずは一番近い街の位置を教えてください」

「街はね、君の進んでる方向であってるんよ。後１日も歩けばつくんじゃないかな？」

「１日！？そんなかかるんですか？」

「大丈夫３０分もしないうちに馬来るから、それに乗っていけば数時間で着くよ」

「まぁそれならなんとかなるか…後私がアビリティ使えるのはわかったんですけどＭＰってあるんですか？」

「あるよ。君のＭＰは今１５５がＭａｘだね、どうやったら変化するのかは分からないけど装備品変わるかレベル上がるかで変化するんじゃない？」

「はぁ…そうですか。ちなみに１５５って多いんですか？魔法使ったらどれぐらいＭＰ減るのかがいまいち覚えてなくて…」

「十分だと思うよ。消費ＭＰはさっき君が使ったファイアで6、使おうとしたデスで２４だから」

「んじゃ１５５で十分ですね」

「そうだね。ああ、大事なこと言うの忘れてたわ。ワシ今後しばらく君に干渉できないから気をつけてね」

「ああ、わかりました」

「あれ？なんかもっと食いついてくれないの？何でですか！とかないの？」

「いや、ずっと一緒に居られてもうっとおしいし、見られてるとか気持ち悪いし……干渉できないってのは忙しいからですか？」

「君の口撃はほんときついよね！ワシ軽く涙目だよ！？まぁ神は色々あるんだよ。ワシが落ち着いたらまた様子見に来るから」

「へいへい、もう行くんですか？」

「ぞんざいな扱い！？もう行くよ。ちょうど馬も来てみたいだしね。ま、死なないようにだけ気をつけて」

不吉な台詞を言い残してジジイが消えていった。

馬が来るって言ってたけどどこだろ？

…ああ、あれか、いっぱい来てるね。１０頭ぐらいいるじゃん。選び放題なわけね。

『勧誘』すればなついてくれるんかな？…ん？人乗ってない？

見る見るうちに周囲を包囲された。やばい雰囲気しかしてない。うん、狙われてる。
馬ってこいつらの奪えってことだよね？ほんとジジイ死ね。怖いけど戦うしかない…か。

「ほう、わりかし綺麗な娘ッ子じゃねぇか」

「黒髪の娘とは珍しいな。こりゃ良い値で売れるぜ」

「こんなとこ1人でうろついてる理由はしらねぇが、うろついてるネェちゃんがわりぃやな」

「ネェちゃん大人しくさらわれてくんな」

下卑た笑いを浮かべながら男たちが馬から降りてジワジワ近づいてくる。
見た感じ盗賊のように見えるが話の内容からすると人攫いもしているようだ。
どちらにせよあまり迷ってる時間は無い。
闘うか逃げるか…馬を手に入れる必要があるので戦う一択だ。
普通なら1対1でも勝てる気がしない相手だが今は違う。
私にはチート的な全アビリティ使用可能権がある。

戦うと決めたら人を攻撃することを思った以上にあっさり受け入れることができた。
自分が生き残るために他人を傷つけることにはあまり抵抗を感じない。
殺さないで済むならそれに越したことはないが、戦った結果他人が死んでしまっても仕方ない気がする。
バーチャル感覚で捉えてるだけかもしれないし、ゲーム脳なのかも

しれないが躊躇するよりは都合はいいと思う。

戦うと決まったならさっさと戦おう、迷っているうちに捕まりましたなんてシャレにならない。

戦いにおいて先手を取ることは非常に重要な要素である。ってのはよく聞く台詞だし

どうやって戦うか…ＦＦＴにライブラは無かったはず。

となると敵の明確な戦力はわからないのでまずは守備を固めよう。

その後ウィー○ラフさんのお陰で軽くトラウマになった北斗骨砕打でも使えばＭＰの心配もないし楽勝だろう。

いやぁ聖剣技って便利だねぇ。

ん？聖剣技？

……ケーーーーーーーーーーーン！！！ダメだ！私今剣持ってねぇ！！

くっ、魔法主体で切り抜けるしかないか。なんか急に不安なってきた、リレイズ、いやマバリア使っとこう。

「……」

あれ？唱えようと思ったのに声出ない。

ちょ、手が勝手に上がってく…何これ？なんか魔法で攻撃されてるの？

あ、もしかしてチャージかコレ！！いらんとこリアルにしやがって…隙だらけにも程があるんだが。

詠唱中の移動は…うん、出来るみたいね。

「お、ねぇちゃん両手挙げて降参ってか？ハハハハハ！！」

「そうやって抵抗しないでいてくれるとこっちとしても仕事がしや

S「マバリア」…なんだぁ？」

「ファイア！！」

私が魔法を使ったことに盗賊たちが驚いてる間に詠唱が短いファイアで攻撃する。
盗賊たちが3人巻き込まれ、火を消すために地面を転がっている。
火が消えた後もなかなか起き上がってこないところをみると、思いのほかダメージは大きい様だ。
この隙に追い打ちをかけようかと思ったのだが相手の様子が何やらおかしい事に気付いた。
見ると小刻みに震えながら何やらブツブツ言っている。

「あいつ杖持ってないよな」

「ってことは先住魔法か？」

「まさか…エルフ！？」

そうだ、この世界では魔法を使うには杖が必要なのだ。
杖を必要としないのは主にエルフが使うとされている先住魔法のみ。
そしてエルフは恐ろしい種族とみなされていた…理由は覚えていないが。
どうやら私が杖を使わないで魔法を使ったことから彼らは私がエルフではないかと考え怯えているらしい。

ふむ、これはチャンスじゃないだろうか？
上手く相手の戦意を削いでしまえばこれ以上戦わずして馬を手に入れることが出来るはずだ。
そう考えて私は一番近いところにいる背が低く猫背な男に話しかけ

た。

「おい、貴様らのリーダーは誰だ」

「へ、へい。そのお方です」

そう言って男が指差したのはファイアを喰らって倒れていた男の一人だった。

お、リーダーがやられてるなら話は早い、威圧的な態度で接していけば簡単に折れるに違いない。

しかしリーダー超辛そう…「うぅ…」とか言ってる。

私に見られて明らかにビビってるし、哀れに思えてきたな、話をする前に怪我ぐらい治してやるか。

「ケアル」

「ひぃっ！…あれ？怪我が…」

「これで少しは話しやすくなっただろう？私の要求を聞き入れるならば全員命だけは助けてやろう」

「本当ですかぃ！何でも言うことはお聞きしますので命だけは勘弁してくだせぇ！」

男は私の見た事もない魔法に怯えているらしく従順なことこの上ない。

何だろう魔王になったみたいな気分で凄く気持ちいいんだけど、ん？違いますよSじゃないです。

さて…何貰おうかね？馬は必須。街までの距離はそんなに無いって言ってたし食料とかはいらないか。

んー、ああ剣も貰っとくか。後は金巻きあげるぐらいで十分かな？

「そうだな、まず馬を一頭と鞘のついてる剣を一本貰おうか、後は…金だ、払う金は貴様らに決めさせてやろう。払いたくなければ全く払わなくてもいいぞ？私の機嫌を損ねてもいいのならな」

「へ、へい！馬と剣は好きなのをお選びください！！おいオメぇら持ってる金全部出せ！！」

どうやら男は金も全額差し出すつもりらしい。全額出さなかったらもう一度燃えてもらうつもりだったが話が早くて助かる。
馬一頭と剣一本、銀貨と銅貨のギッシリ詰まった袋をあっさり手に入れることが出来た。
現時点で他に必要なものは…強いて言うなら金貨が欲しかったぐらいだ。
絶対に欲しかった馬は手に入れたのでこいつらはもう用済みということになる。

「よし、約束通りこのまま見逃してやろう。おっと、私のことは他言無用だ。もし誰かに話したら殺すよ」

「へ、へい！」

笑顔で脅しておいた。笑顔のほうが気持ち悪いものを感じるに違いない。
相手の怯えっぷりを見ていると愉快で悪役になってみるのも悪くないなと思う、もう一度言うが私は決してSではない。
こうして馬と剣と金を手に入れた私は意気揚々と街がある方向に馬を走らせた。

第二話（後書き）

後半部分の文章がグダグダになってしまっているような気がします
誤字脱字、またはアドバイスなどありましたら是非教えてください。
お願いします

次回はトリスタニアに話を移そうかと考えております
原作キャラとの絡みを早いうちに出したいと考えているのですが、
もう少し先になりそうですね
次話をお楽しみにしていただけると嬉しいです

第三話

馬を数時間走らせると街に着いた。
乗馬なんてしたことも無いので非常に疲れた、そして股と太ももが痛い。
『勧誘』で馬が言うこと聞いてくれるようになってたのにこの様だ、乗馬の難しさを痛感した。
今後馬に乗ることは出来るだけ控えたいな。

第3話「物価の違いがいまいちわからなかったよ…」

そういえば街に着くまでに一つ残念な事実が判明した、奪った剣に関することだ。
剣を奪った理由はもちろん聖剣技を使えるようにして戦力の強化、そして生存率の上昇の為だ。
別に近接戦闘で剣を振り回そうなどとは思ってはいない。

聖剣技の使用には剣か騎士剣?が必要だったはずなのだが、私が奪った剣は剣というよりもサーベルに近い形状ものだったので聖剣技が使えるかどうか不安だった。
もちろん奴らが持っていた武器の中で最も剣っぽいものは選んだ。
ダガーや弓のような武器を持っているものが大半だった中、サーベルチックな曲刀が数本だけあったので、その中で一番曲がってない武器を選んだのだが、聖剣技が使えないのでは持っていても仕方がない。
街に着く前に野良ウサギを見かけたので、聖剣技が使えるかどうか

確認するいい機会だと思い、不動無明剣を使おうとしたのだが技が発動しなかった。

どうやらこの剣では聖剣技は使えないらしい。
この瞬間にサーベルの認識が、剣→ただの重い鉄塊へと変化した。
売れば金になるかもしれないという淡い期待を捨て切れなかった為、一応街までサーベルは持ってきたが、使えないとわかってからのサーベルは重さが3倍ぐらいに感じられた。

…と、このように残念すぎる出来事があったのだ。
それでも街に着いた事に喜びを感じ、テンションが上がってきたことは事実だ。
入り口の厩舎らしきところに馬を預け早速街にはいっていくことにした。

街に着いたことでどうもフワフワした気分になっているらしい。
街の入り口付近、ＲＰＧで例えると『街の名前を教えてくれる人』が立っているであろう位置に男が立っているのを見つけて話しかけたい衝動に駆られてしまった。
万一「こんにちは」「ここは○○の街だよ」みたいな会話になってしまったら噴き出して笑ってしまう自信がある。
街に入って一歩で喧嘩を売るのはどう考えてもよろしくない。
過度に目立つことはろくなことに繋がらないのは明らかである。
それに今から色々と店を回ってみるつもりなのだ、情報を集めるのもそこで話を聞けばいい。

とにかく…まずは武器屋に行こう。
なんせ使えないサーベルが重くて邪魔だ。
これを売り払う事が先決。出来ることなら剣を買いたい……重いん

だろうなぁ…
ブルーになっていても仕方がない。通行人に武器屋の場所を聞き裏通りにあるらしい店に早速向かった。

「いらっしゃい、見かけない顔だな。服装からして一般人にしか見えねぇが…嬢ちゃん店間違ってないかい？」

「いや、これでも一応冒険者の端くれですよ、武器を見にきました」

「ほう、そうかい。まぁ俺ぁ客なら何でもいいがな。んでどんな武器が欲しいんだい？」

「欲しいのは剣なんですが…その前にこのサーベルを買い取ってもらえませんか？」

「サーベル？それも剣じゃねぇのか？まぁよくわからんが売りたいってならちょいと見せてみな…こりゃ粗悪品だな…せいぜい１０エキューぐらいにしかならないがいいかい？」

「…ちなみにこの店で売ってる一番安い剣はいくらですか？」

「一番安いボロ剣で４０エキューだ。ナイフとか弓ならもっと安いのもあるがな」

なるほど、道理で盗賊が長剣を持ってなかったわけだ。
どうやらこの世界では金属の値段が結構張っているらしく剣が高い。
確か１エキューが日本円で２万相当だったか？そう考えると一番安い剣で２０万もするわけだ。
今持ってるのは銀貨と銅貨の詰まった袋だけ。
いくら入ってるかはわからないが、数えなくても３０エキューもは

いっていない事は明らかである。
…仕方ない、サーベルだけ売っぱらって金に換えるか。

「剣の価値もよくわからないんでその価格で買い取ってもらえますか？」

「ガハハ、正直な嬢ちゃんだな！しかし冒険者なのに剣の価値がわからんとは変わってるな」

「実は東方のほうからやって来たばかりでして…わからないことだらけなんですよ。恥ずかしながらこの街の名前すらわかってない状態です」

「ロバ・アル・カリイエのほうから来たってのか！？すげぇな嬢ちゃん！！よっしゃ！！お客さんだし色々教えてやるよ」

どうやら気さくな店主らしい。
この街がトリステインの王都トリスタニアであること。最近このあたりに盗賊が多いから気をつけたほうがいいということ。最近王都の政治が怪しく税金が上がってきて生活がままならない事。カミさんがうるさくて最近ろくに酒を飲めない事などとりとめのない話を色々としてくれた。
そのかわりと言っては何だが東方の秘術を見せてほしいとせがまれ、『チャクラ』を見せてあげたところ大層興奮した様子だった。

長々と話しこんでしまい、商売の邪魔になってるんじゃないかと不安になったが「どうせ客なんて滅多にこねぇから構わねぇよ」と店主は豪快に笑っていた。
結局サーベルを１０エキューで売って話しこんでしまっただけになったが、店主とは仲良くなったのでまた今度剣を買いに来る約束を

して店を去った。
後々思ったのだが、ここがトリスタニアであるということはあの店にはデルフがいたのだろうか？いたのなら何かしら絡んどいたほうが良かったかもしれないな…

武器屋を出たところ日が暮れ始めていたので、宿を確保した後は宿の下にある酒場で飲みながら今後の身の振り方を考えることにした。
基本的な方向性としては原作に絡んでいきたいと思う。
面白そうだし、超かっこいい貴族と知り合えるかもしれないしね！
皆忘れてるかもしれないけど私おにゃにょこだからね。イケメソは大好きですよ。
そしてここがトリスタニアであるとわかった以上、原作に絡んでいく手段はいくつかある。
？　魔法学院に生徒として入学
？　魔法学院に行ってみて雇ってもらうよう頼む
？　魅惑の妖精亭で働いてサイトとルイズ待ち
？　軍に入って戦争行くときに出会う

今思いつく現実的な案はこの４つだ。
１は貴族にならないと無理なんだよね？ゲルマニアで金積むにしてもそんな金持ってないし…どっかの家の養子にしてもらうほうがまだ現実的か。
２は行ってみてオスマン学院長に話聞いてもらえればなんとかなるかも知れないけど…そこまで話を通せるかが問題だよね、門前払い喰らうかもしれないし。
３と４は序盤の話に絡めないことと一回会ってもその後永続的に絡んで行けないって言うところが残念なんだよね…

そういうところを踏まえて考えると…？かなぁ…
使用人や衛兵としてならなんとか入りこめそうな気がするし…上手いこと力を見せれたら近くにおいてくれるはずだよね。
よし！！？に決めた！！そうと決まれば早速明日魔法学院に行ってみよう。
テンションあがってきたー！！今日は飲むぞー！！

こうして、この後主人公補正が働くことも知らず1人酒を飲み続けるのであった。

第三話（後書き）

次回、初めて正方向への主人公補正を発揮させる予定です
ご都合主義とか言われる気しかしてません；；堪忍やで～

第四話

いやいや、私今までお酒飲んでただけですよ?まさか飲んでただけで原作介入チャンスが来るとは。
さすがの博美先生も予想出来ませんでしたー!!
これが噂の主人公補正ってやつですね、わかります。

第4話「酒場にて」

話は少し前に遡る――――――――――――

私は宿を取って今後の方針を決めてからずっと1人で飲んでいる。
いい感じにお酒も回りいい気分になってきたところで気付いたんだが、いつの間にか隣に老人が座っていた。
はて?いつの間に隣に来たんだろうか?隣に来た事に気づかないほどお酒に夢中になっていたか?まぁいい、今日は飲むと決めたのだ。
と、老人から酒へと興味を戻す。
しかしヒソヒソ話をしているような小さな声が聞こえてきて、私の興味は再度酒から離れることとなった。どうやら隣の老人が何かつぶやいているらしい。
最初は独り言かと思っていたのだが、よくよくみると老人の周りをネズミがうろうろしている。ネズミに話かけてる?
正直ぞっとした。頭が残念な老人だと思ったので相手をしないよう心に決めた。

日本にいた頃に犬や猫に話しかける人は何度もみた事があったが、ネズミは無い。そもそも飲食店でネズミがいるってどうなの？と思ってしまう。気になるものの、関わるとロクなことが起きないであろうことは明らかである。

さっさと帰ってくれないかと思いながら、出来る限り意識からシャットアウトして酒を飲み続けることにした。

しかし一度気になってしまったせいか独り言の内容が所々聞きとれてしまう。

白がどうとか黒がどうとか色の話ばっかしてるなぁ、画家かなんかか？お、モートソグニルってのは名前か？ん…どっかで聞いたことあるような…オスマンの使い魔か！？まさか横にいるのオスマンなの？

やばい、緊張してきた。向こうも1人みたいだしとりあえず話しかけてみる？

なんて考えている間に今に至っているのである。

さて、この原作介入チャンスを逃す手はない。話しかけてみるか。

しかしいきなり話しかけて相手してくれるか？ここは慎重に行くべき「お嬢さん？」場面かもしれない。何せここで下手を打ってしまえば最も現実的ルートからの原作介入チャンスが潰れてしまうことになる「おーい」そうだ、ここは慎重に慎重を重ねるぐらいでちょうど…「お嬢さんや？」

「ひゃい！！」

急にお尻触られた！何？誰？

周囲をキョロキョロしていると悪戯っぽい笑みを浮かべている隣の老人と目があった。

「いや、すまんの。何度呼びかけても返事がないから…つい、の」

そういえば、この爺さんこういうキャラだった。
屈託のない悪戯っこのような笑みを浮かべている老人を見て、間違いなくこの人がオスマンだろうと確信した。
しかしこれはチャンスじゃないか?体触られたとか言って泣き落とし使えば雇ってくれるかもしれない。効くか?泣き落とし。あっさり見破られるような気がするし…やめとくか
そもそもこの爺さん原作でも底の見えてない感じのキャラだったよね、全くのウソなんて付いたら看破されるんだろうな…となると、ある程度本当のこと話さないといけないな。

「いきなり人のお尻触るとは…いい度胸してますね」

「何度も話しかけたんだがのう。まるで返事が無かったものだからつい、の」

「何がつい、ですか。ところで…私に何か用ですか?」

「いやいや、お嬢さんがワシの事をチラチラと伺っているようじゃったからの、ナンパでもされるのかと思っての、ならばとこっちから話しかけたんじゃ」

「気付かれてましたか。私は藤本博美と言います、ヒロミと呼んでください。あなたはもしやオールド・オスマンでは?」

「いかにも、ワシがオスマンじゃ。ミス・ヒロミのような若い娘さんに知られとるとは、光栄じゃわい。して何か用かね?」

「単刀直入に言います。どんな形でもいいのでトリステイン魔法学院で私を雇っていただきたいのです」

「ふむ…何か理由がありそうじゃの、聞かせてもらえるかね？ミス・ヒロミ」

私が雇ってほしいという話を切り出すと、オスマン氏は先ほどまでの飄々とした態度から一転、急に真剣な顔になった。やはりこの爺さまは出来る人らしい。

「ここでは少し…よろしければ上に部屋をとっておりますのでそちらでも構いませんか？」

「ほっほっ、構わんよ。まさかこの年になって若い娘さんに部屋に誘われるとはの」

「私もまさかこんなじいさまを誘うことになるとは思いませんでしたよ」

すんなり部屋についてくることを承認したオスマン氏になんだか拍子抜けしてしまった。もっと警戒されると思っていたのだ。

部屋に入るとオスマン氏が『ディテクトマジック』『ロック』『サイレント』といった魔法をかけた。オスマン氏曰く「これで外に話が漏れることはない」らしい。便利な魔法だな。

わざわざ部屋にまで足を運んでもらった事だし早速本題に入ることにした。

「ご足労ありがとうございます。早速ですがお話させていただきます。雇ってほしい理由を言う前に…私のことを詳しく話す必要がありますね。端的に言うと私は異世界の人間です。今日突然この世界に飛ばされてしまいました。そしてこの世界の物とは異なる魔法、あるいは特殊な技能を使うことが出来ます」

「ふむ…続けてくれるかね？ミス・ヒロミ」

「またこの世界のことは私のいた世界の文献に少しばかり記載されていました。そのためこの世界について少しばかりの知識はあります。私の魔法は杖を必要としません。これはこの世界で言う精霊魔法に間違えられる可能性が高いと考えます。そのためあまり大っぴらに力を使うことが好ましくないのです」

「なるほどの、して何故ワシを頼ろうとしたのじゃ？」

「はい、私はいずれ元の世界に帰りたいと考えておりますので、出来れば魔法になじみのある場所で過ごしたいのです。もしかしたら異世界に行くような魔法が見つかるかもしれませんし。そして文献の中にトリステイン魔法学院学長という立場のオールド・オスマンの名前がありました。その内容から信用するに値する人間であるだろうと判断させていただきました。またメイジとしても学者としても優秀な方が学院の教師をされていると伺ったので、信頼できそうならその方にも相談してみようと思っております」

「ふむ…俄かには信じられん話じゃが…まるっきり嘘というわけでもなさそうじゃのう…しかし異世界でもワシの名前が知られとるとはのう、学者…コルベール君かの？彼なら確かに信頼できそうじゃが…ともかく、まずは魔法と技能とやらを少し見せて貰えるかの？」

自分の言うことを素直に受け取ってくれるオスマン氏に対して、私も言われるがままに『マバリア』と『チャクラ』を披露した。

「確かに始めて見る魔法じゃのう。複数の補助効果を相乗と…生命力と精神力の同時回復能力かの？…王宮なんぞに知れたら間違いな

く戦争に使われるじゃろうな。他のものにこれを見せた事は？」

「数名の盗賊と武器屋の店主に見られてます。盗賊は軽く痛めつけた上で脅しをかけておきましたし、武器屋の店主にはロバ・アル・カリイエの技術だと伝えたうえで内密にしてもらうよう言っていますので広まる心配は無いかと思います」

「賢明な判断じゃ。さて…状況は大体把握したのじゃが、雇ってほしいという話をもう少し詳しくお願いできるかね？ミス・ヒロミ」

「私はこの世界に来たばかりで住む場所も仕事もありません。そこで魔法学院で雇っていただければ住む場所と食事が確保できるのではないかと。仕事内容に関してはメイドにコック、衛兵から秘書まで何でも構いません」

「なるほどのう…なんなら無理矢理学院に入学させてやることも出来るぞい？」

「残念ながらこの世界の魔法を私はおそらく使えませんので、魔法を使えない生徒なんて目立ちすぎてしまいますよ」

「それもそうじゃの」

オスマン氏は話している間ずっと何かを見定めるような目で私を見ていた。

面白そうだから学院に行きたいなんて言えず、ところどころにそれらしい嘘を交えて話したのだが、オスマン氏の目を見ているとまるで全てを見透かされているような不思議な気持ちになる。

私の話を聞いている間、満足そうに頷いたり何かを考え込んだりといった様子のオスマン氏であったが、私の話が終わるや否やその宣

告は突然やってきた。

「採用じゃ。今日はもう遅いので明日学院に一緒に行こうかの」

「え?そんな簡単に決めていいんですか?」

「なんじゃ?雇ってほしいんじゃろ?そうじゃのう…仕事内容はとりあえずメイドを頼もうかの、いざという時には衛兵としても活躍してもらうことにするかの」

「あ、ありがとうございます」

「構わんよ、まだ何か話せない事情もあるみたいじゃがな。それが何であれ可愛らしい若者を助けてやるのが年寄りの仕事じゃと思っとるよ。明日の朝に街で買い物してから学院に向かおうかの。明日の朝にこの宿に呼びに来るからそれまでゆっくりしとるとええ」

「は、はい。おやすみなさい」

おやすみ。と微笑みながら部屋を出て行ったオスマン氏のその鋭さに改めて驚愕した。

今まではダンブルドアの劣化版ぐらいに考えていたのだがとんでもない。

オスマン氏は間違いなく今までの人生で出会った最も偉大な人間に分類される。

自分の考えをどこまで読んでいるんだろうか?…ただ楽しそうだからっていうのもばれてたりするのかな?

なぜ助けてくれた?頼めば助けてくれる気はしていたが、助けられた理由はわからない。

それでも頼れる味方が出来たような気がして安心している自分がいる。

とりあえず今日はもう寝よう。考えることは明日に回せばいい。

異世界にきたにも関わらず、今日はなんだかいつもよりぐっすり眠れるような気がした。

第四話（後書き）

非常に良いペースで更新出来ています
週に1，2本上げれたら良いな。ぐらいの気持ちで始めているので、
今のペースは脅威といっても過言ではありません
このペースがいつまで続くことやら…

私の中のオールド・オスマンはダンブルドア先生と同じ評価です
高すぎるってよく言われるんですけどね
それでも飄々としているオスマン氏が大好きです
いよいよ次回は魔法学院に話を持っていきたいと思います

第五話

朝、宿屋の下の酒場で食事をとりながらオスマン氏を待っていた。
食事をしながら、オスマン氏のフランクな性格を考慮すると昨日の自分の態度は硬すぎたかと考えたが、オスマン氏の世話になる以上礼節を尽くしても尽くしきれないという結論に達した。
というよりも今後は基本的に誰に接するときでも猫かぶって馬鹿丁寧に接することにした。
今まで色々なバイトを経験している私にとってその程度の演技は朝飯前だ。
考えもまとまり、食事を終えたところでオスマン氏がやってきた。

第5話「魔法学院編突入」

「おはようございます、オールド・オスマン」

「おはよう、昨日はよく眠れたようじゃの。ミス・ヒロミ」

「はい、身の振り方が決まったお陰で安心して眠れました。ありがとうございます」

「なぁに構わんよ、さてを学院に行く前にちょいと買い物に行こうかの」

「はい、ご一緒させていただきます」

オスマン氏の後について宿を出る。
どこに行くのだろうか？そんな疑問を持ちつつも私は黙ってついて行く。
辿りついた際は何でも屋と言った感じの店である、強いて言うなら雑貨屋にあたるのだろうか。

「さて、ここに入るぞい。ミス・ヒロミも着替えぐらいは買っておくべきじゃな。お金は残っておるかね？」

「はい、大体１０エキューぐらい」

「それだけあれば十分じゃの。ワシも少し買いたいものがあるから適当に服を買っておいてくれるかの？メイドには給仕の際に服を支給するが寝る時や休みの時まで同じ服というのは嫌じゃろう？しかし買いすぎないように注意しておくれ、女性は買い物をするとなぜか大量に買ってしまうようじゃからの」

カラカラと笑いながら店に入っていくオスマン氏に返事をしながら私も店について入った。
広い店の中は服が並んでいる区画や家具が並んでいる区画、小物が並んでいる区画などに分けられているようで、入ってすぐのところに服が並べられていた。
私が服を物色している間にオスマン氏は小物が所狭しと並んでいるところへと向かい何やら探しているようだ。

私は飾りっ気のない動きやすそうな服を上下セットで2着と靴を2足手に取っている、後は下着を買いたいのだが探してみたところ、パンツにはドロワーズらしきものが存在するがブラジャーは無い。
仕方がないので踊り子が着るような派手な色の布で代用（ビキニのようなもの）することに

した。
商品を持ってレジに行くとオスマン氏も買う物が決まったらしく鉢合わせになった。
私の商品の代金もまとめて払うと言ってくれてる…あ、無理矢理払われた。
大した金額じゃないんだろうけど、親切が嬉しい。

店を出る際に感謝の意を述べようとしたところお尻を触られ反射的に頭をはたいてしまった。
お礼を言われるのが照れくさかったんだろうか？あまりにも良すぎるタイミングにびっくりだ。
しかしここで怒らなかったら逆に気まずい空気になる気がしたので全力で怒っておいた。
今は昨日感じられた経験豊富な老人という雰囲気は全くなく、怒られてしょんぼりしている同世代の友人のような雰囲気を醸し出している。
本当に掴みどころのない不思議な人だ…

「さてと、冗談はこのぐらいにしておいて…移動手段は持っておるのかね？」

「馬を厩舎に預けてます」

「…親切な盗賊に貰った馬かの？」

「そうですね」

「ふむ、なら移動は問題ないの」

厩舎で馬を返してもらいトリステイン魔法学院を目指す。
オスマンの馬は一目見ただけでわかるほどに明らかに私の馬より良い馬だと思われた。
毛並みや肌のツヤが全然違うし、走ってみてわかったのだが走りに力強さがある。
私の乗っている馬に合わせて走ってくれているようだ、それにしても股が痛い。
魔法学院に着くまでなんとか我慢したが、正直二度と乗りたくないレベルでいたい。
やはりこの世界で生きていく以上もっと乗りごこちのいい乗り物を探す必要があるな…

学院に着くまでの道中でオスマン氏にこの世界のことを色々と教えて貰った。
また、エルフの使う精霊魔法は非常に恐れられているらしく１５ｃｍほどの短い杖を渡された。
杖なしで魔法を使うところを見られるとマズイと思い、先ほどの雑貨屋で買っておいたらしい。
契約をしていない為ただの棒に過ぎないが、魔法を使う機会があるならば杖を持っているに越したことは無い。とのことだ。
正直その程度の小細工で皆の目を欺けるのかは疑問だったが、何も言わず杖を受け取ることにした。
基本的に杖を持っていない時に魔法を使うことはお勧めしないと、釘を刺された。

学園に着くとすぐに厨房のほうに連れて行かれ、私を雇ったという事をメイドたちに伝えオスマン氏は学園長室に帰って行った。
「何か問題があったらワシのところに来るがええ」だそうだ。
これ以上世話を焼いてもらうのは気が引けるので、大概のことは自

分で何とかするつもりだ。
オスマン氏が直接人を連れてくるなんてことは珍しいらしく、オスマン氏が去るやいなや私の周りにはメイドとコックの人垣が出来ていた。

「オールド・オスマンとどういう関係!?」

「まさかお孫さんだったりするわけ!?」

「いやいや、それだったら貴族様だろうよ、こんなところに来るわけがないやね」

「そりゃそーだ。どういう経緯でここに来ることになったんだい？えーと……」

「あ、ヒロミです」

名乗ったはいいが使用人たちに質問攻めにあい少々困惑している。
何も答えないわけにもいかないので適当にはぐらかして答えることにした。
ロバ・アル・カリイエの出身であること、行くあてもなくトリスタニアの酒場で困り果てていたところをオスマン氏に拾ってもらったと説明をした。
使用人たちはエルフの地を超えて来たことに驚愕し、どうやって来たのか？と盛んに聞いてきたので、自宅で急に気を失って気付いたらトリスタニアにいたと誤魔化しておいた。
使用人たちは詳しい話が聞けない事に少し残念そうな顔をしたものの、すぐ笑顔に戻り私を歓迎してくれた。

「はいはい、皆質問はその辺りにして仕事にもどんなよ！！」

私を取り囲んでいる使用人たちに姉さん気質な人が声をかけた。
金髪のショートカット、背は私と同じぐらいだから…１６０ぐらいだろうか？年は２０代前半といった感じだ。
いかにも活発ですって感じで、サバサバした姉御肌な人だという印象を受ける。

「あたいはリーナってんだ、よろしくね。新人教育任されてるからわからない事があったら何でも聞きな！！そうさね…最初は何にもわからないだろうから色々教えてやるよ。着いてきな」

あたいっ娘だった…しかもカワイイ、これは非常に需要があるんじゃなかろうかと思いつつリーナについていく。
まず向かった先は使用人宿舎だった。本来なら相部屋になるのだが空いている部屋があるらしいのでそこで住ませて貰うことになった。

「あたいは隣の部屋だから何かあったらいつでもおいで。さ、基本的な仕事を教えてやるからこれに着替えな。１人で着替えれるかい？」

そう言ってメイド服を渡された、ふ…メイド喫茶でバイトしてた私には朝飯前ですよ。
メイド服をスムーズに着ていく私を見てリーナは驚いているらしい。

「へぇ、着なれるまではこの服着にくいと思ったんだがね」

「何度か着たことがありますので着方はわかるんですよ、初めての時は着方がわからなくて着させてもらいましたよ」

「だろうね、あたいも最初の頃は１人で着れなくってさ。周りの連

中に着させてもらったもんだよ」

「へぇ、リーナさんにもそんな時期があったんですね」

メイド服が着れなくてあたふたしているリーナを想像してくすりと笑ってしまう。

「な、何想像してるんだい」と恥ずかしそうにするリーナ。

萌えポイントもしっかり押さえてるなぁと感心していると「ほら、着替えたらさっさと行くよ」とリーナに外に引っ張っていかれた。

学院の案内をしてもらいながら仕事内容の説明をしてもらったのだが、大まかに言うとここでの基本的な仕事は掃除・洗濯・給仕。この3つである。

掃除と洗濯は一緒にして教えて貰ったのだがリーナのスピードが半端ない。

私の3倍、いや4倍ぐらいの速さでテキパキと仕事を進めていく。

自分の女子力の低さに凹んでると「慣れたら早くなってくるから、最初は丁寧にすることだけ考えときな」と励まされた。リーナいい奴。

なんとか夕食の時間前には仕事を終えることが出来たので、給仕も教えて貰うことになり厨房へ向かった。

「おやっさーん！貴族様の飯はもう出来てるかい？」

「リーナか？相変わらず威勢がいいな！飯はもうちょっとだ。お、連れてる娘は見ねぇ顔だが…」

「はい、今日からここで働かせていただいてるヒロミと申します」

「おお、東方から来たって噂の娘か。丁寧にありがとよ、俺ぁここ

で料理長をしてるマルトーっってんだ、よろしくな!!」

わははと豪快に笑いながら握手を求めてくるマルトーは少しリーナに似ている気がする。
そんな記述は小説内には無かったがもしかしたら兄妹なのかもしれないと思い尋ねてみることにした。

「あの…マルトーさんとリーナさんは兄妹なんですか?」

「なっ、ヒロミ…あたいとおやっさんは似ても似つかねぇだろうがよ」

「わはは!!親子ですかと聞かれることもあるがな、残念ながら赤の他人だ。おっと料理が出来たぞ。運んでくれるんだろ?」

出てきた料理のあまりの豪華さに息をのんでしまう。

「うわぁ…凄い豪華ですね、おいしそう…」

「褒めてくれるのは嬉しいけど、つまみ食いは厳禁だぜ?」

「食べませんよ!そもそもつまみ食いする人なんていないでしょう?貴族の人っていつもこんな豪華な食事食べてるんですか?」

「いやいや、リーナは最初のころ「おやっさん!!」……あー、いつも豪華ってのは否定しねぇが、今日はちょいといつもより豪華だ。何でも明日召喚の儀?とやらあるらしくてな。ま、俺らには関係のねぇ事だ。さ、飯が覚めちまう前に運んだ運んだ」

料理を食堂に運び配膳に取り掛かる。給仕中に生徒たちの話し声が

聞こえてくるが、その話の内容のほとんどが明日の召喚の儀についてのもので、どんな使い魔が欲しいという話で持ちきりだった。
ここにきて私はあることに気がついた。そう、原作キャラらしき生徒を見かけないのだ。
どんな顔なのかは知らないが少なくともルイズやキュルケ、タバサ、ギーシュ辺りは一目でわかる程度には特徴的なんではないだろうかと思う。

キョロキョロしながらサラダを並べていると、並べるや否や目の前に青髪の美少女が来てサラダを貪り始めた。
これタバサだよね？気持ち悪いぐらいサラダだけ食べてる…あ、本読みだした。間違いなくタバサだ。
席の位置から召喚の儀式の話をしている生徒と同学年だと推測される。
どうやらちょうど原作が開始する寸前の学院に来れたらしい。
ちゃんと原作の年に送ってくれて神様ありがとう…違う年じゃないかと凄い不安だったよ。
しかしタバサ可愛いな…口の前に草出したら本読みながら黙々と食べてくれそう。
ダメだこの子かわいすぎる、もう抱きしめていいよね？お持ち帰りしてもいいよね？
なんて考えていて「サボってんじゃねぇ」とリーナに怒られたのはまた別の話…

第五話（後書き）

オリキャラ出してみました

最初はツインテールのツンデレ娘にしようと思っていたのですが、ツンデレ分はルイズさんでおなか一杯なんで変更しました

そもそも「べ、別にあんたのために仕事教えてあげてるんじゃないんだからねっ！！」って言う台詞を言わせたかっただけなのでｗ

オリキャラ出した理由なんですが、原作に登場しない使用人をその他大勢として描くよりもキャラ付けしておいた方が今後話が広げやすくなるからです

使用人サイドから物語を描くとどうしてもシエスタとマルトーばかりに頼ることになりそうだったので選択肢を増やそうと思いました

私としては今後もちょくちょく話に絡ませようと思ってるんですが、読まれている皆さん的にはどうなんでしょうか？

「別に登場させても良いよ」とか「あんまり出さないでほしいな」等皆さんの意見を聞かせていただきたいです

是非お願いします、それでは次回をお楽しみに

第六話

第６話「ルイズさんが平民を召喚したようです」

学院に勤め出して初めての朝、リーナが私を起こしにきてくれた。
その時に何気なく置いてあった杖が見つかってしまったのが事の始まりだった。
「魔法使えんのかい？」と聞かれ半ば寝ぼけていた私はうまい言い訳が浮かばず「ん～」と曖昧な返事をしてしまった。
それをＹＥＳだと受け取ったリーナは前から魔法に興味があったらしく、どんな魔法が使えるのかとしつこく聞いてきた。
治癒魔法が使えると教え今度見せる約束をしてその場は何とか切り抜けたのだが、着替えて厨房に行くとすぐに使用人たちに囲まれてしまった。

「ヒロミ魔法使えるんだって？リーナに聞いた」

「治癒出来るんだろ？リーナに聞いた」

「魔法が使えるなんて貴族様だったの？あ、リーナに聞いたんだけどね」

終わった…どんだけ広まってるんよ…黙っといてくれって釘さすの忘れたけど広めるの早すぎだ…
面倒なことになったなぁなんて思ってると噂を広めた本人がホクホク顔でこちらに向かってくるのが見えた。
文句の一つでも言ってやろうとしたのだが、向こうのほうが口を開くのが早かった。

「怪我人連れて来たよ」

「はい？」

「だから怪我人連れて来たんだって、治してやんなよ」

一瞬意味がわからなかったが、どうやら今魔法を見せろと言う意味らしい。

既に周りには人垣が出来ている。面倒だ、非常に面倒なことになった。

ちなみに怪我人というのは顔にあざが出来ているメイドさんだ、どうやら先日貴族に殴られたらしい。

ダメだ…かわいそうと思ってしまった…治さなかったら罪悪感が残ってしまう…

どうせこの状況から逃げられないだろうし腹を括るしかない…か。

「わかりましたよ！！治せばいいんでしょう治せば！！」

私の台詞に周囲から「おー」っと歓声が起こる、皆興奮しているようだ。

魔法になじみのない使用人の人たちなら私の魔法を見ても違和感を感じたりはしないはずだ、しかし生徒や教師となってくると話は変わってくるので釘をさしておく。

「治しますけど、私が魔法使えるって言うのは口外しないでくださいね。特に貴族様に知られると絡まれたりと色々面倒な事が起こると思いますので。んじゃあいきますよー『ケアル』」

私が杖をそれっぽく動かして魔法を使うとメイドさんの顔のあざが

みるみる治っていった。
この世界に来て初めて回復魔法を使ったのだがその効果に自分自身驚いている。魔法って便利だなぁ。
傷が治ったメイドさんは何度も私に頭を下げている。なんだか照れるな。

「スゲぇ！！」

「ほんとに魔法使っちゃったよ…」

「俺も怪我してんだよ、治してくれ！！」

「私も」

「僕も」

こうなるとは思ってたけどさ、長蛇の列が出来たね。ほんとね、どんだけ怪我してんだよと。
仕方がないので全員治療することにした。
1人ずつやっていたらキリがないので5人ずつだ、十字型に5人を並べて真ん中の人に魔法を使う、うんゲームの通り周囲の人も回復してるね。
凄い勢いでお礼を言われる。大勢の人に感謝された経験なんてほとんどなかったのでなんだか恥ずかしい。
照れながらも治療を続け、全員の治療を終えた頃には朝食の給仕が終わっていた。
仕事に参加できなかったことを皆に謝ったが、皆には笑顔で「全然構わないよ」と言われた。特に男性の目がなんだか優しかったのが気になる…

「しかし、これだけの治療の腕がありゃあ医者いらずだな！」

「そうだな！これから怪我したらヒロミに治して貰おう！！」

勝手な事を言いながらも凄い勢いで盛り上がっていき、結局「怪我したらヒロミのところに行け」みたいな感じで落ち着いた。
面倒だ…凄く面倒だ…まぁ怪我してる人を放っておくわけにもいかないので頼まれたら治すのだが。
そういえば昨日聞いた話では、今日は召喚の儀式があるらしい。是非見てみたいのでさっさと仕事を終わらせようと朝食をささっと食べ早速仕事に取り掛かることにした。

しかし昨日とは勝手が違った。
掃除と洗濯は昨日リーナに教えられたとおりに進めていった。
これらは問題なかったのだのだが昼食の準備のため厨房に戻ったあたりから異変が起こった。

まず私が厨房に戻るや否や3人のコックが手を包丁で切ったと言って私のほうにやってきたのだ。
3人に魔法をかけて治してやったところ「お礼に料理運ぶの手伝う」とか言いだした、しかも俺が俺がと言い争っている。
どうしてこんな状況になったのかわからなかったので横で苦笑しているマルトーに尋ねてみたところ。
「あー…ほら、ヒロミが朝照れながら皆の治療したろ？この馬鹿共はあの姿見てさ…うん」とのことである。
モテ期が来たと解釈した。3人とも全然好みじゃないけど他人に好かれて嫌な気はしない。
それに仕事を手伝ってもらえるならそれに越したことは無い、なんせ今日はさっさと終わらせて召喚の儀式を見たいのだ。

3人に手伝って貰うべく満面の笑みで話しかけてみる。

「皆さん手伝ってくださるんですか？まだ仕事に慣れていないので助かります。ありがとうございます！」

「「「お安いご用です！！」」」

チョロい…チョロすぎる…なんだか悪女になった気分だ。

3人と会話しながら料理を運んだのだが、純粋に人手が多いとあって早く仕事を終えることが出来た。

給仕も終わったことだし食事をして他の仕事に戻ろうと思ったところで3人から声をかけられる。

「よかったらお昼を一緒に食べませんか？」

「ええ、喜んでご一緒させていただきます」

本当なら1人で食べてさっさと仕事に戻りたかったのだが、手伝って貰った手前無下に断ることもできずに昼食を一緒に食べることになった。

せいぜい30分くらいで解放されるだろうと思っていたのだが、その判断は甘かった。

厨房は食事時以外は意外と暇らしく彼らの私への自己アピールは2時間にも及び、見かねたマルトーの拳骨で遂に終止符を打たれたのであった。

マルトーに礼を言い仕事に戻ったのだが、2時間のロスが響き召喚の儀式を見ることはできず、ガッカリしたまま眠ることになった。

その翌日、朝から治療・掃除・洗濯・給仕に追われ、やっとの思い

で遅い昼食にありついた時のことだった。

「ヒロミさんはいますか！？」

黒髪のメイドが勢いよく厨房に飛び込んできた。なんで私を探しているのだろう、はて？どっかで粗相でもしちゃったかな？
怒られるのは嫌だが返事をしないわけにもいかないので食事の手を止めて返事をする。

「はい、私がヒロミですが…どちらさまでしょうか？」

「良かった…いた。私はここのメイドをしているシエスタといいます。ヒロミさんの力が必要なんです、ついてきてください！！」

なんだかよくわからないけどシエスタの方から接近してきた。
言われるがままに厨房からついて出るとシエスタはすごい勢いで走っていく。
どこに向かっているのか聞いたところ、ミス・ヴァリエールの使い魔が怪我をしているから治してほしいとのことだった。
すっかり忘れていたがギーシュとサイトの決闘があったらしい。
部屋につくとサイトが傷ついた姿でベッドに横たわっていた、水の秘薬を使い治療したがここまでしか治らなかったらしい。
そんな折に傷を綺麗に治した私の回復魔法を思い出したため急いで呼びに来たのだそうだ。
いや、治るかどうかはわからないものの魔法を試してみるのは構わないんですけどね。
ピンクの悪魔がいるんですよ。ベッドの横に。
いやだなぁ…凄い睨まれてるし…魔法使ったら深く突っ込まれそうだしなぁ、出来れば魔法使わずこの場を上手く去りたいんだけど……

「シエスタがさっき言ってた凄い治癒魔法の使い手ってあんたなの？」

初対面であんた呼ばわりされた!!しかもシエスタ魔法のこと喋っちゃってるよ、凄い治癒魔法にハードルもしっかりあげてくれてるし。

クッ…腹立つ…でもここで逆らうとそれはそれで面倒だし素直にハイハイ言うしかないか。

「はい!!ヒロミさんの治癒魔法は凄いんです!!」

「えっと…凄い治癒魔法かどうかはわかりませんが、一応治癒魔法なら使えます。その少年を治癒すればよろしいので？」

「そうよ、コイツ私の使い魔なんだからしっかり治しなさいよね！」

「やれるだけやってみましょう

……

……ケアルジャ」

ちゃんと杖持って唱えたよ、しかし詠唱長いな。これで治らんかったら私には手の施しようがございません。

……あれ？誰も治せなかったからまだサイト寝てるんだよね？ここで治せたらまずくね？しまった!!手抜けばよかったか？

起きるな!起きるな!!絶対起きるなよ!!!いいか？絶対だぞ!!!!

そんな思いとは裏腹にサイトの傷はみるみる塞がっていき遂には目が開いた。

状況が飲みこめていないらしく周りをキョロキョロしている。

「ルイズ…シエスタ…？」

「目が覚めた？」

「ああ、俺は？」

「あれから、ミス・ヴァリエールがここまでサイトさんを運んで寝かせたんですよ。先生を読んで治癒の呪文をかけて貰ったりして、大変だったんですよ」

「治癒の呪文？」

「あんた治癒の呪文も知らないの？秘薬代も馬鹿にならなかったんだからね！」

「秘薬？俺の為に？…んじゃあ俺はルイズのおかげで目が覚めたってわけか」

「違うわ…そうだ、何よさっきの呪文、あんな呪文見た事ないわよ！！」

「ただの水の魔法ですよ」

「嘘おっしゃい、詠唱も無かったし聞いたことない呪文名だったわ」

「詠唱は小声でしておりました。呪文は…系統魔法の改良版とでもお考えください」

「そんなので納得できるわけないでしょ！！いいから説明しなさい

よ！！」

「落ち着いてください、ミス・ヴァリエール。あなたの使い魔さんは病み上がりなんですよ？あまり大きい声を出すと体に響きます。使い魔さんお体は大丈夫ですか？」

ふぅ…予想通りと言うかなんというか…凄い追及されたなぁ…なんとかサイトに話を振って無理矢理終わらせたけど…怪しまれてるんだろうなぁ。

考えても仕方ない、か。ここでサイトが私の質問に答える

「ああ、大丈夫だ。あんたが治してくれたのか？」

「結果的にはそうなりますね、尤もミス・ヴァリエールが秘薬を使ってあなたの治癒をしていなかったら治せなかったでしょうけどね。ミス・ヴァリエールに感謝してくださいよ」

「そっか…ルイズには後できっちりお礼言っとくよ。ところであんたの名前は？」

「私ですか？私はヒロミと申します」

「そっかありがとなヒロミ。俺は平賀才人だ、サイトって呼んでくれ。ところで…ヒロミって日本人か？」

「ニホン？はて聞いたことありませんね。私はロバ・アリ・カリイエの出身ですが？」

「そっか、日本人じゃ「ロバ・アル・カリイエですって！？エルフの地を超えて来たの！？」……ないのか」

「わかりません家で寝ていたはずだったのですが、気が付いたらトリスタニアの地におりましたので」

ピンクうるさいなぁ。悪い子じゃないのは知ってるけど話に割り込まれると凄くイライラする。
せっかく人がサイトの為に秘薬買ったことをヨイショしてやってんのに。
そしてサイトゴメンよ…迂闊に私も日本人です。とは言えないんよ。異世界人だなんてばれたら注目の的になっちゃうからね…目立つと不幸を呼び寄せるてしまうのが最近の主人公の特徴なんだよ？
まぁ近いうちに言う機会が来るでしょう、その時に言うから勘弁してね。
さて…ルイズにこれ以上追及されるのも嫌だしそろそろお暇しますか。

「それでは私はまだ仕事が残っておりますのでこれで失礼します」

「あ、ちょっと待ちなさいよあんたにはまだ聞きたいことが…」

「いえいえ、まずはサイトさんとお二人でゆっくりお話でもしてください。さ、シエスタさんも行きましょう」

「あ、はい」

なんとかルイズの部屋から逃げ出した私は厨房へ戻りすっかり冷めきった昼食を食べ始めるのであった。

第六話（後書き）

ようやく原作に合流しましたね

ルイズ・サイト・シエスタ等原作組みが多く登場してきました

誤解されているかもしれないので一応言っておきますが私はルイズが大好きです

初期ルイズのイライラっぷリも含めて好きなのでこんな感じの文章に仕上がってしまっただけです；；

今後は展開をどこまでいじるか考えないといけません

全く同じ展開だとつまらないと思うので、主人公という不確定要素を交えて多少はいじることになるのですが

話の本筋自体をいじるかどうかはまだ決めておりません

そのあたりも楽しみにしていただけたらいいかな。と思います

第七話

私が学院に来て約1週間が過ぎた、今日は虚無の曜日いわゆる日曜日らしい。
それでもメイドの仕事に休みはない、休憩が多い日は存在するのだが基本的に決まった休みは存在しないため、掃除に洗濯に給仕と普段と何一つ変わらない日常を過ごしている。
この仕事を始めてから主婦の偉大さが骨身にしみて感じられるようになったわ…

さて、ここで問題が一つある。
突然だが私はゼロの使い魔の小説を読んだ事がない。
それでもある程度の内容を知っているのはアニメを見ていたからだ。
ただ…ほとんど見てないんだよね。具体的には対ギーシュ編までは毎回見ていたのだが、それ以降は凄く飛び飛びにしか見ていない。
つまりここから先の展開が凄く怪しい、と言うかほとんど何もわからない手探りゾーンに入ることになる…
冒険にはわくわくとドキドキがつきものだと言い聞かせて今日から生きていかないとな…

第7話「昔から人を呪わば穴二つといいまして…」

サイトは倒れて以来、頻繁に厨房に来るようになった。
詳しい原因はわからないがルイズを怒らせては食事抜きにされる事が度々あるらしい。

その結果として生じる空腹という問題を満たすために厨房に訪れるようになった。
またサイトはギーシュとの決闘で勝ったことからマルトー達に「我らの剣」ともてはやされている。
使用人の皆はサイトのことを気にいっているらしく、特にシエスタは目の色を変えてサイトに接しているように見える。

そういえば昼食を食べている時にサイトが話しかけてきたことがあった。
この前の治療のお礼を改めて言いに来たらしい。
「気にしなくていいんですよ」と言いながら頭をなでたら赤くなっていた。なかなか可愛い奴だ、今後ともからかってやろう。
それ以来サイトと話している時にはシエスタの視線が厳しい。
ずっとチェックされているせいで私が日本人であることをサイトに未だ伝えれていない。
出来れば二人っきりになった時に言いたいんだけど…シエスタ…恐ろしい子…

さて、そんなサイトだが今日はルイズと一緒に街に剣を買いにいくらしい、朝会った時に凄く嬉しそうに報告された。
正直凄く羨ましい、お金が足りなくて泣く泣く剣を買うのを諦めた私の気持ちを考えてほしい。
どうして働いてないサイトが剣をゲットできて、必死に働いてる私が剣をゲット出来ていないのかと小一時間問い詰めたいぐらい羨ましい。
羨ましがりながらも今日も1日一生懸命お仕事しましたよ、掃除に洗濯頑張りましたよ。チクショー
次にサイトに会った時に『武器を盗む』で盗んでやろうか…いやダメだ、さすがに非人道的すぎる。
仕方ないな、働いて働いて、いつか溜まったお金で買おう…

一日嫉妬心を抱きながら働いたせいか、いつもより疲労がたまっている気がする。

こういう日はさっさと寝るに限る。という訳でベッドに入るがなかなか寝付けない。

邪念が邪魔をしているのだろうか？仕方がないので気分転換に少し風に当たることにした。

宿舎から出て外を散歩していると中庭のほうに複数の人影が見える。

こんな時間に何をしているのだろうかと好奇心から近づいてみることにした。

「ヒロミか？何してんのこんなとこで？」

「サイトさんですか？それにミス・ヴァリエールも、えとこちらの方々は？」

名前ぐらいは知ってるんだけね。一応聞かないとおかしいよね、初対面だし。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アルハンツ・ツェプルストーよ、それでこっちの子が」

「…タバサ」

「ミス・ツェプルストーとミス・タバサですね、私はヒロミと申します以後お見知りおきを」

そこにいたのはルイズ、サイト、キュルケ、タバサの４人だった。

何でもルイズが買った剣とキュルケが買った剣のどちらをサイトが使うかということで揉めているらしい

。

え？何スカ？サイトさん剣２本も貰ったんスカ？
マジ羨ましいんですけどおおおおおおおおおおおおおおお、１本分けてください。いやマジで、いらないほうでいいんで！
あれ？なんで２人からプレゼントされてるの？

「あの…ミス・ヴァリエールがサイトさんに剣を買うのはわかるんですけど、どうしてミス・ツェルプルトーはサイトさんに剣を買われたんですか？」

「どうしても何もダーリンには良い剣をプレゼントして何が悪いの？」

「だからサイトには私が買った剣があるって言ってるでしょ！！」

「ああもうわかったわよ、きりがないわ、さっさと決着つけましょ」

ルイズがキュルケに突っかかって、キュルケのほうも喧嘩腰で言い返している。なるほど、事情は大体飲み込めた。
大方ルイズがサイトに剣を買うと言う話を聞き、それにキュルケが乗っかったんだろう。
買った剣をサイトにプレゼントして…そりゃ揉めるよね。
その後、口で言い争っていても仕方ないので決着をつけようと言う話になって中庭に出てきたのだろう。
一体どうやって決着をつけるつもりなのだろう？やはり決闘でもするのか？
まぁ傍観していればどうなるかはわかるんだけどね。

――――――５分後

サイトが塔の上からロープでブラさげられている。
怪我するのも馬鹿らしいという理由で、地面から魔法を打ってロープを切った方の勝ちと言うルールになったらしい。
…彼女らからするとサイトが怪我をするのはいいのだろうか？正直これでサイトが怪我しても私は治す気など全くない。
キュルケは余裕の様子でルイズに先行を譲り、ルイズは杖を構えて呪文を唱える。

「ファイヤーボール！！」

ルイズの動きに合わせてサイトの後ろの壁が爆発した。
うおっ？何？怖っ！！今のがルイズの魔法？一歩間違えたらサイトバラバラだよね？治療とかしてる間もないよね？
キュルケが腹を抱えて笑っている、ルイズは…悔しそうにしてるってことは失敗？まぁ少なくともファイヤーボールではなかったよ、うん、イオだよ。
ルイズの魔法について考えている間にキュルケは同じ「ファイヤボール」であっさりロープを切っていた。同じ魔法にも関わらずルイズの魔法とは全く異なり火の玉が出ていた、間違いないこれが本当のファイヤーボールだ。
サイトは地面に落ちる寸前でタバサに助けられて無事だったが、ロープでぐるぐる巻きになったままである。ロープをほどいてあげようとサイトに近づいた瞬間…

「きゃあああああああああ！！」

背後からキュルケの叫び声が聞こえた。振り返ってみると１０メートルはありそうな巨大なゴーレムがこちらに歩いてきている。
このままだと直線状にいるサイトは踏みつぶされてしまう、縄をほどいている時間は…ないか、ならば戦うしかないかな。怪我とかは

したくないなぁ…
そう考えて杖を取り出し、戦う構えを見せたところで突然横からやってきた何かに体をすくい上げられる。
すくいあげたのはドラゴンだった、タバサの使い魔らしい。
ドラゴンにのって上空からゴーレムを見ていると壁を壊している。
何をしているのだろうかと疑問に思っていたらゴーレムは急に学院の外に向かって歩き出し、草原の向こうへと消えていった。

ゴーレムが去った後ドラゴンから地面に降ろして貰った。
私とサイトがタバサに礼を言うとタバサは無言で頷いた。うん可愛い。
皆の話を聞いているとあのゴーレムは宝物庫から何かを盗んでいったらしい。
とりあえず衛兵に報告しにいくか…移動しようとしたところタバサがこちらをじっと見ている事に気付いた、目と目が合う。

「…杖」

「はい？」

「…あなたはメイド？」

「はは、杖取り出したの見てましたか、私はちょっと魔法が使えるメイドさんとでも思ってください」

「…そう」

タバサの私に対する興味はすぐに失われたらしい。良かった…魔法使う事になったら面倒だっただろうな。

翌朝――――――――
昨日の盗人騒ぎの後、衛兵にざっと報告し盗賊とか管轄違いなので後のことは任せて使用人宿舎に戻ろうとしたのだが。
詳しい話状況を知りたいからと衛兵に呼び止められ、ようやく説明を終わって帰ろうとしたら今度は教師陣に捕まって説明を求められ、最終的に宝物庫に連れていかれて現場検証の手伝いをさせられる始末…
全てが終わった頃には空が明るくなっていた。そして現在に至ると言うわけだ。

現在は昨日の盗難のことで学院長室に呼ばれている。
どうやら犯人は土くれのフーケとかいう有名な盗賊で、盗まれたのは「破壊の杖」とか言う物騒な名前の秘宝らしい。
周りには教師らしき人たちと、目撃者としてルイズ、サイト、キュルケ、タバサ、私がいるのだが…眠い、他の奴らは少しは寝てるんだろうなぁ…
さっきからずっと教師達が責任は誰にあるだとかそういう話を延々しているのだが…そんな話を聞かされるだけなら部屋に帰って眠りたい、一睡もしてない奴の身になってほしい。

オスマン氏がやってきて他人を責めてばかりの教師を諫めた。
責められていた教師が感激してオスマン氏に抱きつき…あ、お尻触った。
うわぁ…誰も突っ込まない…オスマン氏がリアルにセクハラしたみたいな空気になってる。かわいそうすぎる。
きっと場を和ませようとしたんだろうな、誰かツッコんであげればいいのに。
私？私はツッコまないよ、さっきから涙目なオスマン氏と3回目があってるけどツッコまない。

メイド風情が学院長にツッコムなんて恐れ多くて出来ませんとも！
ええ。
決して眠くてそれどころではないという理由ではないよ。

…あ、オスマン氏なかったことにして話進め出した、事件の詳細聞くようだ。
説明するのも面倒なので黙っていると代表してルイズが説明し始めた。
ルイズが昨日の事件の事を語り終えたところで若い女性が部屋に入ってきた。
ミス・ロングビルと呼ばれたその女性はオスマン氏の秘書であるらしく、今朝からフーケの行方を調査してアジトらしきものを見つけてきたらしい。
その情報を基に捜索隊を結成して「破壊の杖」を取り戻しに行くということで話はまとまった。ああ、やっと部屋に戻って一眠りできる…

後は捜索隊のメンバー決めるだけだ…眠い、ほらさっさと手上げろよ…何で誰も上げないの？
おおっルイズがあげた！！偉い！！神に見える。キュルケとタバサも…ありがとう…これで私眠れます…
「生徒たちをそんな危険にさらすわけには…」みたいな反論が入った…ほんと空気嫁。まとまった話を掘り返さないで…睡眠時間が減っていく…
いや、最後はオスマン氏がきっちりまとめてくれるに違いない。信じてます！

「ふむ…では君が行くかね？」

「い、いえ…私は体調が（ｒｙ」

よーし、上手く反論をつぶした、さすがオスマン氏頼りになるなぁ…ん、なんかタバサから順に1人ずつ褒め出した。
なるほど、戦力として十分ってアピールですね。わかります、十分に強さを説明した後オスマン氏は威厳のある声で言った。

「この3人に勝てると言う物がいるのなら前に一歩出たまえ」

誰もいなかった、さすがだ。オスマン氏いい仕事したよ。
眠りにつける喜びを噛みしめているとニヤッと意地悪い笑みを浮かべたオスマン氏と目があった。あれ?嫌な予感がするよ?

「まぁ…確かに生徒たちだけで行かせるのは不安だという言い分もわからんでもない。そこでじゃ、ミス・ヒロミも同行させよう」

「オールド・オスマン!?たかが平民風情のメイドを同行させたところで何になると言うのです?」

「そうですよ!!魔法も使えない平民など彼女らの足手まといになるだけですわ!!」

「そ、そ、そ、そうですよ、私なんかがついて行っても皆さんの足手まといになってしまいますので部屋のベッドの中でおとなしくしておきます」

「大丈夫じゃ、ミス・ヒロミはこう見えても高い戦闘能力を持っておる、彼女の実力はワシが保障する。ミス・ヒロミの代わりに誰か行くものがおるのなら話は別じゃが」

「う…学院長がそこまでおっしゃるのでしたら」

「決まりじゃの、では馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。ミス・ロングビル、彼女達を手伝ってやってくれ」

「わかりました」

「魔法学院は諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ちょっとぉぉぉぉ!!オスマン氏何締めてるんですか?寝させてください。本当に寝させてください…

部屋から出ていく際、捜索隊から抜けさせてもらえるようオスマン氏に訴えたが「さっき助けてくれなかったお返しじゃよ」と笑顔で一蹴された。

こうして私たちはミス・ロングビルを案内役に「破壊の杖」の捜索に早速出発することとなった。

第八話（前書き）

今回は少し戦闘シーンを書きましが…難しい
臨場感とか皆無です。
もうちょっとうまく書けるようにならないとな…

第八話

オスマン氏の嫌がらせによってなぜか盗賊退治に付き合わされることになってしまった。
盗賊ねぇ、この前の奴らみたいなのだったら楽勝なんだけど…魔法使い相手に戦うかもしれないのは初めてだ。
仮に戦うことになったら…と考えるとやはり怖い。
アビリティが全部使えるからといって基礎体力が増えたわけでも運動神経が良くなったわけでもない、普通の女の子のままだ。
不意打ちを喰らってしまえばあっさりとやられてしまうかもしれないし、他にも不安なことはある。

例えば火傷やちょっとした傷ぐらいなら回復魔法で治せることは既に実証されているが、体の一部…例えば腕等を失ってしまった場合も回復魔法で元通りになるのだろうか?傷口はふさがるかもしれないがおそらく元通りにはなることはないと思う。
レイズのような蘇生魔法の効果もゲームでは『戦闘不能』からの復帰とされている。おそらく死亡した対象に使っても効果は無く、気絶している対象に使うと目を覚ますといった効果ではないかと推測される。
これも回復魔法と同様に考えられる。首を切って殺されたような相手に蘇生魔法を使ったからといって蘇るだろうか?間違いなく無理だ。出血多量によるショック死とかなら蘇りそうな気もするが、おそらく特例は無いだろう。
もしかしたら蘇生魔法の効果は死者を蘇らせるものなのかもしれないが、実際のところどうなのかを確かめていないのでわからない。
動物などで試してみてもいいが、人の場合と動物の場合では効果が異なってくるかもしれないので、確実に効果を知るためには誰かに死んでもらうしかないのだ。そんなもの試せるわけがない。

そう考えると自分にリレイズがかかっている状態でも全く安心はできない。
死にたくないが目立ちたくもない…ここで変に目立ってしまうと今後ロクなことがないに違いない。
凄いジレンマだ…やばくなったら補助魔法は積極的に使うけど…あんまり攻撃魔法とかは使わないでおこう。

第八話「このサブタイトルの要らなさに気付いた、でも今更なくすのもどうかと思うので今後もつけ続けるよ！！」

盗賊退治のために馬車が用意された、馬車って言うか荷車って言ったほうがしっくりくるような物だ。
ミス・ロングビルが馬の手綱を取ろうとしたので私が手綱をとると必死にアピールし譲ってもらった。
危ない危ない……ルイズの近くにいるとこの前の治癒魔法のことを追及されそうで面倒だからな…ここなら話しかけられる確率は下がるだろう、よしんば話しかけられたら馬を操るのに余裕がない振りして誤魔化そう。
出発する前は話し掛けられたら余裕がない振りをして誤魔化すつもりだったのだが、実際に出発すると本当に余裕がない、馬がなかなか言うこと聞いてくれない。集中していないと明後日の方向に進んで行きそうだ。
『勧誘』さえ出来ていれば言うこと簡単に聞いてくれるのに…人の目があるところであまり目立ってしまうのは良くないから仕方がない。

こっちで馬と必死に格闘している間、後ろの方からは話し声が聞こえてくる。
話の内容までは聞く余裕がなかったが、キュルケとルイズが揉めているようだった。よっぽど相性がよろしくないらしい。

しばらく馬車を走らせると木々が生い茂っている森に到達した。
ミス・ロングビルの提案でここからは徒歩で進むことになった。
木々が生い茂っているだけに昼間にも関わらず森の中は薄暗い、お化けでも出てきそうな雰囲気だ。
キュルケが怖いとか言ってサイトにベタベタしている。何でこの人こんなに余裕あるの？フーケが怖くないのかな？
更に歩いていると広場に出た。中央に小屋がある。
ミス・ロングビル情報によるとその小屋にフーケがいるらしい。
今も中にいるのだろうか？人がいるような気配は感じられないけど…
どうするか皆で相談している、当然ながら私は一切口を出さない。
結局タバサが提案した作戦を実施することになった。

その作戦とは一番素早いサイトが部屋の中の様子を確認、中にフーケがいたら外に誘導して出てきたところを一斉に叩くと言う作戦である。
うん私は安全だね。文句のつけようのない完璧な作戦だ！
サイトがキュルケに買ってもらったと言う剣を鞘から抜くと左手のルーンが光り出した。あぁ…剣いいなぁ
…
いかんいかん！羨ましがってる場合じゃない。気を引き締めないと…サイト早ッ！
サイトの動きが思っていた以上に素早かった、何あの動き？あれは完全に人間の動きを凌駕している。
中を覗いている…どうやら中には誰もいないらしい。

フーケはもう去ってしまったのだろうか？それともこっちが接近してくるのに気付いて抜けだしたのだろうか？或いはそもそもここに居なかった？

タバサが罠の無いことを確認してスタスタと小屋の中に入っていった。

キュルケとサイトもそれに続こうとしている。

ルイズは外で見張りをするつもりらしい。

ミス・ロングビルは周囲の様子を偵察してくると言っている。

…さて私はどうしようか。どこが一番安全だ？

小屋の中について行く？いや、罠があるかもしれない。と言うか罠がある気しかしない。

外で待ってる？これはいきなり襲撃される可能性が高い、基本的に真っ先に攻撃されるよね。

偵察に行く？うん、バッタリ出会っていきなり攻撃される事だけ気を付ければ他の選択肢よりは安全な気がする。

「ミス・ロングビル、私も偵察に…」

「ミス・ヒロミ、あなたは生徒たちの安全を確保するためにオールド・オスマンが捜索に参加させたのでしょう？それならば生徒たちの近くに居てあげてくださいな」

うぐぅ…正論だ。反論できない…

外か中かなら…まだ外のほうがいいな。

「わかりました、私はミス・ヴァリエールと外で見張りをしています」

「ええ、生徒たちをお願いしますね。それでは私は偵察に行ってき

ますので…」

ミス・ロングビルは森の中に消えて行ってしまった。
さて…ルイズと二人残されたわけだが外での見張りと言うのは暇だ。

「ほんとにここにフーケが居たのかしら?それにしては何も無さすぎるわ」

「そうですね、この小屋にいたという情報自体が罠の可能性もあると思います。警戒しておくに越したことはないと思いますよ」

「随分余裕に見えるわね…あなたホントに何者なの?オールド・オスマンにも偉く信頼されてるみたいだったけど」

「ただの癒しのメイドさんですよ」

「ただのメイドはこんなとこ来ないわよ!!…そんなことよりあの時の治癒魔法について詳しく聞きたいの」

「ん?ただの水魔法をちょいと応用してるだけですよ」

「違うわね…いや、この際何でもいいの。あなた病気の人を治したり出来るかしら?」

こんなとこ来ないわよ!!って無理矢理来させられたの見てたでしょうに!!あれ?何か違和感があったような…呼び名があんたからあなたにレベルアップしてる!!どっかで信頼度が上がったか?
そういえば目つきもどことなく真剣なような…珍しい魔法を教えろ!!って感じじゃないねぇ…誰かの病気を治したい?
うーん適当に誤魔化してもいいんだけど、すがるような目で見てる

なぁ…自分のことはあんまり話したくないけど、話だけでも聞いてみるか。

「病気…ですか？どんな病気か見てみない事には何とも言えませんね、何か事情がおありのようですね？」

「…実はキャアアアアアアアアアア」

会話していたルイズが急に叫び出した。視線の先では巨大なゴーレムが小屋の屋根を吹き飛ばしている。なんてタイミング悪い…いち早く反応したタバサが竜巻を生み出し攻撃、キュルケもそれに追撃を加えるが、ゴーレムには全く効いていない。

これは逃げたほうがよさそうだ。タバサとキュルケは既に逃走に入っている。

ルイズを連れて逃げようとしたがルイズは動こうとしない。

まさか戦う気？いやいや、せっかくゴーレムの背後に居るんだから逃げましょうぜ、さすがに見捨てるわけにはいかないからあなたが逃げないことには私も逃げれないんですって。

ああっ！ゴーレムの頭で爆発が起きた…ほらこっち向いた…ルイズさん逃げましょう、ルイズさんってば！！ルイズは全く動こうとしないが、私の思いを汲み取ってくれたのかサイトが小屋の方から叫ぶ。

「逃げろ！ルイズ！！」

「いやよ！あいつを捕まえれば誰ももうわたしをゼロのルイズとは呼ばないでしょうよ！」

逃げたくないらしい。サイトが必死に説得しているがルイズは逃げ

ようとせずにゴーレムに魔法を打ち続ける。
しかしゴーレムには全く魔法は通用せず、ゴーレムに踏みつぶされそうになったところでかろうじて横から飛び出してきたサイトが助けた。
サイトがルイズに死ぬ気かと怒っている。私から見ても死ぬ気に見える。
するとルイズはぼろぼろと涙を流しながら語り始めた。ルイズはゼロと馬鹿にされるのが悔しかったから戦おうとしていたのだと言っている。その話を聞いてサイトの顔つきが変わった。何か思うことでもあるのだろうか？戦う決心をしたとか言うイベントではないことを祈ってます。
その間にもゴーレムは迫ってきている、大きく拳を振り上げたところでサイトはルイズを抱えて逃げ出した。やっと逃げれる…私も慌ててサイトについて行く。
サイトの動きは速い、ルイズを抱えて走っているにも関わらず、何も持っていない私と同じぐらいの速さで移動している。
タバサの風竜が私たちを助ける為に飛んできて、サイトの目の前に着地した。

「乗って！」

風竜に乗っているタバサが叫ぶ。
サイトは風竜の上にルイズを押し上げるとゴーレムの方に向き直った、まさか…戦うつもり？いやいや、ソンナバカナ…

「あなたたちも早く！」

タバサが焦ったような口調で言う。そういえば初めて焦ってるところを見たなぁ…なんて今はそれどころではない。
サイトが風竜に乗ろうとはしないのだ、やはり戦うつもりらしい。

そうこうしている間にもゴーレムは距離を詰めてきている。
まずい、乗る乗らないで揉めてる間に全滅なんてシャレにならない。

「ミスタバサ！行ってください！！私がサイトさんを援護します！！サイトさんは戦うつもりなんでしょう？なら私もお手伝いしましょう。援護ぐらいなら出来ます。それに1人よりも2人の方が勝つ可能性は高いでしょう？」

「ヒロミ…わかった、頼む！」

私は言うや否やゴーレムに背を向けて走りだした、ゴーレムの拳が振りおろされるがサイトもかろうじてかわしたようだ。風竜も攻撃に巻き込まれず上昇していた。誰も巻き込まれなかったことにまずは一安心。
懐から杖を取り出しゴーレムから距離をとりながら詠唱に入る、十分に距離をとったところで魔法が発動する。

「マバリア」

呪文を唱えるとサイトの体が光に包まれた。
これで少しは戦いやすくなったろう、後はサイトが倒してくれることを期待しよう。
一応自分にもマバリアを掛けようと詠唱に入ったところで衝撃の光景を目の当たりにすることとなる。
ゴーレムのパンチを受けとめたサイトの剣が根元からポキリと折れたのだ。
散々名剣だと言ってサイトが私に自慢していた剣があっさり折れている、少しスカッとした。
剣が折れたサイトが慌ててこっちに走ってくる、まさか助けてってことじゃないよね？

「マバリア」

サイトがこちらに来る前にかろうじて魔法が発動する、よかった…
格好の標的にされるところだった。
走ってきたサイトに合流するように走り始めて尋ねる。

「サイトさんもしかして剣折れたから戦えなかったりします？」

「…うん、もう一本の剣置いてきちゃったし…」

なんで剣2本持ってこないんだよ！！コイツつかえねぇ！！これで間違いなく私が狙われるよね！？結局1人で戦わないといけないのか…

「では逃げましょう。私がゴーレムを引きつけますのでその隙に風竜に乗ってください。その後私もなんとかして乗ります」

「…わかった」

「まず二手に分かれましょう、ゴーレムはおそらく私を追いかけてきますがしばらくは呪文の補助効果で移動も早くなっているので簡単には捕まらないでしょう」

そう言ってサイトと二手にわかれた、サイトを戦力外とみなしたらしいゴーレムは案の定私の方に走ってくる。
怖い。メチャクチャ怖い。でもなんとかしないと…
今は私の方が移動早いみたいだが、これはあくまでもマバリアに含まれているヘイストの補助がかかっているからである。
ヘイストの効果が切れるまでになんとかしないとゴーレムに追いつ

かれてゲームオーバーになってしまう
。
まずは倒せる事に一縷の望みをかけて攻撃してみることにした。確かキュルケとタバサが炎と竜巻で攻撃してたけど効いてなかった。雷は効きそうにないから氷だな、あまり詠唱長いと隙も大きくなっちゃうからブリザラぐらいで試してみるか…
ゴーレムから逃げながら詠唱に入る、呪文発動の瞬間はどうしても足が止まってしまうので距離を取っておく必要がある。

「ブリザラ」

ゴーレムの頭ぐらいの大きさの氷の塊がゴーレムにぶつかるがダメージはなさそうに見える、やはり倒すのは簡単では無さそうだ…となると足止めを狙ってその隙に逃げ出すのが無難だ。
無駄にできる時間はあまりない、早速先ほどと同様に速度の利を活かし逃げ回りながら詠唱を行う。

「ストップ」

しかしゴーレムは止まることなく私のほうに走ってきている。
ストップ成功確率低いもんなぁ…と思いながらも他に使えそうな魔法を考える。
ストップを連呼してもいいのだが、ＭＰの残りがどれぐらいか把握できていないので出来るだけ確実に決めれる魔法を使いたい。
でも動くを止めるとなるとやっぱストップだよねぇ…あ、ドンムブ！！ドンムブあるじゃん！！あれは結構な成功率だったはず。少なくともストップよりは効きやすい！！
使うべき魔法を見つけ逃げながら詠唱に入る。
もうヘイストが切れてもおかしくないのでここいらで成功させないと必然的にゴーレムとの接近戦を強いられる。まぁそうなると大体

死ぬよね。

「ドンム「ドゴオオオオオオオオオオオン！」」

私が魔法を放つと同時にものすごい爆発音が響き土煙がモクモクとたちのぼった。
何が起こったのかわからなかったが、煙が晴れた後には砕け散ったゴーレムとロケットランチャーを持っているサイトがいた。
何故サイトがロケットランチャーを持っているのかはわからないが、助かったことは事実だ。体中の力が抜けその場にペタンと座り込んでしまう。
駆け寄ってきた皆が興奮した様子でいる中、タバサが冷静に呟いた。

「フーケはどこ？」

その一言にハッとした。そうだ倒したのはあくまでもフーケのゴーレムであってフーケではない。
周囲をキョロキョロ見まわしていると辺りを偵察に行っていたミス・ロングビルが茂みの中から現れた。

「ミス・ロングビル、フーケはどこからゴーレムを操っていたのです？」

キュルケがミス・ロングビルに尋ねるが、ミス・ロングビルは質問には答えず、サイトの方に歩いて行きロケットランチャーをサイトから取り上げた。
サイトは不思議そうにミス・ロングビルの顔を見つめていたが、ミス・ロングビルはすっと遠のくとロケットランチャーを私たちに突きつけた。

「ご苦労様」

「ミス・ロングビル!?これはどういうことですか?まさか…」

「そう。私が土くれのフーケ。さすがは破壊の杖ね。私のゴーレムがバラバラじゃないの」

ミス・ロングビル、もといフーケは私たちにしっかり狙いを付けている。

タバサが杖を振ろうとしたが、フーケに気付かれてしまう。私たちは杖を捨てるよう命じられ、サイトは折れた剣を捨てさせられた。

私たちが武器を手放したところで勝利を確信したフーケは饒舌に語り始める。

破壊の杖を盗んだはいいが使い方がわからなかったので誰かに使わせて使い方を知ろうと思ったこと。

私が見た事もない魔法を使った時は焦ったが、最終的に思い通りに事が進んで使い方を知ることが出来た事。

フーケが全てを語り終えたところでサイトが折れた剣を拾い上げる。

慌てて破壊の杖のスイッチを押すフーケだったが何も起こらない。

当然だ、弾の入っていないロケットランチャーを押して何かが起こるわけは無い。

しかし何も起こらない事に困惑しているフーケはあっさりとサイトに殴られ気絶した。

ルイズ・キュルケ・タバサは顔を見合わせるとサイトに駆け寄って抱擁している。

サイトさんいいとこどりパネェっす…

フーケとの戦いも大変だったが、帰りの馬車も大変だった。想像通

りの質問攻めである。
馬車に乗る前に聞いてみたのだが、やはりサイトは私の魔法を聞いてＦＦの物だとわかったらしい。
誰もいない時にきっちり説明するから皆の前では私の魔法に関しては知らないふりをしてくれるよう頼んでおいた。
異世界人だなんて知れたら間違いなく面倒が増える、少なくとも平穏な生活から遠ざかることは間違いない。
全く刺激の無い生活は御免だが、刺激が多すぎる生活も困る。何事もほどほどにしておくのが一番だと思う。

「あなた…一体何者なの？見た事もない魔法ばかり使って…タバサわかった？」

「…わからない、凄く特殊な魔力の流れだった」

「そうよ、あなたこの前はすごい治癒の魔法まで使ってたじゃない！どうして凄いメイジなのにメイドなんてしてるのよ！」

「私はただの戦うメイドさんです。そんな大層なものじゃありませんよ。それに少し魔法が使えるから、と言うのはメイドをしていてはいけない理由にはならないでしょう？あまり目立ちたくないと言うのもありますね」

「…虚無？」

「違いますよ。あらぬ誤解を招きたくないのでもう少し付け加えておきますと先住魔法でもありませんよ。…申し訳ないですが今はこれ以上言えません。皆さんがお困りの際にはお力になりますが、出来れば他の方には私の魔法のことは言わないでいただけるとありがたいのですが…」

「…わかった」

「何か事情でもあるのね？まぁ深く追求するのはやめといてあげる」

「そうね、気になるけど…話せるようになったら教えてちょうだい」

「ありがとうございます。今回のフーケの件に関して私のことを聞かれましたら行き帰りに馬を操っただけで戦闘中はずっと後ろでオロオロしてたとでも言っておいてください」

あっさり引き下がってくれてよかった…変な魔法を使う事で有名にでもなってしまったら何かと面倒になる。

全員口止めはしたからとりあえずの心配はないかな？

…私はこの時フーケが私の魔法を見ていたことを完全に忘れていた。

この時忘れていたことを後々嫌と言うほど後悔することになるのだが…それはもう少し先のお話。

私たちが学院に戻りオスマン氏に事の顛末を報告すると、オスマン氏は破壊の杖を取り戻してきたことを褒め称えてくれた。

フーケを捕まえ王宮に引き渡した功績として、ルイズとキュルケにはシュヴァリエの爵位申請を、タバサには精霊勲章の授与を申請したと言っていたが、それがどれぐらい凄いことなのかがわからない。

私とサイトは平民だからなにもないそうだ、爵位とかはいらないけどお金が欲しかった。しつこい様だが剣を買いたい。

さて、とオスマン氏は手を叩いて今夜は予定通り舞踏会を執り行う事を告げ、しっかり用意をしてくるのじゃぞとキュルケ・タバサ・ルイズを退室させた。

部屋に残っているのは私、サイト、オスマン氏、中年の男性教師となったのだが男性教師もオスマン氏に出ていくよう促され、部屋に3人が残されたところでオスマン氏がサイトに何か聞きたいことがあるじゃないか?と促す。
サイトは自分が異世界から来た事、破壊の杖はその異世界の武器であることを話し、元の世界に帰る方法と、左手に刻まれたルーンについて尋ねていた。
サイトの左手のルーンは伝説の使い魔でありとあらゆる武器を使いこなしたと言われているガンダールヴの物らしい。
また、帰る方法がわからない事を知りガッカリしている。

「そちらのお話は終わりましたね?それじゃサイトさん次は私とお話しましょうか、質問があるのでは?」

「ああそうだ、さっき使ってた魔法ってやっぱりFFの魔法?」

「そうですね、正確にはFFTの全てのAアビリティが使用可能です」

「えっと…この世界の人じゃないよね?」

「そうですね、この間は他の人もいたからトボけましたが私も日本人ですよ。名前は藤本博美、日本では大学生でした。この世界ではロバ・アル・カリイエ出身だと言うことで通していますが」

「はぁ…ところで敬語使ったほうがいいですかね?」

「いえいえ、今まで通りで構いませんよ。急に態度を変えられると周りの方に不自然に思われてしまうかもしれないでしょう?決して生意気だなコノヤローなんて思いませんからどうぞ今まで通りタメ

口で接してください」

「怒ってますよね？俺が最初からタメ口だった事！」

「冗談ですよ。サイトさんのタメ口ぐらい別に何とも思いません、この世界にはサイトさんの１００倍は生意気な奴で溢れていますから。それに今更敬語を使われた方が気持ち悪いですよ。今まで通りヒロミと呼んで普通に話してください」

「わかった、敬語は使わない。あのさ、さっき聞きそびれたんだけど何でヒロミはＦＦＴのアビリティ使えるわけ？」

「サイトさんがこの世界に来る時にガンダールヴの力を得てきましたよね？私の場合はそれがＦＦＴのアビリティだったと思ってください」

「ヒロミも誰かの使い魔なの？」

「いえ、私は家で寝てたはずが気付いたら草原のど真ん中に居ました。誰かの使い魔として呼び出されたわけではありません」

「いつこの世界に飛ばされた？」

「サイトさんが来る２日前だと思います」

「ってことはこの世界のことはあまり知らない？」

「そうですね、この世界のことはオールド・オスマンに少し教えていただいた程度ですので」

「帰る方法は？」

「知りません」

「そっか…でも元の世界の人が居るってわかって心強いよ！これからよろしくな！！」

「ええ、こちらこそよろしくお願いします」

「ヒロミは舞踏会行かないのか？」

「ええ、私は平民のメイドですから貴族様の舞踏会などとてもとても…」

「なんだよそれ、心にも無い台詞に聞こえるぜ。じゃ、俺舞踏会行ってくるわ。行かなくてルイズに後で文句言われるのも嫌だしさ」

そう言い残してサイトは学院長室から出て行った。むぅ失礼な、まるで私が腹黒いように取れてしまうではありませんか。

忘れていたが私は今睡眠不足だ。一周回って逆に目がさえているが、さっさと部屋に戻って横になりたい。

「私も部屋に戻りますね、オールド・オスマン」

「そういえば君の仕事場が変わった事を伝えておらんかったのう」

「はい？」

「明日からワシの秘書を務めるように、ミス・ヒロミ」

はい?あ、そっかフーケが捕まって秘書居なくなったのか。
で何で後釜に私?他に候補者居なかったのかな?
あーダメだ考えがまとまらない…ダメだ電池切れだ…急に眠くなってきた…

「ふむ…お疲れのようじゃから業務内容については明日話そうかの、ゆっくり休んで明日起きたらすぐこの部屋に来るように。以上じゃ」

解放してもらえるのはありがたかった。「失礼します」とだけ言い残しそそくさと学院長室を去り自室に向かった。
こうして私は密かに楽しみにしていた舞踏会という華やかなイベントには一切関与せず、一日半ぶりに眠れる幸せをかみしめることになるのであった。
翌日、目が覚めた時には舞踏会は終わっており、ひどく落ち込むこととなったのは当然である。

第八話（後書き）

まだ序盤なので出来るだけ原作に忠実に進めようとしたら
文章がグダグダになるわ長くなるわで良いことがありませんでした

今回のテンポの悪く長い文章は皆さん読んでて辛かったんではないでしょうか？
正直私なら最後まで読めないと思います
最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます

次からは原作に拘り文章のテンポが崩れないよう気をつけたいと思います
もう二度と皆さんに苦行を強いることがないように精進していきたいです

第九話（前書き）

多くの方から様々なご意見やアドバイスをいただいております。
本当にありがとうございます。

とても為になる内容ばかりで助かっております。
皆様の期待に応えるべく、文章力や内容を向上させるよう努力するつもりです。

これからも私の作品を読んでくださると嬉しいです。

第九話

私は今学院長室にいる。オスマン氏の秘書にされたためその仕事内容について聞く為にやってきているのだ。

第９話「秘書の１日」

「おはようございます、オールド・オスマン」

「おお、ミス・ヒロミか思ったより早かったの。昨日はぐっすり眠れたかね？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらオスマン氏が尋ねてくる。
思えばこの人のせいで私は眠い状態での強制労働を強いられたのだ。
そう考えると嫌味の１つでも言ってやろうという気になる。

「お陰さまで。昨夜はいつもの数倍は睡眠の喜びを噛みしめることが出来ました」

「ほほっ、それは良かった。さて、昨日も話した通り君はワシの秘書になったわけじゃが…」

オスマン氏は私の嫌味を気にする様子も無く話始める。もしかしたらこの人は人と距離をとらない為にわざと嫌味を言わせるような言動をしているのではないだろうか？
オスマン氏から感じた今までの底知れなさを考えると十分ありうる。
私が勝手に過大評価しているだけかもしれないが、この人は十分あ

りえると思わせる何かを持っている人だ。

「そうじゃのう、勤務内容については任せる。好きなことをしたらええよ。別にこの部屋にいなくとも学院内に居てくれたら構わんよ。ただし学院から出ていく時はワシに一言言うように」

「えっと…好きなことと言うと？例えば本を読んだりしていてもいいということですか？」

「うむ、そうなるの。なに、秘書の仕事なんてしれとるんじゃよ。それにここには元々秘書などいなくてもワシ1人でも処理しきれる程度の仕事しかないんじゃ。じゃからミス・ヒロミは好きなことをしたらええ、元の世界に戻る方法を探すのもええし、この世界のことを調べてみてもええ。ああ、気が向いたら秘書らしい仕事でもして貰おうかの」

そういうとオスマン氏はカッカッカッと高らかに笑った。

私はこの世界に来てからオスマン氏に助けられっぱなしだ。私は性格はあまり良くないと自負しているが義理人情には厚いつもりだ。ここまでよくして貰った恩人に泥をかけるようなことは出来ない。これから私がオスマン氏の力になれることがあったら喜んで働こうと密かに誓った。

「ところでオールド・オスマン？服はどうしたらいいでしょうか？私の持っている服は平民が着るような安っぽい布の物しかありませんが…私の格好のせいであなたが叩かれたりするのではないでしょうか？」

「…どうしてあんな平民を秘書に？と言う声は上がるじゃろうな。

ふむ、そうなるとお主に注目する連中が増えるかもしれんのぅ…そうじゃ、メイド服を着ておくと言うのはどうじゃ？そうしたらワシのいつもの言動を知る者は目の保養のために近くに置いたとでも考えるじゃろう。これでお主に対する注目度も少しは下がるじゃろう。それに実際ワシはメイドさんが大好きじゃ！！」

いきなりカミングアウトされた。割と気に入っているのでメイド服を着ると言う案自体には別に異論は無い。しかし…この人はどこまで本気なんだろうか？全くわからない。

オスマン氏が非難されることしか考えてなかったが…秘書になることで私も注目されるのか…だが、好意で秘書にしてくれたのだろうし、今までと比べて行動も随分自由になるのだ。断る理由がない。

「わかりました。オールド・オスマンがメイド好きなら仕方ないですね。では今から私は秘書としてメイド服で働かせていただきます。ところで、使用人の皆さんに異動の報告をしに行った方がいいでしょうか？」

「うむ、よろしく頼むぞ。報告はせんでも大丈夫じゃ。昨日のうちに使用人の皆には話を通しておるからの。ああ、ひとつ忘れとった。部屋を教職員用の部屋に移ってくれるかの？空いとる部屋ならどこでもいいから好きな部屋を選ぶといい。場所はわかるの？」

もちろん場所はわかる。伊達に一週間以上学院の掃除をしていたわけではない。オスマン氏からの問いに頷き早速引っ越しを実行するべく部屋を後にした。

引っ越しと言っても私の荷物は少ない。私の全ての荷物は服が数着と杖、後は少々のお金だけである。一度の移動で全て運べてしまう量だ。

まずは荷物を取りに使用人宿舎に向かう。使用人に遭遇すると秘書

になった経緯を聞かれるだろうから出来れば遭遇したくない。幸いなことに今は朝食の時間帯なので使用人は皆忙しく働いており使用人宿舎には誰もいなかった。
さっさと荷物をまとめてそそくさと教職員宿舎に移動を始めたのだが、移動中にメイドに捕まってしまった。

「ミス・ヒロミ!!凄いじゃないですか!!使用人から秘書になるなんて聞いたことありません!!もう私なんかが気安く声をかけることも出来なくなるんですね…」

「シエスタさん…私が秘書になったのはオールド・オスマンの気まぐれみたいなものですので私には今まで通り接してください。私は秘書になってもメイドであり続けるつもりですから。」

「そんな秘書になっても使用人に優しい声をかけてくださるなんて、ヒロミさん…なんて謙虚なお方…さすがは『我らの杖』です!!」

秘書になってもメイドの格好に変わりることを伝えたつもりだったのだが、何を勘違いしたのかシエスタが尊敬したような目でこっちを見つめている…ん?『我らの杖』って…聞き間違いじゃないよね?ああ、嫌な予感がする…

「シエスタさん?『我らの杖』って言うのは一体何なんでしょうか?」

「はい、マルトーさんが言いだしたんですけど「剣で貴族様を倒したサイトが『我らの剣』なら、魔法が認められて秘書になったであろうヒロミは『我らの杖』だな!ガッハッハッ!」だそうです。もうこの話を使用人の間で知らない人はいませんよ」

マルトーが嬉しそうにそう言っている光景が目に浮かぶ、おそらく周りも無駄に盛り上がったに違いない。別段嫌なわけではないが何となく恥ずかしい。

「使用人の間ではサイトさんとヒロミさんは英雄扱いですよ?また厨房にも顔出してくださいね?」

「そうさせて貰います。あの…ダメ元でお願いしたいんですが…皆さんには今まで通り普通にヒロミって呼んでくれると嬉しいと伝えておいてください」

「わかりました。私もそろそろ仕事に戻りますね」

それじゃあまた。と言い走り去っていくシエスタを見送る。
まさか使用人の間でそんな事になっていたとは…シエスタの説得力に期待するとしよう…このままでは『我らの杖』が固定されてしまう…恥ずかしい
気を取り直して教職員宿舎に向かった。道中ですれ違う教師らしき人々が皆一様に見下したような視線を向けてくる。
おそらく私のような平民が自分と同じ所で寝泊まりするのが気に食わないのだろう。私は基本的に何をされても全てスルーするつもりだ。皆大人だしそう簡単には手を出してくるようなことは無いと思うが。

教職員宿舎に着き、空いている部屋を見つけその部屋に入る。
広い…使用人宿舎の1部屋の倍ぐらいの広さはある。
ちなみに使用人宿舎は2人部屋、教職員宿舎は1人部屋である。
荷物を全て部屋に置いたが、私の持ち物が少ないせいか部屋の広さが際立って感じ落ち着かないのでさっさと部屋を出ることにした。

さて…今からどうしようか？オスマン氏にせっかくもらった時間だ、出来るだけ有効活用したい。
帰る方法を調べてもいいが自称神様が言うには帰る手段は無いんだよね…
それなら秘書の仕事をこなせるようになったほうがいいのか？
どんな仕事が秘書としての仕事にあたるのかはわからないが、どんな仕事をこなすにしろまずはこの世界の事や学院の事についての知識を増やす必要がある。
今後の生活にも役立つだろうと考え、まずは本から知識を得ることにした。

図書館に向かう道中、何人か食事を終えた生徒たちとすれ違ったが皆私の方を見て何やらヒソヒソ話している。
どうやら私がオスマン氏の秘書になったことは既に生徒の間でも話題になっているようだ。
皆が私から隠れるようにコソコソ話している中、私に堂々と話し掛けてくる者がいた。

「ヒロミ？あなた学院長の秘書になったんじゃないの？」

「おはようございます、ミス・ツェルプストー。どうやら私が秘書になったことが噂になっているようですね、ご存じの通り私は秘書になりましたが？」

「いやいや、どう見てもメイドじゃないのよ。あなたもしかして寝ぼけてるの？」

「この服でお勤めするようにとオールド・オスマンに言われておりますので」

「オールド・オスマンに？何か理由があるのかしら…もちろんあの人がメイド好きだからなんてくだらない理由じゃないでしょう？」

「いえ……その通りなんですが……」

「…わ、私授業の準備があるから行くわね。また今度お話しましょう」

一瞬流れた気まずい空気を察知してかキュルケは逃げるように去っていった。

彼女は我々の会話を知らないのでその真意に辿りつくことは無いだろう、ただ一つ言えることは彼女の中でオスマン氏の評価が下がったことは間違いないということだ。

…もしかして私は今や居るだけでオスマン氏の評価をダダ下げする存在になってる？

そ、そんなことないもん。そんな恩をあだで返すようなことしてるわけ無いよね？さ、さぁ図書館に行って本を探さないと！！

私は結局図書館でこの学院の歴史書、この世界の歴史書、魔法についての本等を借り学院長室で読むことにした。学院長としての仕事を一日そばで見ることで秘書としてやるべきことも見えてくるはずという我ながら完璧な考えだ。

学院長室に本を持っていき読書を開始する。

読書を開始しようとして私は本の内容に驚かされた。

目に入ったルーン文字を見てこの世界と自分の世界の文字が違うことに気付いたのだ。

本に書かれていたのは見た事もないルーン文字だが何故か言葉として理解できる。試しにルーン文字を書こうとしてみたところ文字を書くこともできた。

まるで日本語のような感覚で捉えれている、私に自動翻訳機能が付いてる？
この自動翻訳機能も自称神様のお陰で備わっているのだろうか？だとしたら非常にありがたい。奴に初めて心の底から感謝することになる。

文字が読めるとわかった私は、午前中ずっと世界の歴史書を読んでいた。
オスマン氏の様子をチラチラと伺っていたのだが、煙草を吸っている以外の時間はずっと使い魔のネズミと戯れているように見えた。
私とオスマン氏は昼食に一緒に行くこととなり、初めて食堂の中で豪華な食事を口にすることとなりあまりのおいしさに感動した。

おいしい食事をとり満足した私は、昼下がりずっとこの学院の歴史書を読んでいた。
オスマン氏の様子をチラチラと伺っていたのだが、煙草を吸っている以外の時間はずっと眠っているように見えた。
私はオスマン氏を起こし一緒に夕食に連れて行った。
今回も食堂で食事をとったのだが、昼間は気付かなかったのだが平民の私がいることを好ましく思っていない生徒や教師は多い様らしくすさまじい視線を感じる。その視線が気になり食事を満喫することは出来なかった。

夕食を食べ終わると直ぐにオスマン氏は「もう年寄りは寝る時間じゃ」と言ってそそくさと自室に戻っていった。
結局オスマン氏は一日何もしていなかったように見える。恐らく今日は私が初日であったことに気を使い暇なふりをしてくれたのだと解釈している、もしかしたら今頃部屋に戻って仕事をしているのかもしれない。
実のところオスマン氏は言葉通りに部屋で横になっているのだが、

それを私に知る方法は無い。

私は中庭に出て星空のもとで魔法についての本を読むことにした。自室で読んでもいいのだがあの部屋は広すぎてどうも落ち着かない。木にもたれかかって本を読んでいると誰かが近づいてくる気配を感じた。顔をあげた先には何やら真剣な顔をしたルイズが立っていた。

「こんな時間にどうしました？ミス・ヴァリエール」

「部屋から外見てたらヒロミが本を読んでるのが見えたから…」

あれ？私の呼び方がヒロミになってる…しかも何その台詞は？え、デレたの？なんで私に？

「ミス・ヴァリエール…その言い方だと私のことを愛しているように聞こえるのですが？」

「なんでそうなるのよっ！！」

そうは言いつつ先ほどの自分の台詞を思い返したのだろうか、ルイズの顔が真っ赤になっていく。

「ち、違うわよ、話したいことがあったのよ！！」

「…それも十分…いえ、何でもありません。話したいこととは？」

「あのね、フーケを捕まえに行った時の話なんだけれど…」

そういえばこの前は話の途中でゴーレムに襲われたからそこで話が途切れてしまったんだった。その時の話の内容を思い出す。

「私が人の病気を治せるか？というお話でしたか？」

「そうよ。私には姉さまがいるんだけど、その姉さまが病気なの。今まで色々な治療を施したのだけれど一向に良くならなくて…私何とかして姉さまの病気を治したいの！！もしかしたらヒロミの見た事もない魔法なら姉さまを治せるかもしれないの！！」

「なるほど、どのような病気かわかりませんので治す約束は出来ませんが…試してみる価値はあるでしょうね。あなたのお姉さんが私のことを他言しないよう約束できるのならばお力になりますよ」

「ほんとに！？姉さまを助けてくれるのね！！ありがとう！！姉さまは家にいるのだけれど…家族の皆はあなたが口外してほしくないと言えば絶対に誰にも言わないわ。私の家はここからだと馬車で２日程のところにあるの、早速明日の朝向かいましょう！！」

私はルイズの鬼気迫る気迫を感じ、ルイズがいかに姉を大事に思っているのかを感じた。いかに大事にしているかがわかってしまっただけに力になってあげたいとは思うがこの頼みを二つ返事で受けることは出来ない。

「ミス・ヴァリエール、申し訳ありませんが今この場で首を縦に振ることは出来ません。私はオールド・オスマンに仕える秘書ですので、外出する際にはオールド・オスマンに許可をいただく必要があります。片道２日ということは往復で少なくとも４日はかかると言うことですね？オールド・オスマンが簡単に許可を出して貰えるとは思いません。オールド・オスマンに許可をいただけるよう申し出てみますが期待は出来ないかと思います」

「確かにそうね……あ、あの、私も一緒にお願いに行ってもいいかしら？」

「もちろんですよ。早速行きましょうか。オールド・オスマンは自室におられると思いますので」

今から私たちがオスマン氏にする頼みはまず間違いなく断られると思う。それ故にルイズを連れていくのは正直気が引けるが、ルイズの真剣な眼差しを見ているだけに連れて行かないわけにはいかない。断られた後に落ち込むであろうルイズを慰めるのは私の役目になるのだが…仕方ないか。やれやれ、損な役回りだなぁ…

オスマン氏の部屋の前に着きドアをノックする。しばらくするとナイトキャップを被ったオスマン氏が出てきた。

「お休み中でしたか、申し訳ありません」

「いや、構わんよミス・ヒロミ。ん？ミス・ヴァリエールも一緒かね。一体何のようじゃ？」

「オールド・オスマン、不躾な頼みではありますがミス・ヒロミを数日お借りしたいのです。彼女なら私の姉さまの病気を治療できるかもしれないのです」

「ふむ、話はわかった…しかしミス・ヒロミはワシの秘書として雇っておるのでのう。学院長という立場上ミス・ヴァリエールにだけ彼女を連れ出す許可を出すわけにはいかんのじゃよ、ここで許可を出すと他の者にも許可を出さなくてはならなくなるからのう」

オスマン氏の毅然とした態度に無理だと悟ったのか、ルイズはがっくりと肩を落とす。

後で慰めてあげよう、私に出来ることはそれぐらいしかない。
私が（オスマン氏ともなると立場とか考慮しないといけないんだなぁ…）なんて考えているとオスマン氏に呼び掛けられた。

「ところでミス・ヒロミや？」

「なんでしょうか？オールド・オスマン」

「まさかその要件を伝える為だけにわざわざワシの睡眠を妨げたのかの？」

…あれ？まさかオスマン氏怒ってる？昨日私の睡眠を超妨げた癖に？
まずいな…ルイズを慰めるだけの損な役回りだと思っていたのに、オスマン氏が怒るとは思ってもみなかった。
っていうか怒るところ初めてみるな…何言われるか全く予想がつかない。
まずい…想像以上に損な役回りだったらしい…私の背中に冷たい汗が流れる。

「申しわけありません」

「謝って済む問題ではないと思うがの。ワシの立場を考慮したうえでミス・ヴァリエールの頼みをワシが聞き入れられると思ってたのかね？その判断は秘書としてどうかと思うのう。よって罰を与えようと思うのじゃが…異論はあるかね？ミス・ヒロミ？」

怖い。凄い威圧感だ…いつもの飄々としているオスマン氏とは別人のようだ…逆らったらろくな事がない、いや逆らえない。
異論はある。が何も言えないので頷くしかない。

「いえ、異論ありま「ちょっと待ってください！」」

私がオスマン氏の発言を肯定しようとしたところでルイズに遮られた。

「オールド・オスマン、ミス・ヒロミには私が無理を言ってここまで連れてきたんです。ですから罰するのでしたら彼女ではなく私を！！」

この威圧感の中で反論できるとは…ルイズ凄いな…しかも私を庇うとは…尊敬に値する。でも多分今のオスマン氏には逆らわないほうがいいと思うよ。

「そうはいかんのじゃミス・ヴァリエール、ワシは彼女の思慮の甘さを問題じゃと言っておるんじゃ。無理矢理連れてこられたという点も彼女の問題なのじゃ。よって彼女には罰を与えねばならん。」

「そんな…」

「これが社会という物じゃよ、ミス・ヴァリエール。さて、ミス・ヒロミには罰を言い渡そうかの、５日じゃ」

「はい？」

「ミス・ヒロミには５日間学院に立ち入ることを禁じる。どこへでも行って頭を冷やしてくるがいい、当然その間の給料は出んぞ？後は…ミス・ヴァリエールは急に里帰りしたくなったのではないかの？」

意味がわからないといった風に突っ立っているルイズ。

私はオスマン氏の意図を悟りルイズに向かって話しかける。

「ミス・ヴァリエール、あなたのせいで私は居場所を失ってしまいました。学院に入れない間は責任を持ってあなたの家に居させてもらえますね？」

「もちろんよ！早速家族に手紙を出してくるわ！！」

ハッとしたルイズが嬉しそうに走って部屋を出て行き、部屋には私といつの間にか普段の雰囲気に戻っているオスマン氏が残された。私も部屋を出て言ってもよかったのだが、少し気になったことがあったのでオスマン氏に尋ねることにした。

「許可を出していただいてありがとうございます。しかしオールド・オスマンもお人が悪い、あんな回りくどい言い方をしなくても普通に許可を出してくだされればいいものを。どうしてあんな威圧感までお出しになったんです？」

「ほほ、ワシはお主を学院から追い出しただけじゃよ。まぁその間にヴァリエール家にお邪魔するならあれぐらいの威圧感には耐えて貰わんとな」

「どういう意味です？」

「行ってみればわかる、ワシの勘ではお主はおそらく…気に入られる。だからこそ威圧感に少しでも慣れて貰おうと思っての。まぁ行ってみればわかるはずじゃ、わからないまま終わるに越したことは無いがの」

オスマン氏の言葉の意味がわからない。ヴァリエール家になにかあ

るのだろうか？常識的に考えてルイズの姉を治療するために家に行くだけであんな威圧感に遭遇するとは考えられない。門番的な生き物でも居るのだろうか？

オスマン氏が何を知っているのか想像もつかない。行ってみればわかると言っていることだし、行ってからのお楽しみに取っておくとしよう。オスマン氏に挨拶して部屋を後にする。

明日に備えるため、真っ直ぐ自室に戻り私は早目に就寝することにした。

第九話（後書き）

原作から少しそらして話を進めることにしました。
メインストーリーの間のサブストーリーのようになるかもしれませんが…

全くもって原作と同じではつまらないだろうと思い、少しこういう話も混ぜてみようと思いました。
原作遵守派の方からすればつまらない展開になってしまいますがご容赦ください。

第十話

オスマン氏の計らいによって私がルイズの姉の治療に向かうことになったのが2日前。
今日の午前中にヴァリエール領に到着したのだが、屋敷に着くのは後半日ほどかかるとルイズが言っていた。何故急に冗談を言うのかが理解できなかった。
あれから約12時間後の現在、ルイズの言っていたことが冗談ではなかった事を理解させられることとなった。
日が暮れる前になんとかルイズ宅、いやルイズ邸の前まで来れた。
領土の広さに驚かされたが屋敷も凄い…お城？
屋敷が堀に囲まれている為屋敷に入るには跳ね橋を下す必要があるようだ。今どデカイゴーレムが屋敷に跳ね橋を掛けてくれているところだ。
ヴァリエール家は由緒正しい家柄で偉い。ぐらいの知識しかなかっただけに屋敷の立派さにひどく驚いた。
他の貴族も皆こんな家に住んでいるのかルイズに尋ねたところ、ヴァリエール家が特別大きいのだと返事が返ってきた。
そんなやり取りをしているうちに跳ね橋が降ろされ、私たちは屋敷の中へと入っていった。

第10話「ヴァリエール邸にて・前編」

ちなみに今回の旅にはサイトは同行していない。
理由を聞いたがルイズは明言してくれなかった。その代わり「私の使い魔に関することは何も言わないで…頼りになる使い魔だとか言って誤魔化して頂戴」と念を押されている。

どうやらサイトが使い魔だということを知られたくないようだった。
人の使い魔というのが珍しいからだろうか？
今回隠したところでいずれはバレると思うのだが…わざわざ事を荒立てる理由もないので黙っておくことにした。

屋敷に入った私たちは可愛らしい女性によって迎えられた。
シュっとしたスタイルにも関わらず膨らむべきところは膨らんでおり、更には優しそうな雰囲気を纏っている。女性としては完敗である。どうやったらこんな風に育つのだろうか？
よく見ると桃色の髪に優しそうな眼をしたその女性はどことなくルイズに似ている。
いや、似ているというよりはルイズを穏やかにして成長させたらこういう女性になると言った方が正しそうだ。
大方ルイズの言っていた姉さまとはこの人の事だろうと予想された。

「ちいねえさま！！」

「あらあら。ルイズお帰りなさい。わざわざ私の病気を治すために戻ってきてくれたんですって？ありがとう、私の小さなルイズ」

「お久しぶりですわ、ちいねえさま、お体の方はよろしいんですか？」

「ええ、今日は体調がいいから、ルイズを出迎えに来たのよ」

2人は抱き合って再会を喜んでいる。キャッキャッと言いながら笑顔で抱き合っている様子からこの姉妹の仲の良さが伺える。

「ところでルイズ、私の病気を治してくれるかもしれない人という

のはどこにいるのかしら?」

「ちいねえさま、このメイドの格好をしている者がそうです」

「はじめまして、オールド・オスマンの秘書を務めさせていただいております ヒロミと申します。私のような若輩者の力が及ぶかどうかはわかりませんが精一杯頑張らせていただきます」

「まあ、まあ、まあ、ごめんなさいね、あなたがお医者様だとは思わなかったわ。私はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ラ・フォンティーヌよ、よろしくお願いするわね」

私を見て少し驚いたような様子を見せたカトレアだったが、すぐさま私に笑顔で挨拶をしてくれた。

ところで挨拶ってこんな感じでいいのだろうか?来る途中の馬車で必死に考えた結果がこの挨拶なのだが…あれ?どうでもよくなってきた…この人を見ていると凄く癒される…気持ちがほわーんとしてきた…

「ちいねえさま!!早速ヒロミに診てもらいましょう!!」

私のほわーんとした気分はルイズによって打ち砕かれた。

はっ!いかんいかん。ボーっとしてたら地が出て粗相をしてしまうかもしれない。

同性の私ですら見ているだけでこんな状態にするとは…なんて恐ろしい人だ。

改めて状況を確認する。どうやらルイズは一刻も早くカトレアの病気を治してほしい様だ。

カトレアは笑いながら無言で立っている。私の判断に任せる。といった感じだろうか?

「それでは…早速治療を行いましょうか。場所はどこでいたしましょうか？」

「そうね、私の部屋で見てもらおうかしら、ついてきてちょうだいな」

カトレアに言われるがままに後ろをついて行く、移動中もカトレアとルイズはじゃれ合っている。
部屋に着きカトレアがドアを開けると中には溢れんばかりの動物たちがいた。
小動物だけでなく、本来室内で飼う動物ではないはずの熊などの大型動物もいる。
何事も無いかのようにベッドに腰掛けるカトレア、ルイズもその横に座る。
カトレアがまだ部屋の入口にたたずんでいる私に声をかける。

「大丈夫よ。この子たちは人を襲ったりしないわ。」

「いや、あの…」

どうやら私が襲われる心配をして部屋に入れないと思っているようだ。
私は襲われる心配がないのはわかっているので熊が居ることに関してはさほど問題視していない。
私にとっての問題は違うところにある。

「カトレア様？申し上げにくいのですが…膝の上の犬を私から遠ざけて頂けないでしょうか？その…どうしても犬だけは苦手でして」

「あらあら、こんなに可愛いのに？ふふっ、わかったわ」

カトレアが犬に向かって何か囁くと犬は部屋の隅の方に行き大人しく座った。

完全に意思疎通が出来ているようだ。この人はいいブリーダーになれるんじゃないだろうか？

これでやっと部屋に入れる…犬が居るところなど怖すぎて行れない。

小型犬か大型犬かなど全く関係なく怖いものは怖い。

そりゃ瀟洒（笑）なメイドである私にも苦手な者の一つや二つぐらいありますよ。

私は犬が遠ざかったことに心底安堵し、部屋に入りカトレアの前に立った。

「治療を始める前に一つ約束していただきたいことがあります」

「あなたの魔法ならもちろん口外するつもりなどないわよ、約束するわ。両親も口外しないと言っていたわ」

「そう言っていただけて安心しました。それでは早速治療に取り掛かります。……エスナ」

カトレアの体が光に包まれているものの。私には病気が治っているのかどうかはわからない。

「…どうでしょう？カトレア様」

「少し楽になった感じはするのだけれど…残念ながら完治とは言えないわね」

「そうですか、それでは続けますよ……デスペル。

変化はおありでしょうか？」

「いえ…さっきと同じ状態のようね。」

「それでは…私の手を握っていただけますか？はい、そうです。いきますよ？」

カトレアに私の手を握らせて『気功術』を使ってみたが変化は無い様だ。

他にも回復手段はあるのかもしれないが、もうこれ以上私が記憶しているアビリティは無い。

最後にカトレアの体力を回復させる為に『リジェネ』を掛けた、それでも体に変化がないことを聞き私に出来ることは無くなった。

「申し訳ありませんがこれが私の限界のようです。役に立てず申し訳ありません」

「そんなことないわ、どんなに高価な水の秘薬でも効果がなかった私の病気が明らかに軽くなったんだもの。感謝してるわ、ありがとう」

「感謝の言葉など不要ですよカトレア様、平民にとって貴族の役に立てることは光栄なことですので」

「平民？そうは見えないわね、貴族ってわけでもなさそうだけれど…ふふっ、あなたは一体何者なのかしらね？」

「…私はただの癒しのメイドさんです。今はオールド・オスマンの秘書でもありますが。」

カトレアの何気ない発言に焦らされる。
異世界から来た事は黙っていればばれるわけは無いと思うが、平民でも貴族でも無さそうということは少なくともこの地の人間では無さそうだと思われているのだろうか？
ロバ・アル・カリイエから来た事をルイズから聞いている？そうならば合点はいくが…そうでないなら直感？そんな馬鹿な話があるだろうか？
カトレアは私の答えに満足したように微笑み「そう、ただのメイドさんなの」と言うと立ちあがった。
母親に治療の結果を報告に行くのだそうだ。ルイズもそれについて行くらしい。
私は食事に呼ぶまで休んでおくよう言われ客室に案内されることとなった。

1人になった私は思わず大きくため息をついてしまう。
正直エスナで病気なら何でも治せると思っていたのだが…何故治らなかったのだろう？
カトレアの病気について少し考えてみることにした。
『エスナ』で症状が軽くなったということは毒のようなステータス異常があったのだろう。
しかし一方で『エスナ』『デスペル』『気功術』でも完全に治せないということは…重い病気のような解除できないステータス異常に陥っているのだろう。
解除不可のステータス異常…例えば癌のような重い病気はそれに含まれるのではないだろうか。
そう考えると最初のエスナでカトレアの体調がマシになったのは、本来の彼女の病気以外のステータス異常が併発していたためだと考えられる。
おそらく病気で体が弱っているからステータス異常にかかりやすく

なっているのだろうか？
とすると今回体調が良くなったのは一時的なもので、また体調が悪化すると言うことは十分に考えられる。
そしてカトレアの病気は…非常に重いということだ。しかし私にはどうすることもできない。
仕方がないはずの事なのに、アビリティが通用しないとなると何もできず無力になる自分に歯がゆさを感じる。
悔しさを噛みしめていたところで夕食の準備が出来たとお呼びがかかった。

どうやら貴族と平民が一緒に食事をとるのはおかしいという考えはこの世界では一般的なものらしい。
私はルイズ、カトレア、その母親と夕食を食べることになるのだろうと思っていたのだが、夕食の準備が出来たと呼び出された先には私の分の食事しかなかった。
この世界のルールに文句をつけたところでどうなるものでもないし、十分に豪華な食事だったので声に出して文句は言わないが、娘の恩人ということでもう少し良い扱いでもいいのではないかと思ってしまう。
1人での豪華な食事を終わると私は屋敷の広間に呼び出された。
そこではルイズ、カトレアの他に母親らしき人物が待っていた。
カトレアとルイズと同じピンクブロンドの髪をしているその人物だが、目つきは鋭く圧倒的な威圧感を纏っている。
私が広間に入ると直ぐにその人物が口を開いた。

「はじめまして、私はカリーヌといいます。あなたが娘の病気を治療してくれたそうですね。感謝します。」

「お礼には及びません。私の力不足で完治させることは出来ません

でした、申し訳ありません」

「あなたが謝る必要はありません。今までどのようなメイジをもってしてもカトレアの病は治すことは出来ませんでした。それを和らげただけでもあなたは大したものです。ところで…あなたは変わった魔法を使うそうですね？」

「……はい」

「心配せずとも口外するつもりはありません、ただ少しあなたに興味がわきまして、私もあなたの魔法を少しばかり体験させて頂けたらと思いましてね」

体験という言葉に違和感を覚えたが、カリーヌの持つ威圧感に押し切られてしまう。

「わかりました。どのようなものをお見せすればよろしいのでしょうか？」

「そうですね、明日にでも色々な種類の魔法をじっくり見せて貰うとしましょう…私を相手に」

「お母様！？まさかヒロミと決闘をなさるおつもりですか！？」

あーあー、何も聞こえない。…こんな威圧感を放っている人と戦いたくないんですけど。

しかしそんな唐突に決闘とか言うか？普通。そうか！わかったぞ！

これは夢なんだ！！

きっと次の瞬間には「おはようございます」って言う台詞が飛び込んでくるんだ…

「そのまさかですよ、ルイズ。あなたはこの子の魔法を身近で何度か見ているのでしょう？彼女の使う魔法の原理はわかったのですか？実力は？気になるでしょう？それにこの子も先ほど魔法を見せてくれると言いました。今更取り消すなんて真似はしないはずよ？」

知ってたよ…現実だって知ってたけどさ…あんまりだよ
さっきは魔法見せるって言っただけじゃん…決闘なんて聞いてないよ…

「しかし…いくらなんでもお母様が相手だと…ヒロミが死んでしまいますわ！！」

「大丈夫です、手加減はするつもりですので。構いませんね、ヒロミ？」

「…はい」

カリーヌさんから今までで一番大きな威圧感を感じた…笑顔で威圧とか汚い…
オールド・オスマン、あなたが私を威圧してくれた理由が今わかりました。
そしてあなたに威圧された経験を活かせませんでした。ごめんなさい。
私はもしかしたら生きて学院に戻れないかもしれません…

「それでは今日はゆっくり休みなさい、明日一番に魔法を見せて貰います」

そういうとカリーヌは部屋を後にした。

後に残されたルイズとカトレアは私に憐みの視線を投げかけている。
なんとかして決闘を無しに出来ないかと聞いてみたがカトレアからは「あんなに楽しそうな母様は久しぶりに見たわね…止められるわけがないわ」、ルイズからは「あ、諦めたほうが気は楽になるんじゃないかしら」と返事が返ってきた。
どうしようもない事態だと諦め部屋に戻ることにしたが、その夜私が恐怖でほとんど眠れなかったことは言うまでもない。

第十話（後書き）

リアルが忙しくなってきました。
今までのような更新頻度は維持できないと思いますが
出来る限り頑張りますのでこれからもよろしくお願いします

第十一話

朝日が気持ちいい…すがすがしい朝です。
カリーヌさんと私は朝食前に戦うことになりました。
今私はカリーヌさんと向かい合って立っています。決闘はまだ始ってません。
え?私ですか?ヒロミです。
ああ、私が地の文での口調がいつもと違う事に違和感を感じているのですか?
仕方ないじゃないですか。怖いんです。さっきからずっと膝がガクガクですよ。地の文と口調を使い分けてる余裕なんか無いです。
遠くの方からルイズとカトレアが私を心配そうに見守っています。
心配なら止めてください。

先ほど聞いたのですが、何でもカリーヌさんは昔マンティコア隊の隊長を務めていた経歴の持ち主で「烈風のカリン」という二つ名で恐れられていたそうです。
当時の格好をしているらしいのですが昨日より5割増しぐらいで威圧感が漂っています。
向かい合った時のカリーヌさんの目を見て命の危機を感じたので、私は決闘を先延ばしにしようと必死です。
今は剣を貸して貰うよう頼み時間を稼いでいます。
使用人が取りに行ってくれてます。もう時間稼ぎの策が尽きているので一生持ってこなくていいです。
ああっ!持って来やがった…くそぅ
背中に剣を背負ったところでカリーヌさんが話しかけてきます。

「さて、準備は整いましたね?それでは始めましょうか。心配せず

とも手加減はしてあげます」

当たり前ですカリーヌさん、私ただの大学生ですからぁ…

第11話「ヴァリエール邸にて・後編」

とりあえず決闘が始まったらすぐに補助魔法をかけないといけません。

適当に闘ってやられる予定…もとい喰らってない魔法を喰らったふりをして倒れる予定ですがヘイストは必須です。

補助の無い生身では魔法を避けたり出来ないので死にます。

その後は…出来ればシェル→リレイズ→リジェネ→プロテスの順で魔法を使いたいのですが…おそらく無理でしょう。

カリーヌさんがどれほどの強さなのかは知りませんが、そんなことしている間に殺られるに違いありません。下手したらヘイストを使う間も無いかもしれません。

「さて…そろそろ始めましょうか、始めの合図…そうですね、そちらが先手で結構ですよ?」

良かった…本当に良かった。補助かけれる…ヘイストより詠唱長いから使わないつもりだったけどマバリア使っときます。

「わかりました、それではこちらから行かせていただきます……

……マバリア」

よし、マバリアかかった。これで勝つる！！魔法が発動した瞬間まずは一目散に距離をとる。だって近くにいると怖いもん。遠距離での魔法の打ち合いならまだ戦えるはず。
私にもようやく少しばかりの余裕が出来た。こうなったら地の文ぐらいは元に戻せるよ。
さてカリーヌさんの様子は…動いてない？いや、呪文詠唱してるのか？
そこまで考えたところで突然何もない空間に殴られ地面を転がりまわる事になった。
殴られた部分に激痛が走る、補助が無かったら一撃で戦闘不能に陥っていたのではないかと思うようなダメージだ。
何が起きたのかわからなかった、それがエア・ハンマーによる攻撃だろうと気付いたのは起き上がった後のことだった。

この段階で怖さ故に距離をとった自分の浅はかさに気付く。
この距離はダメだ！！カリーヌさんの魔法が想像以上に強力だった。
せめて何の呪文を使っているか聞こえる距離まで行かないと攻撃を全て喰らうことになってしまう。
ケアルラを詠唱しながらカリーヌさんを中心に円の動きでジワジワ距離を詰めていく。ケアルラが発動した瞬間に動きを変えカリーヌさんに一気に近づく。
接近戦になっても瞬殺される事は明らかなので少し距離を残して立ち止まる。前を見据えると視線の先には笑みを浮かべているカリーヌさんがいる。

「おや、もう距離はとらないのですか？」

「ええ、一方的にやられる趣味はありませんので少しぐらいは抵抗しようかと」

どうやら適当に誤魔化して終わらせる作戦は実行不可能なようだ。
あの人の魔法はそんな生易しいものじゃない。どうやっても殺るか殺られるかの勝負になりそうだ。
ならば倒される前に倒してしまうしかないが…どうしたらいいだろうか…
ヘイストが効いている間に魔法で攻撃したいんだけど…弱い魔法だと効かないような気がするんだよなぁ…でも攻撃避けることを考えると詠唱が長い魔法は止めておいたほうがいい。
まずは魔法が効くかを確かめる為にチャージ時間が短い基本魔法を打ってみることにした。
発動までのタメが短い分、回避に気を配りながら魔法を使えるので攻撃を避けれるかもしれない。
左右に走り回りながら魔法を放つ。

「…ファイア…サンダー…ブリザド」

炎はカリーヌさんを包み込もうとしたところで風に吹き飛ばされ、雷は当たる直前で避けられ、氷はエア・ニードルで切り裂かれた。

うん、初級魔法じゃｍｐの無駄みたいだ。苦手な属性もなさそうに思われる。

「系統をバランスよく使えることはわかりましたが、その程度ですか?残念ですがもう終わりにしましょう」

カリーヌさんが不吉なことを言い詠唱に入る。
終わりにするというからには相当の攻撃が来るに違いない。
そもそも私の耐久度は補助魔法を使っているとはいえ高々知れている。
カリーヌさんの次の攻撃を喰らったら立ち上がれない自信がある。

下手したら死ぬ。
生存本能からか私は無意識の内に剣を抜いて叫んでいた。

「不動無明剣！！」

聖剣技はいわば即時発動の魔法みたいなものだ。
今まで詠唱…もといタメがあった後に杖を振って魔法を使っていた相手が、剣に持ち替えた直後に無詠唱の魔法を使ってくるとは思わないだろう。
いわば不意打ちのような攻撃、そしてカリーヌさんが詠唱中という条件が重なり、モロに攻撃を喰らってくれた。
…肝心のダメージはほとんど無いみたいだけどさ。一矢報いて満足したよ。
さぁさひと思いにやっちゃってください……あれ？攻撃が来ない？

恐る恐るカリーヌさんの方を見てみると、詠唱途中の体制のまま固まっている。
どうやらストップの追加効果が発動したらしい。
この隙に魔法ぶっ放したらもしかしたら勝てるんじゃないだろうか？
大チャンスを活かすべく早速詠唱に入る。そしてストップが解けたカリーヌさんの魔法を喰らわないよう背後に回り込む。
こちらのチャージが終わる前にカリーヌさんのストップが解け、発動した風の魔法がさっきまで私がいた場所で荒れ狂っている。
足元の草がズタズタに引き裂かれている辺りから私がいたらどうなっていたのか大体の予想はつく。
ストップが解けたカリーヌさんからすれば、一瞬で私が居なくなったように感じるのだろうか、驚いたようすで動きが硬直している。
しかしすぐに背後にいる私に気付き剣を抜いて距離を詰めてきた。
どうやら接近戦でケリをつけようとしているらしい。
私が詠唱していることに気付き真っ直ぐこちらに走ってくるカリー

ヌさん。しかしカリーヌさんの剣が私に届くよりも早く私の魔法が発動した。

「…フレア！！」

目の前で大爆発が起きる。先ほどまでの魔法とは威力の桁が違う。もくもくと煙が立ち上がっているのを見て助かったという想いが込み上げてくる。生きてるって素晴らしい。

常人なら間違いなく生きていない…というか体が残るかどうかすら怪しい様なレベルの魔法ではないだろうか？流石に私の勝ちで決まりでしょう。

しかし、いくらカリーヌさんが強いとはいえこれはやりすぎたな。あの人の事だから死んではいないだろうけど大怪我しているかも知れない。その時は責任をもって治療させてもらおう。

安否の確認をするべく煙の中のカリーヌさんに声をかける。

「カリーヌ様！ご無事でしょうか？」

「問題ありません。大丈夫です」

短い返事と共にカリーヌさんが煙の中から出てきた。

どれほどのダメージを負わせてしまったのかと心配していたのだが、出てきたカリーヌさんの姿を見て驚かされた。

腕と頭から少し血が出ており、腕にはところどころ火傷の跡もみられる…ダメージそれだけ？

「まさかここまでの魔法を使えるとは思ってもいませんでした。私に傷をつけたものなどいつ以来でしょうか…あなたのことを侮りすぎていたようですね。ここからは私も本気でお相手しましょう」

「不動無明剣！」

おそらく私にはほとんどがＭＰ残っていない。
もう満足に戦えるような状態じゃないのに本気なんて出されたら…
ストップの追加効果に全力で祈りながら剣を振る。

「その技は先ほど見せていただきましたよ」

え、避けられた？…聖剣技ですぜ。ガードですらなく回避とか…
いや、ここで諦めたら死が待っている。それなら違う技でもいいから…打ち続けるしかない。

「無双稲「エア・カッター」」

突風に剣が奪われた…剣を持っていた手に目をやると手がズタズタに引き裂かれている。
しかし今はその痛みをさほど感じない…それより遥かに大きい恐怖を感じているから。
私は無事な方の手で杖を握り締めドンアクを使おうとする。
詠唱に入ろうとした瞬間、突風に杖が奪われもう片方の手もズタズタに引き裂かれることとなった。
もうこの状態は戦闘不能といって差し支えないんではないだろうか？
そろそろギブアップしていいよね？

「これで終わりです。カッター・トルネード」

ギブアップゥゥゥゥゥ！！言う前にトドメらしき技放たれたあああああ！！
ちょ、ありえない大きさの竜巻が私の方に近づいてくるんですけど！？

…この世界では杖の無い人って魔法使えないんでしょう？これ魔法なしじゃ死ぬんじゃね？

目立つけど…杖なしで魔法使うしかない。死ぬよりはマシだ。

竜巻から逃げながら魔法を詠唱する。竜巻に追いつかれる寸前に『リフレク』が発動した。

反射魔法が自分に掛かったことに安心し、振り返ったところで私の意識は途切れた。

私が目を覚ますとそこは馬車の中だった。どうやら気を失っていたらしい。

向かいにはルイズが座っている。

「ヒロミ！？よかった…目が覚めたのね！」

ルイズが嬉しそうに話し掛けてくる、どうやら私のことを心配していてくれたらしい。

さっきまで決闘していたはずなのだが…どうやってやられたかの最後の部分の記憶が無い。

「ミス・ヴァリエール？私は一体…カリーヌ様が大きな竜巻を出されたところまでは覚えているのですが…」

「母さまのカッター・トルネードね。その後はヒロミが障壁を張ったのだけれど、障壁ごと吹っ飛ばされたのよ」

どうやらリフレクごと吹っ飛ばされたらしい、確かにあんなデカイ竜巻を跳ね返せるほうがおかしい…のか？

リフレクで跳ね返せない魔法とか…あの人は人外の何かなのだろう。

「障壁ごと…ですか。カリーヌ様には敵いませんね」

「ヒロミも十分凄い魔法使いじゃないの、杖なしで魔法使ってたし…それにあなたがあそこまで強いとは思ってなかったわ。母さまが血を流しているところなんて初めて見たわよ。」

「血…そういえば私は怪我をしていたはずでは？」

あの竜巻の直撃を受けて無傷で済んだはずがない。
それに竜巻に巻き込まれる前から両手はズタズタだったはずだ。
それが起きてみると怪我ひとつないように見える。

「母さまが水のメイジをお呼びになってヒロミの治療をさせたのよ」

治療してくれたのか…流石にやりすぎたと反省したのだろう。

「そうそう、ヒロミが気付いたら手紙を渡すように言われてたのよ」

カリーヌさんからの手紙？
やりすぎた事に対する謝罪かなにかだろうか。
手紙を書くほど反省してくれたのだろうか？
さっそく内容を呼んでみることにした。

『ヒロミへ、これからルイズがヴァリエール領に帰るときにはあなたも一緒に来なさい。
それから今後は基礎身体能力も鍛えておくように。魔法と比べて身体能力がお粗末すぎます。
トレーニングしなかったら…次にヴァリエール家に来た時に死ぬと思いなさい。カリーヌ』

完全な脅迫だった。
一緒になって手紙を呼んでいたルイズが慌てて明後日の方向に視線を送る。
どうやら、こうなった事情を知っているらしいので理由を聞いてみることにした。

「ミス・ヴァリエール…どうしてこうなったんです？」

「…母さまは自分に傷をつけたヒロミのことが気に入ったみたいで、私達が帰るまでずっと上機嫌だったのよ。平民の為に水のメイジを呼んだり手紙を書いたりするのも初めてだったから相当なものよ。万が一あなたが学院をクビになったらすぐにでも屋敷に呼ぶつもりみたい。それまでに十分鍛えてやらないと。って嬉しそうに言ってたわ…流石にそれは冗談だと思ってたけど…」

「どうして止めてくれなかったんですか！！私を殺すつもりですか？ミス・ヴァリエールは私に何か恨みでもあるんでしょうか？」

「一応止めたわよ！！止めたけど…「私が決めた事に文句があると言うのですか？」って言われて…」

傍若無人だ。これほどまで傍若無人な人を見た事が無い。
気に入ってくれるだけなら構わないが私の意思が一切考慮されていない。
とんでもなく問題だらけだ。毎回あんな決闘をさせられたら命がいくつあっても足りない。
それにトレーニングなどしたくない。本を読んだりするのはいいが体を鍛えるのは嫌だ。
なんとかしてヴァリエール家に連れて行かれるのを回避しないと…

「そうだ！私はオールド・オスマンの秘書ですよ？いくらカリーヌ様とはいえオールド・オスマンの断りもなく私にそのような命令をすることは…」

「オールド・オスマンには母さまから手紙を出しておいたらしいわ…学院に帰ったらオールド・オスマンから話があるはずよ。私があなたを呼んだばっかりにこんなことに…ごめんなさい」

「い、いえ…ミス・ヴァリエールは悪くありません、お気になさらないでください。ヴァリエールのお屋敷に呼ばれるなんて名誉なことです。それにミス・ヴァリエールと一緒に旅行できることは楽しみですし」

確かにルイズのせいといえばルイズのせいである部分があることは否めない。

しかしルイズは純粋にカトレアの病気を治したかっただけだ、その思いを責めることは出来ない。

ルイズにフォローを入れつつ今後の展開について考える。

学院に着くまでに出来ることは無いので、オスマン氏がカリーヌさんに押し勝ってくれる事を期待して学院に帰るしかない。

しかし…自分に被害が来ないだけにオスマン氏がカリーヌさんの言うことを聞く気がしてならない。

カリーヌさんとやり合うには相当の覚悟がいるはずだ…オスマン氏に抗うようお願いしてみるしかない。

学院に戻った私はオスマン氏に土下座して頼みこんだのだが、オスマン氏から返ってきた言葉は「烈風のカリン…悪いが言われたとおりにしてくれるかのぅ」の一言だった。

案の定というかなんというか…オスマン氏ですらカリーヌさんに逆

らうのは恐ろしいらしい。
カリーヌさん…あなたはいったい何者なんでしょうか?
そして何故私に目をつけるのでしょう…本当に勘弁してください。
この日から夜になると、学院の中庭で鍛錬に励むメイドが出るようになったとかなってないとか…

第十二話

ここ最近失われつつあった平穏な朝を迎え、私は秘書の仕事という名の読書に勤しんでいる。
この世界の本は基本的に面白い。
地名や人名などの固有名詞が覚えにくいという風に感じることは多々あるのだが、魔法という絵空事だった概念が実在するのだ。
例えば文献のような堅苦しい物でも、魔法が関わってくるだけでファンタジーな漫画やアニメのような印象を受ける。
また今まで生きてきた常識など全く通じない世界に来ているのだ、本から得られる知識は非常に多い。
その結果私の読書欲は深まり、基本的に時間の許す限り読書をしている。
しかしそんな平穏は一通の手紙によって破壊されてしまうこととなる…

読書をしていた私の耳にコンコンというノック音が聞こえてきた。
音のする方を見てみると、フクロウのような鳥が一通の手紙をくわえ窓を叩いている。
鳥から手紙を受け取り宛先を見る。宛先はオスマン氏になっていたのでオスマン氏に手渡した。
私が手紙を受け取ることを確認した鳥は仕事を終えた充実感からか颯爽と飛び去っていった。
飛び去っていく鳥をじっと眺めていた私が振りかえると、手紙に目を通したオスマン氏がため息をつき私の方を見据えてきた。

「ミス・ヒロミ、面倒なことになったわい」

「どうなさいました?お手紙に何か書かれていたのですか?」

「殿下…つまりは王女様のことなんじゃが…今日学院にくるそうじゃ」

「王女様がですか？喜ばしいことなのでは？しかし出迎える準備も何もしておりませんよ？」

「それが面倒なんじゃ。隣国に行った帰りに寄ってくださるそうじゃが…準備を今からするんじゃよ？やれやれ…ワシは教師の皆にこの事を伝えてくるからお主は使用人たちに伝えて出迎える準備に取り掛かってくれるかの。時間がない、早速取りかかるとしよう」

オスマン氏に言われ私は慌てて部屋から飛び出した。
王女様ねぇ…王女様が隣国の帰りに立ち寄る？大した理由も無く散歩気分で来ていいものなのか？
貴族ばかりの学校だから構わないのか、あるいは何か目的でもあるのだろうか。
考えても何もわからない。王族ってのは準備する側の苦労ってのは考えてないんだろうかねぇ…
なんて文句を頭に浮かべながら王女様の事を伝えるべく使用人達のところに向かう。

第１２話「メイドとして～その１～」

使用人の皆に王女様が来ることを伝えると皆一斉に何らかの仕事に取り掛かり始めた。

厨房ではあわただしく料理の準備が始まり、メイド達はすごい勢いで掃除を始め、出迎える為の絨毯を持ちだしてきている。レッドカーペットってやつだろうか。

…あれ?私は?私は何をしたらいいの?

手持ちぶさたを紛らわす為に掃除を手伝おうとしたが、横を通りかかったメイドさんに「オールド・オスマンの秘書にそんなことさせられません!」と怒られて掃除道具を取り上げられてしまった。

メイド服来てるのにメイドの仕事させて貰えないとは…フッ、皮肉な話だ。

ニヒルになったところで仕事が無い事実は変わらない。

結果、出来ることが無いので準備を使用人に任せオスマン氏のところにスゴスゴ戻っていった。

数時間後

王女様が来るとなると生徒たちも緊張するらしく、綺麗に整列して王女様の到着を待っている。

いつもは威張っているような印象を受ける生徒たちだが、今は緊張して小さくなっている。

その様子を見ていると元の世界の年相応の子供たちとなんら変わりは無いように感じられる。

しばらく待っていると学院の正門から王女様御一行が馬車に乗ってやってきた。王女様が乗っている馬車だけあって金銀プラチナで綺麗に装飾されている。

馬車が学院内に入ってくると生徒たちが一斉に杖を掲げ出迎えの意を表した。

そんな荘厳な様子の中オスマン氏が王女の一行を迎えるべく本塔の前に立っている。

馬車が止まり、先ほど準備されていたレッドカーペットが敷かれると、その上に王女が降り立った。整った顔立ちにどことなく漂う気

品—まさに王女という感じの女性だ。
王女様はにっこりと微笑みながら周囲に手を振っている。それに答えるように周囲から歓声が上がる。まるでアイドルのコンサート会場にいるかのような錯覚に陥る。
王女様がオスマン氏に二言三言挨拶をすると、オスマン氏と中に入っていった。当然私も慌ててついて行く。
中まで着いてきたのは宰相のような役職にいるであろう…マザリーニ枢機卿と呼ばれている痩せ細った人物だけだった。

中に入ると話もそこそこに王女様がマザリーニ枢機卿を部屋に案内するよう私に言いつけた。
明らかに私と枢機卿を払ってオスマン氏と何か話すつもりなのが読み取れる。
枢機卿は不機嫌そうな顔をしたが、王女に再度退席を促されると逆らう訳にもいかないのか渋々といった感じで立ちあがった。
枢機卿を部屋に案内し、元いた場所に戻った時には二人の話は終わっており、今度は王女様を部屋に案内することになった。
王女様は一体何をしに来たのだろうか?オスマン氏に伝えることがあった?何を?自国の枢機卿を払う必要があるような重要な話?全く見当もつかない…

王女様を部屋に案内し再度元の部屋に戻るとオスマン氏が一言私に呟いた。
「明日、日の出前に学院長室に来るように」と
おそらく王女様の持ってきた面倒事に私も巻き込まれるのだろう。
その後は王女様も変わった様子も見せず、夕食を食べオスマン氏と少し雑談をし部屋に戻っていった。
私も明日以降に備えるべく先日始めたばかりのトレーニングを早めに切り上げ眠ることにした。

翌朝、日が昇る前に学院長室に向かう途中で変な人とすれ違った。
その人物は前から近づいている私に気付くと、被っていたフードをより一層深くかぶり足早にすれ違い、最後は走るようにして去って行った。
怪しい…凄く怪しい。本人は目立たないようにしたいのだろうが完全に逆効果だ。
そんな人物が学院長室の方から来たということは…予想通り私も厄介事に巻き込まれるようだ。
学院長が襲われた可能性も否めないが、あの人がそんな簡単にやられるはずもない。
大方なんらかの密談でもしにきていたんだろう。
そこまで考えて先ほどの人物が王女様であったことに薄々勘付いた。
学院長室のドアをノックすると直ぐに返事が返ってきたので中に入る。
中に入るとオスマン氏が窓の外を見ながら立っていた。

「おはようございます、オールド・オスマン」

「おはようミス・ヒロミ。早速じゃが話を聞いてくれるかの」

そう切り出すや否やオスマン氏は話を始めた。
オスマン氏の話を簡単にまとめるとこういった感じだ。
現在内乱がおきているアルビオンという国にルイズ・サイト・ギーシュそれにワルドという王宮の騎士の４人が向かうことになった。
誰が頼んだのか、また何をしに行ったのかは話せないが重要なことらしい。
王宮の騎士が関わっている時点で王宮の者による依頼だと言っているようなものだと思うのだが…
もう少し詳しい事情を知りたいので探りを入れてみることにした。

「なるほど事情はわかりました。そういえば先ほどフードを深々と被った怪しげな人物がこの部屋の方から来ましたね、大方王女様といったところでしょうか？」

「ほう、そんな怪しい人物がおったのかね。こりゃ警備を強化せんといかんかの」

「…私に話すつもりはないのですか？」

「話すも何もそんな人物ワシは知らんからのう」

オスマン氏はとことんとぼけるつもりらしい。
そうなってくると私にこの話をした理由がわからない。
最初は一緒に行って来いと言われると思っていたのだが、それなら依頼主や依頼内容も明かしてくれていいはずだ。
一部を伏せて話すぐらいなら私に話さなければいいのではないだろうか？
考え込んでいる私を尻目にオスマン氏が口を開く。

「ちなみにこの件に関してはワシは一切知らない事になっとるからの？ミス・ヴァリエールやミスタ・グラモンはワシの目を盗んで勝手に出ていくのじゃ」

どうやら学院としては関知していない話になっているらしい。あくまでも生徒個人が誰かに頼まれて勝手に出て行ったことにするつもりのようだ。

「どうにも行き先がアルビオンというのが不安での？嫌な予感もしておるんじゃ。大っぴらにすることも出来んので他に頼める者もお

らんのじゃよ…申し訳ないがお願いできるかね？」

そういうとオスマン氏は私に向かって頭を下げた
行きたくないというのが本音だが、オスマン氏に頭を下げられると断ることは出来ない。
この人にはこの世界に来てからずっと世話になっている。ただでさえ恩がある相手が頭を下げているのだ。
それを断ることなど出来るはずもない…もしかしたら私は思いのほか義理人情に厚い性格なのかもしれないな。
ついでに一つ気になる事があるので尋ねてみることにした。

「頭をあげてくださいオールド・オスマン、あなたにそこまでされたら断れるわけないじゃないですか。私で良ければお力になりますよ。ところで…一つお聞きしたいのですが、どうして依頼内容などを詳しく教えていただいけないのです？どうせミス・ヴァリエール達と一緒に行くなら教えていただけてもいいと思うのですが？」

「そうじゃのう…仮に、仮にじゃよ？依頼人がお主の想像通りの人物だったとしよう。お主が依頼内容を知り、ミス・ヴァリエール達と一緒に行動し依頼を果たしたらどうなるかのう？依頼人に感謝されるのう？感謝だけで済んだらいいんじゃが…じゃから…あーそうじゃな急にアルビオン産の紅茶が飲みたくなったわい。ということじゃ」

なるほど、私のことを考えて直接私を紹介したり内容を伝えることを故意に伏せてくれているらしい。
王女様のお忍びでの頼みを聞き、ましてやそれを果たしてしまうとなると嫌でも目立つことになりそうだ。
それならば適当な理由をつけてアルビオンに行く事にして一緒に行けばいいということだ。

オスマン氏は平穏に過ごしたいという私の思いを汲み取ってくれているようだ。

「しかし素直に首を縦に振ってくれてよかったわい。万一断られた時の策も用意しておったんじゃがの…あまり気持ちのいいものでもないからのう…」

「ちなみにどんな策だったんです？」

「君をクビにしたという手紙をヴァリエール領に送るよ。というだけじゃ」

単なる脅迫だった。しかし効果的だ…
これだけで私一生ゆすられるんじゃないか？
まさかこの人がホントにそんなひどい脅しをしかけてくるとは思えないが…
冗談ですよね？その一言には凄い強制力あるんです。
本当に脅迫に使われる事が無いことを祈ってます…

「ほほ、流石のミス・ヒロミも動揺しとるの。さてと、彼らが発ってから結構な時間が経ってしもうた。そろそろ出発してくれるかの？」

悪戯っぽく笑うオスマン氏に急かされ私は学院長室を後にした。
そういえば簡単に引き受けてしまったが…馬で追いかけるの嫌だなぁ…
数時間乗っただけでも体に相当なダメージを与えられる乗馬だが、アルビオンまで行くとなると1日以上馬に乗らなければならない。
帰りのことも考えると2日以上だ。その苦痛を想像するだけで気持ちが落ち込んでいく。

引きうけてしまった以上仕方なく厩舎の方に向かう。
中庭に差し掛かったところでキュルケ、タバサ、そして使い魔である風竜のシルフィードの姿が目に入った。
私がそちらに近づいて行くとキュルケが私に気付いて話し掛けてきた。

「あら、ヒロミじゃないの。こんなところで何してるのかしら？」

「少し遠くまで紅茶を摘みに行くことになりまして…ミス・ツェルプストー達もどこかに行かれるんですか？」

「ダーリンがどこかに行くのが見えたから追いかけるつもりなの。ああ早く行かなくっちゃ！タバサ行きましょう！」

「…ちょっと待ってください。旅のお供にメイドさんはいかがでしょう？料理ぐらいなら出来ますよ」

彼女達を巻き込んでもいいものかと一瞬考えたのだが、馬に乗りたくないという想いに屈してしまった。
それにどうせ彼女らは私が何も言わなくてもサイト達を追いかけるつもりなのだ。それなら私も乗せて貰った方がいい。

「…乗って」

タバサが許可を出してくれたのでシルフィードに乗せて貰う。
馬には二度と乗りたくなかったので、シルフィードに乗せて貰えるのは非常にありがたい。
私が乗るとシルフィードは空に飛び上がった。
馬と比べて早い、それより乗り心地がいい。これなら体に深刻なダメージが来ることは無さそうだ。

自分の体の安心をしているとキュルケが話しかけてきた。どうやらタバサが読書モードに入ってしまい暇になっているらしい。

「ところで…あなたがいるってことはこの件にはオールド・オスマンも関係しているのね？」

「何のことです？私はあなたがたの冒険に無理矢理連れてこられたメイドさんですよ？」

「…まぁそういうことにしといてあげるわ。しかし…危険な香りがプンプンしてるわね…」

「危険なんですか？それなら私はミス・ツェルプストーやミス・タバサの陰に隠れて応援してますよ。頑張ってください」

「貴方ねぇ…水の魔法の使い手なんでしょう？それにこの前の氷の魔法…少なくともライン、下手したらトライアングルクラスの実力の持ち主なのはわかってるのよ。いざとなったら貴方も戦いなさいよ？」

「所詮平民の使う魔法ですよ？癒しのメイドさんに戦闘力を期待しないでください」

「…癒しのメイド……貴方の魔法で病気は治せる？」

キュルケと話しているところに突然タバサが参加してきた。
先ほどまで本を睨んでいたはずの視線がこちらを真っ直ぐ見据えている。
この目は…カトレアの病気を治せるかもしれないと知った時のルイズのそれと似ている。

タバサもルイズ同様に身近に難病にかかっている人でもいるのだろうか？

「病気ですか？治せるものは治せますが、当然治せないものもあります。実際に治療してみない事にはわかりませんね」

「…そう」

「前にも言いましたが…私でよろしければお力にはなりますよ。もちろん他言しないという条件が大前提ですが」

私の言葉を聞いて本に視線を戻すタバサ。
相変わらずの無表情だったが何となく彼女が嬉しそうな顔をしている気がした。
単に私の気のせいなのかもしれないが、喜んでくれていたらいいなと思う。

あれ？何故こんな優しい気持ちになってるんだろう、もしかして私タバサに甘い？
小動物見てるみたいな気分になって守ってあげたくなるのかなぁ…
無意識レベルで庇護欲が駆りたてられてる？
気をつけないと…うん、気をつけよう
その後はタバサが再び読書モードに戻ってしまったため、ルイズ達に追い付くまでの空の旅をキュルケの会話相手として過ごすことになった。

第十三話（前書き）

１００００ユニーク突破しました、多くの方に作品を読んでいただけて嬉しいです
今後も頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします

第十三話

しばらくシルフィードで飛ぶと馬に乗っているルイズ達が見えてきた。
サイトとギーシュは馬に乗っており、ルイズとワルドは一緒にグリフォンに乗っている。
ロリコン？一瞬脳裏によぎった単語を忘れようと必死に努力する。
一行はどうやら賊に襲われているらしい。凄くいいタイミングで来たんじゃなかろうか。

第１３話「メイドとして～その２～」

賊はあっさり退治出来た。タバサが魔法一発でほとんど倒してしまったのだ。
見た目が幼いからかその強さになんだか違和感を感じてしまう。
守るべき存在が実は自分より強いんじゃないかと言う違和感…

追いつくや否やキュルケがワルドにアタックを仕掛けていた。
しかしあっさり撃墜したらしく当のワルドはルイズと仲睦まじい雰囲気を作り出している。
え！？ルイズとワルドって婚約してるの？犯罪の臭いしかしないんですが…
ああ…ルイズの目がウットリしてる…皆ワルドみたいな男がタイプなのだろうか？
確かにワルドは決して不細工ではない、むしろカッコイイ部類には入るのだが私のイケメンレーダー的には無反応である。
どこかで経験したことのある想いに襲われる…なんだっけな…そう

だ！ヨ○様！！韓流ブームの時に同じ気持ちを味わった覚えがある。
日本中がキャーキャー言ってたけど私だけが理解できなかった時の
あの気持ちと同じだ。
そのワルドが私に話しかけてきた。
何やら不審者を見るような目つきだ。メイドを見てそんな顔をする
とは失礼な！

「彼女達が助けに来てくれたのは嬉しいのだが…君は？」

「学院で働かせていただいておりますメイドです。洗濯をしようと
していたんですが…ミス・ツェルプストーに料理要員として連れて
こられました」

このワルドって人は確かグリフォン隊の隊長だったよね？
ならここでトボけとかないと私の事が王宮に伝わってしまう。

「しかし…この旅は危険なものだ、申し訳ないが平民のメイドを連
れていくわけにはいかない。ここでお引き取り願いたいのだが？」

「ワルド様！彼女は平民でありながら魔法をつかえるのです。足手
まといにはならないはずですわ」

死ぬ覚悟は出来ておりますのでお供させてください。とか言うつも
りだったのだが…
ルイズ…おそらくフォローしてくれたつもりなんだろうな…あんま
言わないでほしいんですけど。
ルイズも馬鹿ではないはず、ワルドになら言っても問題ないと判断
したのだろうが…信頼できる人物なのだろうか？
ルイズが信頼しているということはおそらく大丈夫だと思うのだが
…他言無用だと念を押しておくことにした。

「…私はメイドとしてひっそり過ごしたいので他言は無用でお願いできますか？」

「女性の秘密を言いふらす趣味は無いよ。魔法が使えるなら着いてきても構わないが…私も婚約者を守るので手一杯なのだ、自分の身は自分で守ってくれたまえ」

良い人っぽいけどいちいち発言からロリコン臭がする。
そんなにルイズのことが好きなんだろうか？
そこにギーシュがやってきた。賊の尋問をしていたらしく、単なる物取りだったとワルドに報告している。
ギーシュ普通にカッコいい！！誰この人！？ワルドより全然カッコいいんですけど！！
アニメではさほどだったのに…いやいや落ち着け私、クールになれ…こいつは超軽薄なんだ…
Ｏｋ落ち着いた…いや、しかしカッコいい事に違いはない、クッ…まさかこんな所に罠があるとは…世の中って本当に恐ろしいよね

結局、私が落ち着いた頃には全員でラ・ロシェールと言う街に向かって出発しようとしていた。
慌ててタバサの風竜の上に乗ったのだがキュルケの姿がない。
出発してから気付いたのだが…キュルケはサイトの後ろに乗ってた。
私もギーシュの後ろ乗ればよかったなんて思ってませんよ？ええ、全く……チクショーもっと早く気付けばよかった！！
そこからラ・ロシェールまでは襲われることも無く、無事に街に到着することが出来た。

街に着くとすぐ宿に入ることになった。
一日中馬に乗っていたせいで疲れているのか皆ぐったりしている。

そんな状態だったためか、明後日まで船が出ないと聞き一様に安心したような表情になった。
この日はすぐに休むことになり部屋割をワルドが決めたのだが、ルイズとワルド、タバサとキュルケ、サイトとギーシュ、そして私と言う部屋割になった。
さっき比較に出したヨ○様に全力で謝りたい。本当に申し訳ない。
コイツただの変態だわ。
この段階で最早ワルドに対する信頼度など完全にゼロだ。いかに腕が立つ男であっても人格を疑わざるをえない。
こんな奴が私の魔法を使えるという秘密を知っているかと思うと…不安だ。果てしなく不安だ。王宮にロリっ娘がいたら全て話すに違いない。
しかしこんな状況で婚約者とはいえ一緒の部屋とるか？いや、婚約者だからこそ別の部屋にするだろう…思わず本音が口から洩れてしまう。

「ねーよ、ロリコンは帰れ」

ぼそっと小声で言ったつもりだったのだがサイトには聞こえてしまったらしく激しく食いついてきた。
もしや一緒にワルドに反論してくれと言うことだろうか？
サイトの気持ちもわからんでもないが、もはやワルドに関わること自体が嫌なのでそそくさとその場を後にすることにした。
私が席を立つと皆その後に続くように席を立った。サイトはブチブチ言っているが結局その部屋割で休むことになったようだ。
うわ…私の部屋ルイズ達の部屋の真下なんですけど…さっさと眠ってしまわないと明日以降気まずい事になる可能性がある。事に及ぶにしても私が熟睡してからにしてください…
部屋に着くや否や布団にもぐりこむことにした。時間的には少し早かったが、疲れていたお陰であっさりと眠りに着くことが出来た。

翌朝、昨日早く寝たせいかまだ空も薄暗い頃に目が覚めた。
部屋から出たところでサイトとバッタリ出くわした。昨日からイライラしているので何となくからかってみることにした。

「きのうはおたのしみでしたね」

「ッ！！…見てたのか！」

なんてからかいがいがある子なんだろう…カマをかけたところ簡単に引っかかってくれた。
反応を見るにホントに何かあったらしい。私はニコニコしながらサイトに答える。

「何も見ておりませんよ、私は昨日部屋に入ってすぐに寝てしまいましたから」

「ッ！！い、いや別に何も無かったんだけどな？」

「しかしサイトさんが心配するのは当然かも知れませんね、昨日のワルド様の行動は私も少々不可解だと感じておりましたから。よろしければ少しお部屋でお話ししますか？」

そう言って私の部屋に誘うとホイホイついて来るサイト。
一緒にワルドの悪口でもいうつもりなのだろうが、サイトが部屋に入ったが最後、昨日何があったのか詳しく聞かせてもらうまで出すつもりはない。
部屋にはベッドが一つあるだけなので必然的に並んでベッドに腰掛けることになる。

サイトは少し緊張しているようなので緊張をほぐしてあげることにした。

「おや、サイトさん顔が赤いですが大丈夫ですか？」

そう言ってサイトの額に自分の額をくっつけて熱を測ってみる。

うん、わかってたけど平熱だ。

「ふむ、熱は無いみたいですね？」

「ヒ、ヒ、ヒロミ！？か、か、からかわないでくれよ！」

「おや、もうバレましたか。なかなかの観察力をおもちのようで」

「へ…」

「いや、ですからからかっただけです。リアルにこんなことしてくる女の子がいるとでも？ゲームを参考にからかったまでです」

「酷ぇよ…あんまりだよ…」

一度持ち上げられてから落とされたせいかサイトがうなだれている。

緊張は解けたみたいだね！！

またいい人っぷりを発揮してしまった…

「すいません、でもこんなこと出来るのはサイトさんだけなんですよ？他の方を本心からからかったりすることなんて出来ませんから」

「それは褒められてる…のか？」

「別段褒めては無いですけど…特別な存在であることは間違いないですよ。強いて言うなら日本から来た仲間ですかね。そんなことより、昨日のこと教えて頂けませんか？特にロリコンについて詳しく」

仲間と言われたのが照れくさかったのかサイトはポリポリと頭を掻きながら話し始めた。

「ワルドさんか？あの人は結局ルイズと別の部屋で寝たんだよ。はっきりした様子はわからなかったけど…ルイズが追い出した…んだと思う」

「…それ完全に覗くか聞き耳立てるかしてましたよね？」

「キ、キュルケも一緒だったんだぜ？」

「最終的にはミス・ツェルプストーといるところをミス・ヴァリエールに見つかって怒られた。といったところでしょうか？」

「何で知ってるんだよ！？やっぱ見てただろ！？」

どうやら最終的にはいつものパターンに落ち着いたらしい。

学院で過ごしていると1日1回はそのシーンを目撃することになるのだが…彼自身は最終的にルイズに怒られる事をパターンだと認識していないようだ。

ここまでサイトの話を聞いて昨日何も無かったことが明らかになったのだが…いかんせん朝が早いためまだ誰も起きている気配がない。

どうしようか考えているとサイトの方から話しかけてきた。

「あのさ、前から気になってたんだけど…ヒロミって前の世界にいた時からそんな話し方だったのか？」

「まさか、もっと普通の話し方でしたよ」

「じゃあなんでこっちでは誰に対してもそういう話し方なんだ？」

「キャラ作りです。平民のメイドを演じている限りさほど目立つことは無いかと思いまして」

「キャラ作りかよ…なんで目立たないようにしてるんだ？」

「異世界から来た事や変な力があることが王宮にでもばれたら面倒でしょう？例えば…半強制的に戦争なんかに使われるのはゴメンです。私は死ぬのが怖い、全く戦わないで生きていくのは無理だとしても出来る限り平穏に暮らしたいんです。ですから戦う場ぐらいは自分で選択するつもりです」

「そんなもんなのか？俺も死ぬのは怖いけど、なんていうか…俺は逆に伝説って聞いてちょっと嬉しかったけどな。怖いと思う反面戦うのも悪くないかな？なんて思ってる」

「それはサイトさんにはミス・ヴァリエールがおられるからではないでしょうか？愛する人を守るために闘う…素敵じゃありませんか」

「べ、別にルイズの事なんか…」

「あら？嫌いだとおっしゃるのですか？」

「嫌いじゃないけど…」

「ふふ、素直じゃありませんね」

サイトは顔を真っ赤にして否定の言葉を浮かべる。
青春してるねぇ…なんて思っているとサイトから言葉が飛んできた。

「そういうヒロミこそ素直じゃないじゃないか」

「私がですか？」

「そうだよ。こっち着てからずっとキャラ演じてるんだろ？それこそ自分を出してないじゃねーかよ。ずっと演じてるのって疲れないか？俺の前でぐらい普段の自分を出してもいいんじゃねーの？」

「ふふふ…まるで恋人のような言葉ですね。サイトさんは優しいんですね、ありがとうございます。ですが私は人によって態度を変えるなんて器用なことは出来ませんので、ずっとメイドさんを演じ続けるつもりです。そのかわり…辛くなった時には頼ってもいいですか？」

体を少し寄せ、上目づかいでサイトにおねだりしてみる。
サイトは軽い混乱状態に陥っているらしくドギマギしながら答えに困っている。

「…サイトさんはそういうところがなかったらもう少し頼りになるんですけどね、これからは女には騙されないように気をつけてくださいね」

「演技！？汚ぇ…また騙された…」

「ふふ…私のことはビッチなメイドとでも呼んでください」

「誇らしげに言うことじゃないから！！ってか自覚ありかよ！たちわりーな！！」

「冗談はこのぐらいにしておきましょうか。この世界に来てからこんなに楽しめたのは初めてです。サイトさんのおかげですね…ありがとうございます。さて、そろそろ皆さんが起きてくる頃ではないでしょうか、私達も食事に行きましょう」

サイトにそう言ってベッドから立ち上がる、ドアにむかって歩き出した時に背後から「よかったな」と声が聞こえてきた。
その声を聞いた瞬間ホッとしたのか目から涙が出てくる。
何となく泣いていることがサイトにバレるのが照れくさかったので振りかえらず、涙も拭かずにそのままドアを開けて部屋を出た。
部屋を出たところでルイズと鉢合わせにしてしまう。

「あら、おはようヒロミ。ん？どうしたの？アナタが泣いてるなんて…」

「おはようございます、ミス・ヴァリエール。目にゴミが入ってしまって」

慌てて涙をぬぐい誤魔化してみるもルイズの視点は私の部屋の一点を見続けている。
振りかえってその視線の先を見ると…案の定サイトがいた。

「サ、サ、サイト？あんたヒロミの部屋でな、な、な、何してるの？ヒロミが泣いて出てきたってことは…まさかあんた…」

そういうとルイズはどこに持っていたのか鞭を取り出した。
それを見て慌てたのはサイトである。

「ちょっと待て！何か誤解してないかルイズ！！俺の話を…」

「バカ犬にはしつけが必要な様ね…」

問答無用で鞭をサイトに叩きつけるルイズ。

勘違いにもほどがある。原因が私にもあることから罪悪感も手伝い、サイトがかわいそうなので止めに入ることにした。

「ミス・ヴァリエール、何か勘違いされていませんか？サイトさんは貴方のことを心配してつい今しがた私のところに相談に来たのですよ」

「そ、相談？」

「そうです。サイトさんはミス・ヴァリエールのワルド様に対する態度に危ういものを感じているのです、盲信的に信じておられるようですから。また自分はそこまで頼りにならないのだろうか？とも悲観されておられました。それほど主人思いの使い魔さんを鞭で打つのはどうかと思いますが？」

一瞬の沈黙の後ルイズが口を開く。

「そ、そうだったの。私はてっきりヒロミにちょっかい出してるのかと思ったわ。それもこれもあんたがいつもサカってるのが悪いのよ！！それにご主人様を心配だなんて１００年早いのよ、あんたは黙ってご主人様の言うことを聞いていればいいんだから！！」

口ではサイトに厳しい言葉を投げかけているが、その口元は笑っている。

どうやらサイトに心配されていたのが嬉しい様だ…素直じゃないなぁ…

サイトはルイズのその様子には気付いておらず「へいへい、そーですか」と流している。

なんて鈍い奴なんだ…ルイズ明らかに嬉しそうじゃん…気付けよ…

結局朝食の席に着くまでの間、サイトが嬉しそうにしているルイズに気付くことは無かった。

第十四話

アルビオン行きの船が出るのは明日と言うことで今日一日はゆっくりできることになったのだが…暇だ
朝食を食べ終わるとすぐに何もすることが無くなった。普段なら読書をするところだが読む本を持っていない。
仕方がないので自室に戻りゆっくり休むことにした。
ストレッチをして体をほぐしながら外を見るとサイトとワルドが中庭のほうに歩いて行くのが見えた。
中庭に着いてもサイトとワルドは何やら話しているようだ、ここからではよく見えないが仲良く話しているのではなさそうだ。
その場にルイズが走っていくのが見える。痴情の縺れってやつだろうか？…これは近くに行ってこっそり見る必要があるよね！

第１４話「メイドとして～その３～」

部屋を飛び出し中庭の方に急いで走っていく。
こっそりと覗き見る為にルイズ達とは別のルートから中庭に向かうことにした。
少し距離はあるが、早く着くことよりもばれないで覗く事を優先したい。
数分走って別の中庭への道からこっそりと顔を出すと、サイトとワルドが戦っているところだった。
やっぱりルイズを巡っての決闘…だよね？
サイトが剣を握り人間離れした速さで動き攻撃を繰り出している。
しかしワルドはその攻撃をことごとくいなしサイトに反撃を加えている。

…ワルド強いじゃん！人としては問題あると思うけど戦闘力は高いのね。
サイトと向かい合っているその顔からは余裕が感じられる。さすがは隊長といったところだろうか。
サイト負けたら凹むんだろうなぁ、サイトに勝ってほしいけど…あ、負けた。
決着はついた様なのだが、その後にワルドが何か話している。
しまった、ここからじゃ遠すぎて会話が聞こえない…あ、ルイズがワルドについてった、サイトは…置き去りですよね。
サイトに話し掛けるわけにもいかないので、バレないようにその場を去り宿に戻ることにした。

夕食の時間になってもワルドが嬉々とした表情を浮かべている一方、サイトは何か思い悩んだ様子をしていた。
一体ワルドに何を言われたんだろうか？気になる…
なんとか慰めてやりたいところだが、彼が敗者だと知っているだけにかける言葉というのは難しい。
こちらとしては励ましているつもりの言葉でも、相手からすると凹む内容の事もある。
何より彼が今どうして落ち込んでいるのかそのはっきりした理由がわからない、ワルドに負けた事？ただ負けただけでそんなに落ち込むだろうか？
やはりルイズに関する何かが大きく影響しているのだろう。そう考えると今はそっとしておいてあげるのがいい気がする。
夕食もそこそこにサイトは部屋に戻っていった。重症の様だ。

私もさっさと部屋に戻って寝ようかと思っていたのだがキュルケに飲みに誘われた。どうやら皆で飲むことになったらしい。
戦闘の前夜に飲むのもどうかと思い、平民の私が一緒のテーブルで飲むわけにはいかないと断ったのだが、今日ぐらい一緒のテーブル

で飲んでもいいと押し切られてしまった。
最初はチビチビ飲むようにしようと思っていたのだが、一度飲み出すと止まらない。
よくよく考えると今日一日私はほとんど部屋に籠り、延々トレーニングをして時間を潰していた。要するに…ストレスが溜まっているのだ。
元々さほどアルコールに強いわけでもない私がガブガブ飲んだことですぐに酔いがまわり眠ってしまった。

「ヒロミ!!いい加減起きなさい!!」

気持ちよく寝ている私の眠りを妨げるキュルケの声…ううん、頭がガンガンする。
もうちょい寝かしてください…あと5分…

「どんだけ図太いのよ…敵だっていってるでしょ!!」

キュルケの言葉が咄嗟には理解できない。
しかし頭に重い衝撃が走ったことで目が覚める、目を開けると横には杖を持ったタバサが立っていた。
あれ?さっきまで机に突っ伏して寝ていたはずなのだが今は床で寝かされている。
起き上がり周囲を見渡すと傭兵のような集団に囲まれている。…状況に頭がついてこない。

「…囲まれてますけど…どなたの知り合いですか?」

「だから襲われてるのよ!!見たらわかるでしょ!!いつまで寝ぼけてるつもり?」

キュルケが言うには、突然襲われたのでサイトとルイズとワルドを目的地に届ける為に私達は囮として残ることになったらしい。
なるほど。彼らをアルビオンに行かせる為に、任務内容を知らない私達が残るのは当然だ。
しかしそれでも一言だけ言わせてもらいたい。

「どうして私の知らないところで話を進めちゃうんですか！！」

「あなたが寝てたからに決まってるでしょ！いいからあいつ等を片付けるのを手伝いなさい」

ですよね。キュルケさんが至極正論だと思います。
さてどうしようか、手伝えと言われても…氷の魔法ぐらいなら使ってみてもいいけど、いかんせん敵の数が多い。
ブリザラ程度の魔法では大局に大した影響を与えられないように思う。かといってそれ以上の魔法を使って目立つのもあまり好ましくないし…
私があれこれ考えている間にキュルケがギーシュとタバサに指示を出している。
どうやら作戦が浮かんだようだ。ギーシュがゴーレムで油を撒き、そこにキュルケが炎を放つ、それをタバサが風で運ぶという役割分担で行くらしい。
やることがない私は全員に補助魔法を使っていくことにした。固まっているから一つの魔法につき一度で全員に効果が行くはずだ。
油を撒き散らし炎を放ち風に乗せて攻撃する…単純に思える攻撃だったが効果は絶大だったようで、すぐに宿の中から敵はいなくなった。
タバサが外の敵にも炎を運んでいるらしく、敵がいなくなった後も外から悲鳴が聞こえてくる。
こちらが快勝ムードになったところで見覚えのあるゴーレムが姿を

現した。
肩の上には見覚えのある女性…土くれのフーケともう一人、仮面をつけた男が乗っていた。

「調子に乗るんじゃないよ小娘ども!!まとめて潰してやるよ!!」

「皆さん逃げましょう」

補助魔法はシェルとプロテスとヘイストを掛けることが出来たのだが…
フーケだけでも勝てるかどうか怪しいのに、今回はもう一人新手の男がいる。
私に補助がかかっていることは間違いないが、全員に補助がちゃんと掛かっているかどうかというと怪しい。
そんな状態で彼女達全員を守りながら戦うのは不可能だ。
ヘイストだけでも全員に掛かっていたら逃げること自体はさほど難しくないはずだ。
キュルケ・タバサとアイコンタクトを交し逃げようとした瞬間…

「僕は逃げないぞ!!勇敢に戦って薔薇と散るんだっ!!」

ギーシュがわめきながら突進しようとしている、巨大なゴーレムを見て混乱しているのだろうか?
なんとかタバサが杖で足を引っ掛けて止める。逃げたい。正直逃げたい…
キュルケが必死にギーシュを説得しようとしているが上手くいっていない。
いつの間にかゴーレムの肩に乗っていた男がゴーレムから居なくなっていた。そのことに気付いた直後裏口のドアが開く音が聞こえる…どうやら逃がしてくれるつもりはないらしい。

「ギーシュさん！長剣を錬金してください！！早く！！」

ギーシュは一瞬ポカンとしていたが直ぐに言われたとおりに剣を作り私に手渡した。
私が剣を握り締めるとフーケが驚いたような顔をした。

「あの時の変なメイドじゃないかい、あんた剣士だったのかい？」

「…癒しのメイドさんが戦うメイドさんになっただけです。素手よりは剣でもあったほうが戦いやすいでしょ？」

「はっ！あんたあたしら相手に戦うつもりなのかい？」

「挟み撃ちにしておいて逃がしてくれるんですか？」

「そりゃ無理なお願いさね！！」

やはり逃がしてくれるつもりはないらしい。一瞬でも期待した自分が馬鹿だったと思う。
フーケのゴーレムだけでも手一杯なのにもう一人とか勘弁してほしい。
もう一人が弱いことを期待するしかないのか…おそらく弱いってことはないんだろうが。

「さて、皆さんもう逃げられそうにありませんが…どうしましょう？」

「仮面の男は危険。間違いなくフーケより強い」

「…ではフーケならなんとかなりそうですか？」

「フーケだけなら私とキュルケとギーシュでなんとか出来ると思う、でもそうすると貴方が危険」

「他に手も無いでしょう？フーケをお願いしますよ。どちらか片方だけでも倒さないと逃げれませんので、私は足止めでもしてきます。私が逃げて来た時の為に道を作っておいてください」

そう言い残して私はタバサの返事も聞かず単身宿の奥に足を進めた。同時にマバリアの詠唱に入る。魔法が発動したところでちょうど仮面の男と対峙する形になった。

さて…タバサ情報によるとコイツは強いらしい。

私は見ただけでは相手の強さなどわからないが、何となく危険な雰囲気が漂っている事ぐらいならわかる…コイツが私達を本気で殺そうとしていることも。

この世界に来て何度か戦闘の経験はある。殺されそうになったこともある。相手が死んでもいいと思ったこともある。しかし明確に殺す意思を持って戦ったことは一度も無い。

しかし今回は殺しに行く、自分が生き残るために他人を殺す。相手を殺さないと私が死ぬ事になるだろう。

私自身生きる為に殺すというその行為に抵抗は無いと思っていたが、実際に殺した経験が無いという事実が不安を生み出す。

だから決心する。戸惑ってしまわないように、不測の事態にも対応できるように、殺すと心の中で深く何度も何度も何度も…

嫌な汗が全身から噴き出して来る。自身がこれから行う行為について考えれば考えるほど。

わかってはいたが気持ちのいいものではない、しかしこの不快さを感じたことで覚悟は出来た。

殺すつもりで、この世界に来て一度も使っていない技を使う。無意

識下で使用を禁じていた技を。

「北斗骨砕打！！」

向かい合って立っている男に剣を振りおろしながら叫ぶ。
男は攻撃をもろに喰らい仮面越しにもわかる驚愕の表情を浮かべている。
杖でなく剣を振りかざした攻撃に驚いているのか、純粋に見た事も無い技に驚いているのかはわからないが…
多少のダメージはあるようだが、デスの追加効果が発動していない…まずいな。
補助魔法で自身の身体能力の底上げをしているとはいえ、所詮私は戦闘に関しては素人である。
体捌きなど相手になるわけもなく、ましてや相手が距離を詰めてきたら私は一気に不利になる。
出来ることなら最初の不意の一撃で決めてしまいたかったのだがそうはいかず、男は杖を握り締め詠唱を始めた。
マズイ、こんな狭いところ魔法を使われては避けようがない。
杖を取り出したいが剣を手放す気にはなれない。仕方なく杖なしで詠唱に入る。

「ライトニング・クラウド」「リフレク」

男の詠唱が一瞬早く終わり稲妻が私に襲いかかる。左腕に焼けるような痛みが走った瞬間にこちらの障壁が形成される。
障壁が形成されると障壁に雷が反射されていくのが見える。
カリーヌさんにはあっさり破られた障壁だが今回はどうなのだろうか？咄嗟に発動させたものの不安がよぎる。
障壁が間に合わなかった以外の雷は全て反射出来たようだが、反射していた部分から障壁にひびが入り崩れ去った。

この世界の魔法に対してリフレクは相性が悪いのだろうか？

「いてぇ…」

込み上げてくる痛みに思わず素に戻ってしまう。
自身の左腕に目を落とすと私が左腕は半ば炭化しているようにどす黒く変色していた。
それに対し、男は自身が放った魔法の反射を喰らいダメージが足に来ているらしくフラフラしている。
このチャンスを逃す手はない。

「北斗骨砕打！」

魔法を受けひびが入ってしまっている剣を必死に振りあげる。
男の足元から半透明のクリスタルのようなものがせり上がって来て男を貫いた。
男は一瞬ビクンと動いたかと思うと、全身の力が抜けたようにその場に倒れた。どうやら追加効果が発動したらしい。
ホッとして体から力を抜いたその目の前で…男の体が煙のように消えていった。

「…消えた？」

男が何故消えたのかがわからない。死んだように見えたのだが…男の仲間が助けたのか？あるいは実は生きていて転移魔法の類の魔法でも使っただろうか。
そのいずれにしろ、そういった魔法は文献でも見た記憶がないが…
もしや未知の魔法？
そこまで考えたところで突然タバサ達が心配になってきたので皆の所に急いで戻ることにした。

私が走って宿の入口の方に戻るとフーケのゴーレムが炎上しているところだった。
その後ろの方ではフーケが走って逃げていく姿が見えている。
あれ？勝ってるじゃん…心配して急いで来たのに…

「凄いですね、あのゴーレムを倒すなんて」

後ろからの私の声に驚いたように振り返るタバサ、キュルケ、ギーシュ。

「あんたその腕どうしたのよ！？」

褒めたのだから自慢の一つでもしてほしかったのだが…私を見て発せられた第一声がキュルケのそれだった。
そういえば戻ってくるまでに腕を治すのを忘れていた。
辛うじて腕自体は動くものの、自分でもグロテスクな物をぶら下げていると思う。

「これですか？見た目ほど大した怪我じゃありませんのでちゃんと治しておきますよ」

「…仮面の男は？」

「一応…倒しました」

私の台詞にタバサがびっくりしたように目を見開いた。何か信じられないものを見ているかのようだ。
それほどあの男の実力を高く評価していたのだろうか？

「…本当に？」

「ええ、自分でもラッキーだったと思いますが。そういえば…気になることがありまして」

「何？」

「私はあの男を確かに殺したはずなんですが…次の瞬間には煙のように体が消えちゃったんですよ。これって転移魔法か何かが関わっているんですかね？」

「転移魔法！？そんな魔法聞いたことも無い！！」

「そうよ、私も転移魔法なんて私も聞いたことないわよ！」

ギーシュとキュルケが口々に反論する。しかしタバサは違う意見を口にした。

「可能性としては二つある。一つはあなたの言うとおり転移魔法。もう一つは偏在」

「偏在…確かに相手はライトニング・クラウドを使っておりました。相当な風の使い手と見受けました…偏在の可能性は高いですね。とすると…本体はどこに？」

「おそらくルイズ達のところに向かってるはず」

「では追いかけましょうか。船着き場に向かえばいいんでしょうか？私は怪我を治しますので、皆さん道中で的に出くわしたらお願いしますよ？」

「私はもう精神力空っぽよ?」

「僕もだよ」

「…私も」

「…わかりました。私がなんとかしましょう」

とりあえず怪我を治さないと満足に左手が動いてくれないので『ケアルガ』を使う。

見る見るうちに怪我が治っていくのを3人は驚きの表情で見ている。

「君…なんだねその治癒魔法は!?そこまで効果が高いものは見た事がないぞ!!」

「私もそこまでの魔法を使えるとは思ってなかったわ…あなた一体何者なの?」

「ですから私は癒しのメイドさんですよ。使っているのは東方の秘術みたいなものだと思ってください。さて…ミス・ツェルプストーとミス・タバサには1度言ったと思いますが…私の魔法のことは他言禁止ですよ。ミスタ・グラモン?私がしたことは基本的に全て誰か他人の功績ということにしていただきたい」

「ああ。いや、しかしその魔法があれば…」

「ギーシュ、あんたは女性が言わないでくれと言った話をベラベラ他人に喋るような奴なのかしら?」

「はっ！まさか！…わかった、このギーシュ・ド・グラモンが黙っておくことを約束するよ」

キュルケが助け船を出してくれたおかげでなんとかギーシュにも口止めが出来た。
正直今までの様子を見ている限りギーシュは少し不安だが…それでもワルドよりはまだ黙っていそうだと考えることにした。
さて、後は外に残っている傭兵達をなんとかするだけなのだが…

「外に傭兵は何人ぐらい残っているんです？」

「はっきりした数はわからないけど…おそらく３０人ぐらいじゃないかしら。裏口の方が手薄だと思うから裏口から脱出しましょう」

こうして私達はキュルケの提案で裏口から脱出することとなった。

第十五話

宿から抜けだした私達はキュルケの意見に従い船着き場に向かうことになった。
船着き場に着くまでも警戒態勢で移動を続けていたのだが、襲われることは無かった。
今現在戦えるのは私しかいないので襲われない事は非常にありがたかった。

第15話「メイドとして～その4～」

船着き場に着きルイズ達を探したのだがどこにも姿は無かったので船の管理をしている男に尋ねてみた。
どうやら無理を言って船を出して貰いアルビオンに向かったらしい。
私達も船を出して貰うように頼んだのだが何でも船を飛ばすのに必要な風石と言う物が足りないらしく出港は不可能だそうだ。
アルビオンは遥か空高くに浮かんでいる大陸なのだ。船を出して貰えない事には行く方法が無い。
皆黙り込んでしまったので私が口を開く。

「皆さんどうなさいますか?明日まで待ってから船で追いかけますか?」

「それじゃあ遅いんじゃないかね?」

「遅いでしょうね、かといって行く方法も無し。か、お手上げね」

「…シルフィードがいる」

「シルフィードって…タバサ…シルフィードは大丈夫なわけ？」

「頑張らせるから大丈夫」

根性論！？大丈夫なのかな。しかし他に方法が無いのは確かだ。
明日まで待って間に合わないかもしれない船に乗っていくか、シルフィードに乗って今すぐ行くかの二つに一つだ。
結局シルフィードに頑張ってもらい今すぐアルビオンに向かうことになった。
早速タバサがシルフィードを呼び皆次々とその上に乗っていく。
全員が乗りシルフィードが飛び立とうとしたところでギーシュが待ったをかけた。

「ちょっと待ってくれたまえ、僕の愛しいヴェルダンデも連れて行ってはくれないか？」

「ヴェルダンデって…あんたの使い魔のジャイアントモールじゃないの？あんなデカイのシルフィードは運べるの？」

「…大丈夫。頑張らせる」

「ですって、さっさと乗せちゃいなさいな」

「おおっ、ありがとう。おいでヴェルダンデ」

ギーシュが呼ぶと熊ぐらいもあろうかというモグラが地面から顔を出しシルフィードに飛び乗った。
飛び乗る直前までシルフィードがきゅいきゅい言いながら首を横に

振っているように見えたのは気のせいだろうか。

「アルビオンまで。頑張って飛んで」

タバサに命令されシルフィードが飛びあがる。
どれぐらいの時間飛ぶことになるのかはわからないが長い空の旅になりそうだ。

「さて、皆さんこれから到着まで時間があるでしょう、しばらくお休みになられてください。その間は私が異常がないか見張っておりますので」

「あなたは休まないの？」

「到着までに少しは休みたいですが…先に皆さんからです。正直、精神力の無いメイジがいたところで何の役にもたちません。少しだけ残っている私が起きているのは当然でしょう？ですからまずはしっかり休んでください。私が休むのはそれからです」

「…私も起きている、休むのは2人ずつでいい」

「無理をなさらなくても結構ですよ？私は先ほどまで寝ておりましたからね。ミス・タバサはお疲れでしょうし眠いのでは？」

「大丈夫、それに…少し2人で話したいことがある」

タバサがこんなことを言うのは珍しいのだろうか、キュルケが驚いた様子でタバサを見つめている。
タバサも視線をキュルケにやった、2人の間で会話は一言も交されなかったが意思疎通は終了したらしい。

「ギーシュ、私達はそっちで休んでましょ」

そう言ってキュルケはギーシュを連れて私たちから取れるだけ距離を取った。

タバサの話をギーシュに聞かれないようにするための行為であることは明らかだが、ギーシュは文句も言わず素直に移動した。

私は純粋にいい奴らだと思った。彼女らが離れたところでタバサが話し始める。

「あなたの魔法について聞きたい。さっきの見た事がない治癒魔法は絶大な効果だった。そしてあなたは言った、病気を治すことはもしかしたら出来るかもしれない。と。それなら…病気を治せるかもしれない魔法を私に教えて欲しい」

「残念ながら無駄でしょう。これは東方の…特殊な血筋の者しか使えない魔法なんです。ですから教えたところで貴方が使えるようになる事はないと思います」

「それでも教えてほしい、使えるかどうかは試してみないとわからない」

「教えたいのは山々なんですけど…気付いたら使えたと言うかなんと言うか…覚えるって言う過程が無かったものですから……あー、どなたかの病気を治したいんですよね?でしたら私が直接出向いたほうが話は早いんですが…魔法を教えてと頼むと言うことは…出向くのは困難な場所なんでしょうか?」

「とても困難、貴方がトリステイン魔法学院に勤めている限り来ないほうが賢明」

どこだ?トリステインの学院あら干渉が難しいところ?他国にある学院かなにかだろうか?詮索…はしないほうがよさそうだな。出来れば断りたいんだけど…凄い熱意を感じるんだよね…適当な言い訳だと喰らいついてきそうな。
どうせ使えないだろうし…教えるぐらい構わないか。タバサなら他の人に余計なことを言いそうにないし。

「わかりました、学院に戻ったら治療の魔法をお教えしましょう。ただ…私自身教え方がいまいちわかりません、覚えられる見込みもほとんどありませんが…それでもよろしいですか?」

「構わない、それに誰にも言わないことも約束する」

コクリと頷きそれっきり黙り込むタバサ。何も言っていないのに口外しないと言う辺りタバサの聡明さを感じさせられる。
暗いせいで読書も出来ないらしく黙って座っていたタバサであったが、私が「眠っててていいですよ」と言うと、すぅすぅと寝息を立て始めた…しばらくは眠るかどうか迷っていたようだが。
顔を覗き込んでみるとどことなく嬉しそうな寝顔を浮かべながら眠っていた。
その後は…誰も起きないからひとりでずっと見張ってましたよ。何も無い真っ暗な空とかをね。
明け方にタバサがムクリと起き上がって「交代」って言ってくれた時の嬉しさったらなかった。思わずタバサを抱きしめてしまったぐらいだ。

タバサのお陰で到着まで少しだけ眠ることが出来た。
もうすぐ着く。と起こされた時にはものすごい不快感を感じたが、一睡もしていないよりはマシなはずだ。

横で一緒に起こされているところを見ると、どうやらキュルケとギーシュは結局到着まで寝ていたらしい。
気のせいかもしれないが起き上がった彼女らの顔がサッパリしているように見えてしまい腹が立つ。
アルビオンに到着した瞬間にシルフィードがその場で倒れこんで眠り始めた…そういえば私より寝てない奴がいたんだ、本当にお疲れ様です。

「で、これからどうする？」

「…居場所がわからないことにはどうしようもない」

「移動するにしてもシルフィードが使えないんじゃどうしようもないね…ってヴェルダンデ！？どうしたんだい？待ちたまえヴェルダンデ！！」

ギーシュの呼び掛けを無視してヴェルダンデは穴を掘ってどんどん先に進んでいってしまう。

「あなたの使い魔行っちゃったけど…どうするのよギーシュ？」

「もちろん追いかけるとも！！何かを感じ取って堀り出したに違いない！！」

「…ですって、タバサどうする？」

「…追いかけてもいい。でも最低1人は残るべき、シルフィードが起きるまで守ってないと帰れなくなるかもしれない」

「なるほどね、残るのは…ギーシュでいいんじゃない？一番使えな

いし」

「何を馬鹿な！僕のヴェルダンデが進んでいるんだ、僕が行かないわけにはいかないだろう！」

「う…確かに一理あるわね、でも私は残りたくないし…」

「…ヒロミが残るのが最も合理的。一番守備力の高い人が残るべき」

「私としては皆さんが心配なのですが…退路の確保も重要ですものね、わかりました。ただし危険と感じたら急いで戻ってきてくださいよ？」

「大丈夫よ、それじゃ行きましょうか」

「僕たちの活躍を期待して待っていてくれたまえ」

「…1日以内には戻ってくる」

なんて軽口を叩きながら全員が穴に入っていき、その場には私とシルフィードが残された。

暇だが寝るわけにはいかない。何があるかわからない場所だけに頑張って起きてないと…寝ている間に殺されてました、なんて結末は冗談じゃない。

さて、シルフィードに回復魔法でも掛けてやるか、疲労に効果があるのかどうかはわからないが何もしないよりはマシだろう。

まず『リジェネ』を掛けてやる。シルフィードの体が光に包まれている辺り魔法の効果自体はあるらしい。続いて自身のＭＰ回復も兼ねてシルフィードに触れながら『チャクラ』を使う。

シルフィードの体が光に包まれた瞬間、シルフィードの目が開いた。

「きゅい？精神力が回復した！？…なんだ夢なのね」

「…はい？」

「きゅい！？お姉さまが前にお話してたヒロミとか言うメイドなのね。まずいのね、夢じゃなかったのね。怒られるのね」

聞き間違いかと思ったがそうではないらしい。
タバサの使い魔が…喋っている。
この世界の竜は普通に喋るのだろうか？そんなことを本で読んだ記憶はないが。

「……あなた喋れたんですか？」

「そんなわけないのね、喋れないのね。喋ったらお姉さまに怒られるのね」

「お姉さま…ってどなたですか？」

「私の御主人様のことなのね」

そこまで話してはっとしたように口を閉じるシルフィード。
どうやら自分が未だに私と受け答えしていることに気付いたらしい。
この竜はちょっと抜けているのだろうか？

「ミス・タバサには貴方が話したことは黙っておいてあげましょうか？」

「ほんとなのね!?ありがとなのね」

きゅいきゅい言いながら喜んでいるシルフィードに話し続ける。

「そのかわり私のさっきの魔法も黙っておいてくださいよ」

「精神力が回復したやつなのね?どうしてなのね?凄く便利なのね」

「どうしてもです。まぁアナタが誰かに話せば私もミス・タバサに貴方が話したことをばらすだけです」

「お、お姉さまで脅すとは卑怯なのね。わかったのね誰にも言わないのね」

「ところで…竜って話せましたっけ?」

「それに関しては何も言えないのね、言ったらお姉さまにもっと怒られるのね」

この反応に加えてタバサが口止めをしている事から考えても普通は話せないのだろう。

しかしシルフィードが話せることが分かったのは嬉しい誤算だ、話していれば眠くなることも無いだろう。

問題はシルフィードが眠たくないかどうかなのだが…

「シルフィード?貴方は起きていますが眠らなくても大丈夫なのですか?」

「きゅい?さっきの魔法で精神力が回復したから起きていられるの

ね」

「ということはあれを何度か使えばしばらく起きていられるということですか？」

「出来るのね？後1、2回やってくれれば後1日は起きていても大丈夫なのね」

「そうしたら私の話し相手になってくれませんか？何かしてないと眠ってしまいそうで…ああ、もちろんミス・タバサには黙っておきますよ？」

「ほんとなのね？内緒にしてくれるならお話したいのね！ずっと黙ってるのはしんどいのね！！」

私はシルフィードの要望通り『チャクラ』を2度使う。

当のシルフィードは「凄いのね、こんな魔法見た事無いのね！！」と騒いでいる。

その騒ぎっぷりを見て不安になってきた…コイツ誰かにポロっと話すんじゃないだろうか？

「これでシルフィはしばらく寝なくても大丈夫なのね。それにしても変な魔法なのね…精霊魔法とも違うみたいなのね」

「シルフィードは精霊魔法を見た事があるんですか？」

「見た事も何もシルフィは精霊魔法を使えるのね！」

「…え？」

「…い、今のは嘘なのね！韻竜じゃないと精霊魔法は使えないのね！」

「…韻竜？どこかで聞いたような…あ、人語を操り精霊魔法を駆使する太古の竜でしたっけ？太古の竜…絶滅してなかったんですね」

「ど、どうしてシルフィが韻竜だってわかったのね？」

…タバサが喋っちゃダメって言っていた理由が完全にわかった気がする。
ただ喋る竜が珍しいからってわけじゃないんだな…
喋れば喋るほどボロが出るタイプなんだろう。
情報の漏洩を防ぐためには完全に黙らせる必要があるってわけか…

「えっと…全部ミス・タバサには黙っててあげますから…」

「ありがとなのね！流石にこれがバレたらお姉さまに殺されるかもしれないのね。メイドはいい奴なのね！」

「…ところでどうしてミス・タバサがお姉さまなんです？まさかミス・タバサもドラゴンってわけじゃないでしょう？」

「シルフィがそう呼んでるだけなのね。お姉さまの許可もちゃんと取ったのね」

「シルフィードはミス・タバサのことが大好きなんですね」

「当たり前なのね！それにお姉さまはとってもかわいそうなのね、シルフィが力になってあげないといけないのね！さっきの飛んでる

時の話も聞いてたのね、お姉さまはメイドのことを頼りにしてたのね。シルフィはメイドがお姉さまを助けてくれるのが嬉しいのね。だからシルフィはメイドのことが気に入ったのね」

シルフィードは嬉しそうにきゅいきゅい言いながらはしゃいでいる。
そしてタバサに呼ばれるまで自分がどんな生活をしていたのか、タバサに呼び出されてからどんなことがあったのかを話し始めた。
ところどころ話が飛ぶところがあったが、それはきっとタバサの許可なく言ってはいけない事なんだろう。
タバサの実家の話などになると話が詰まり飛ぶところからそう推測出来た。
どうやら自分の事は何でも話してしまうが他人のことに関しては多少口が堅いようだ、あるいはタバサの事だから口が堅いのかも知れない。
私の事に関しても口が堅いままでいてほしいと思う。
そしてお姉さまはもっと恋愛すべきだと言う話に差し掛かったところでヴェルダンデの掘った穴からタバサがぴょこっと顔を出した。
シルフィードをつついて知らせようとするがシルフィードは気付いた様子も無く話し続ける。

「大体お姉さまは本ばかり読んでないで恋愛の素晴らしさを理解すべきなのね、まぁあのおちびさんには少し早い話かもアイタッ！！」

タバサが穴から高速で出てきてシルフィードの頭を杖でぽかぽか叩いている。
しばらくするとタバサはきゅいきゅいとしか言わなくなったシルフィードからこちらに視線を向けた。
私にも罪はあるのだろうか？

「…何を聞いた？」

「話せることには驚きましたけどね、シルフィードが話したのは貴方をどれだけ好きかと言う話ばかりでしたよ」

「…そう」

「心配しなくてもシルフィードのことは誰にも言いませんよ、誰しも言われたくない事の1つや2つあるものでしょう?ところで他の皆さまは?」

「もうすぐ来る」

そう言ってタバサは自分が出てきた穴を指さした。
その隣ではシルフィードがこちらを涙目で見ている。感謝の気持ちがヒシヒシと伝わってきた。
タバサが穴から出てきてからしばらくすると他の皆も穴から出てきた。
初めにキュルケとギーシュが、そして次にヴェルダンデが、最後にルイズを背負ったサイトが出てきた…あれ?ワルドは?

「さっさと逃げよう!」

サイトが叫び、皆はシルフィードの背中に乗った…ヴェルダンデは乗る場所がなかった為口にくわえられているが…
颯爽と飛び立つシルフィード、その背中の上で私は気になっていることを口にする。

「あの…ワルド様は?」

「何でも裏切り者だったらしいよ?僕も詳しいことはわからないん

だけどね」

私の疑問にギーシュが答えてくれる。あの人裏切り者だったんだ…

何故かあまり驚きはない。

人として道を踏み外していると思っていたからだろうか。

そんなことよりも厄介なことに気付いた…私が魔法使えること敵にばれてるじゃん！！

敵？敵って誰だろうか？ギーシュに聞いてみたがわからないとの答えが返ってきた。

そんなことを考えているうちに私はウトウトと眠りについてしまったらしい。

第十六話（前書き）

今回は少し短めですかね。

第十六話

私が目を覚ますと既に王都が見える距離まで迫っていた。
何でも今から直接王宮に向かうらしいが…とんでもない！！
このままでは私も一緒に行動していたことが王女様の耳に入るかもしれない。
せっかくワルドがいなくなって王宮に私の話が伝わる心配が激減したというのに…
この場所で降ろしてくれるように必死の抵抗を試みることにした。

「わ、私は王宮に行きません！！ここで降ろしてください」

「ちょっとどうしたのよヒロミ？平民だからって遠慮することはないわ、一緒に王宮に行きましょう。きっと王女様も褒めてくださるわ」

「褒めて貰えなくていいんで降ろしてください。というか私は居なかったことにしてください。私は特に何もしておりませんし居なくても問題ないはずです」

「何をいっているんだい？君は平民としては考えられないほどの働きをしたじゃないか。胸を張って女王陛下に会いに行こうではないか」

くっ…ヒロミは逃げした、しかし回りこまれてしまった。って感じだ。
かくなるうえは味方を増やすしかない…
いちかばちかサイトの耳元に近づきぼそっとある言葉を囁く。
するとサイトの顔が真っ赤になっていき…

「ヒ、ヒロミもこう言ってることだし降ろしてあげてもいいんじゃないかな？」

どうやら味方につけることに成功したらしい。
そのまま2人でなんとか押し切り首都の外壁の前で降ろして貰うことに成功した。
…馬も無いし歩いて学院まで帰るか…多分1日もかからないだろう…

第16話「メイドとして～その5～」

サイトside

16話にして初めて原作主人公である俺にメイン視点が回ってきたらしい。
しかしさっきはびっくりしたな…
ヒロミが起き上がったと思ったらいきなりシルフィードから降ろせと言いだしたんだ。
あまりにも唐突だったんで正直キャラ作りに疲れて頭がおかしくなっちまったのかと思ったぐらいだ。
話を聞いてみると目立ちたくないから王宮に行きたくないってことらしい。
必死に抵抗するもルイズとギーシュに宥められ、降りれない状況になっているらしい…いい気味だ。
俺の方を助けを求めるような目で見てきたけど、この前からかわれた仕返しに気付かないふりをした。

するとヒロミが俺の方に近づいてきてボソっと言ったんだ。

「誰も気付いてないと思ってます?私は見てましたよ」

顔から火が出るほど恥ずかしかった。

おそらくさっき俺が寝てるルイズにキスしたことを言っているんだろう。

ここで味方に着かなかったら間違いなく言いふらされる。いや、言いふらされるだけならいいが…もっとひどい仕打ちが待っているのかもしれない…

もう逆らえるわけがなかった。必死にヒロミの味方をして結局ヒロミは街の外で降ろして貰っていた。

…え?俺視点もう終わり?王宮でのやり取りとか要らないの?ちょっと待っ…

ヒロミside

学院の方に歩き始めながらさっきのことを振り返る…しかしさっきは危なかった…

サイトに「見てましたよ」とは言ったものの正直何も見てない。

サイトなら何か恥ずかしい事の1個ぐらいしているだろうと思い言ってみたところ、思い当たることがあったらしい。

しかし一体何をしていたのだろうか?非常に恥ずかしそうな様子だったが…ルイズの下着洗う時に臭いでも嗅いでいたのだろうか?

……うわぁそれは引くな……よし、このことはあまり考えない事にしよう…事実かどうかわからない事でサイトの高感度が下がっていくのを感じる。

もしかしたらもっとかわいいことかもしれないしね。うん、そう考

えておいてあげよう。夕食の前に厨房に忍び込んでつまみ食いしちゃった、テヘッ☆みたいな。
…いや、わかってるから、何も言わないで…
ブルーな気分になっているところに空からギーシュが降ってきた。

「ギーシュ様？どうなさったんですか？」

「いやなに、シルフィードから突き落とされてね…」

ギーシュと二人きり…ドキドキする。
頼りないところとか軽率なところとかは残念な人だが、やはり顔は好みだ。

「拾いに来ては…くれないようですね」

「薄情な連中だよ、全く…仕方ない学院まで歩くとしよう」

ん？学院までギーシュと二人っきり！？いかん緊張してきた。
いや、これはむしろチャンスだ、ここで仲良くなってしまえば…ん？
…サイトも降ってきた。二人っきりの時間は１分とたたないうちに終了した。
しかも学院までの帰り道でギーシュはずっとサイトに「王女は僕のことを何か言っていなかったかい？」と聞いていた。
なんてひどい仕打ちだ…多分１００年の恋でも冷めるわ…こうしてギーシュに対する想いは完全に潰えることとなった。
さっきまで大事に持ってたぼろぼろになったギーシュ作の剣も捨てた。
ヒビの入ってる青銅の剣なんていりません。

夕方になりようやく学院に到着することが出来た。

学院に戻りすぐに学院長室に向かい、学院長室の扉を開くとそこにはオスマン氏の姿があった。
私は早速起こった出来事を詳細に伝えた。

「それはお疲れじゃったな。無理を言ってすまなんだの」

「ほんとですよ、正直死ぬかと思いましたよ？しかし…私が行ったのは正解でした。彼女達だけなら死人が出ていたかもしれません。」

「ほう…まさかワルド子爵が裏切るとはの、あの子たちだけでもなんとかなると思っておったのだが…甘かったかのう」

「あるいはなんとかなったのかもしれませんね。ミス・ヴァリエールとサイト君の力に関しては私は目の当たりにしておりませんので何とも言えません」

「そうかもしれんの…ところで何か聞きたそうな顔をしておるの？」

「そうですね…ワルド子爵が裏切り者だった。ということは理解できたのですが…敵は一体何なんでしょうか？」

「敵…のう、おそらくは『レコン・キスタ』というグループじゃろう。何でもアルビオンの国を滅ぼしたのもそのグループが関わっておると聞いておる」

「流石に情報通ですね…」

「まぁの、ワシの使い魔はそういうことにしか役立たんからの、それにワシもそれ以外のことは苦手じゃ」

ニカッと笑いながら自分の使い魔であるモートソグニルを私のスカートの下に走らせてくる。

「なんじゃ。まだドロワーズを履いておるのか…つまらんのぅ」

「…サンダー」

「ギャッ!!ミ、ミス・ヒロミ?流石にフーケでもここまではせんかったぞ?」

「フーケ以上の攻撃じゃないと貴方には効かないと受け取っておきます」

などと最近では挨拶のように常習化しているやり取りをオスマン氏と交わす。
こうしていると帰ってきたんだなぁという気分になる。
怒りながらそんなことを考えているとオスマン氏が口を開いた。

「…ミス・ヒロミ、おかえり」

「…ずるいですね、そんなことはスカートの中をのぞく前に言ってください」

「それは無理じゃな、狡さは年の功みたいなもんじゃからの。そうじゃ、渡すものがあるんじゃった。これはワシの頼みを聞いてくれたお礼みたいなもんじゃ、受け取ってくれ。」

そう言ってオスマン氏は金貨の詰まった袋を私に差し出してきた。

「１００エキューしかないがの、なに年寄りが金を貯めるのは難し

いんじゃ。お礼として、この金を受け取ってくれるかの？」

「断っても無理矢理渡すんでしょう？なら、ありがたく貰っておきますよ。ありがとうございます」

「こんな物しか渡せなくてすまないの。しかしワルド子爵はミス・ヴァリエールに執着しとったのか…うむ…」

「それがそんなに問題なんですか？」

「今の時点では何とも言えんが…問題になってくる可能性は高いの。またミス・ヴァリエール達を守ってくれるように頼むかも知れんが…構わんかの？」

「構いませんよ、私もあの子たちのこと好きですから。まったく…いけすかない奴だったら断れたんですけどね、自分の身が可愛いですって」

「ほほ、今後ともよろしく頼むぞい。しばらくはゆっくりするがいい」

私の答えに満足したのか嬉しそうに笑うとオスマン氏はそう告げた。学院長室から出た私は思わぬ臨時収入に顔を緩める。早速明日にでも街に剣買いに行こう。

念願の自分の剣を買うことを考えウキウキしながら廊下を歩いているとシエスタに出くわした。

「ヒロミさん？最近見かけませんでしたけどどうされてたんです？」

「ちょっと仕事の関係で街の方に行っておりまして、皆さんの顔を

見れないでさみしかったですよ」

「まぁ、お上手ですね。そういえばサイトさん達の話聞きました？」

「何の話です？」

「何でもミス・ヴァリエール達が王宮の任務を果たしてきたとか言う噂で今学院中がもちきりなんですよ。今回もサイトさんが活躍したって話です…あぁ流石サイトさん」

…もう噂になってるのか、早いな

ウットリした目でどこか遠くを眺めているシエスタを横目にそんなことを考える。

シエスタのサイトへの盲信ぶりは少々異常なものが感じられるのだが…恋愛感情に発展しているのだろうか？

気になったので確かめてみることにした。

「あの…シエスタさんはサイトさんがお好きなんですか？」

「…はい、だっ、誰にも言わないでくださいよ？」

「言わないですよ、なんならお手伝いしましょうか？」

「け、結構です。それに…サイトさんは私よりヒロミさんの方が好きなのかもしれないですから…」

「どうしてです？」

「ご飯を食べに来られてた時によくヒロミさんの話を聞かれていたので…出身はどこだとか…」

なるほど、好きとか嫌い以前にサイトは私のことが単純に気になっていたのだろう。
まだ異世界から来た事を明かしてない頃に私の名前が日本人の物だから気になった。といったところだろうか。
しかしそのことを説明するわけにもいかないし…何よりこのまま終わらせてしまっては面白くないので私はシエスタに発破をかけることにした。

「何を弱気なことを言ってるんですかシエスタさん!!私が見た限りではサイトさんは今ミス・ヴァリエールの事が一番好きだと思います。しかしそれはまだ気になるレベルの好きだと思いますよ。ここで強気で押していかないでどうするんですか!!」

「ヒロミさん…そうですね…そうですよね!わかりました。私頑張って押してみます。ミス・ヴァリエールが相手でも負けません!!ところでヒロミさんはサイトさんの事どう思ってるんですか?」

「んー…恋人ってよりは弟みたいな存在ですね、からかいがいのある弟ですね」

「そうですか…良かった…ヒロミさんありがとうございました、私頑張ります!!」

「私も応援してますよ、シエスタさんがミス・ヴァリエールに勝てそうな時は後押しさせていただきますから」

ありがとうございます。と張り切った様子で廊下を進んでいくシエスタを見て、私は一仕事したかのような充実感に襲われていた。
しかしサイトって意外とモテるんだろうか?見た目は普通なんだけ

ど…意外と優しいし頼りになるところもあるし…モテてもおかしくは無いかな?

今後もっとサイトの毒牙にかかる人が増えてきたら…からかいがいがあるなぁ…

なんて事を考えながら私は自室に向かって歩いていくのだった。

第十六話（後書き）

ようやくアルビオン編が終了しました。

次回からはどうしようか考え中ですが、とりあえず何話かはサイドストーリーのようなものを混ぜたいと思っています。

第十七話

私は今日トリスタニア言って剣を買うつもりだ。
そう！遂に念願の剣を購入するだけの資金を手にしたわけで。
いつもなら馬に乗るのなんて嫌でしかないのに今日は嫌でも何でもない、むしろ早く乗っていきたいぐらいだ。
テンションが上がって仕方がない。そんな今日は虚無の日だ。

第17話「やった　ねんがんの　けん　を　てにいれたぞ」

早速学院長室に向かい外出の許可を貰う。
オスマン氏に剣を買い行くことを話したところ二つ返事で許可を貰えた。
学院長室から飛び出していき浮かれて歩いていたところ、廊下の角で中年の男性とぶつかってしまった。
私にぶつかった男はフラフラと後ずさる。

「も、申し訳ありませんミスタ・コルベール」

「ああミス・ヒロミでしたか。珍しいですな、貴方がそんなに慌てているのは」

私がぶつかったのはコルベールと言う教師だった。
この人物は貴族の中でも平民の私に分け隔てなく接してくれる数少ない人物だ。

オスマン氏の信頼も厚いらしく何かあるごとにオスマン氏はコルベールの名前を出す。
また人に対する柔らかい物腰から私はコルベールの人間性を尊敬し好いていた。

「ええ、今日は街に買い物に行く予定なので、浮かれてしまいました」

「はは、女性は買い物がお好きですからね。あ、あのミス・ヒロミ？」

「なんでしょう？」

「あの…よろしければ…そのご一緒に夕食なんてどうでしょうか？この間街でおいしいお店を見つけましてね」

「あら？構いませんが…私でよろしいので？」

「え、ええ、もちろんですとも。それでは街に行くときに声を掛けて頂けますか？」

「あら、私の買い物はきっとつまらないと思いますが…構わないのですか？」

「構いませんとも！それでは私も準備をしてきますので。部屋で待っております」

「わかりました。私の準備が整ったら声をお掛けしに行きますわ」

そう言って嬉しそうに去っていくコルベールの背中をじっと見つめ

る。
冷静に考えると…もしや今のはデートの誘いだったのではないだろうか…よくよく考えるとあの男は普段から私に好意的だったような気がする。
剣を買いに行けることで浮かれてＯＫをしてしまったが、コルベールとデートする気なんて全くない。タイプじゃないからだ。
しまった…しかし今更断ると言うのも相手に悪い、コルベールでなく嫌味な相手なら断れるのだが…
あの人は人間的に素晴らしい人だ、おそらく私が今から断っても笑顔で許してくれるだろう。しかしその裏でどれだけ凹むのだろうか？
ダメだ、コルベールにそんなひどい仕打ちは出来ない…くっ、行くしかない…
部屋に戻り普段着に着替え全財産である１１０エキューを握り締める。
決心した私はコルベールを呼びに部屋に向かった。

朝は嫌じゃなかったはずの乗馬は完全なる苦行と化した。
道中の会話も至って普通の会話だったが面白くないように感じる。
やはりこれをデートだと意識してしまっているのが良くないのだろう。
そこで私はこれをデートと考えないことにした、そうこれは同僚と遊びに来ただけだ。
そう頭を切り替えると話も弾んだ。なんてことない話が面白く感じられる。
やはり人間的には私はこの男が大好きなようだ。そうこうしているうちに街に着いた。

「さて、ミス・ヒロミ街に着きましたが…何を買われるんですか？」

「そういえば言ってなかったですね、剣を買いに来たのです」

「剣!?貴方はメイジでは無かったのですか?」

「実は剣士でもあるんですよ。お遊びみたいなレベルではありますが…一本手元に置いておきたいと思いまして」

「まさかミス・ヒロミが剣士とは…人はみかけによらないものですな」

「はは、そんなに驚かないでくださいよ。腕の方は想像以下ですから」

なんて会話をしながらいつか行ったことのある武器屋に入る。
相変わらず店の中には誰もおらず店主が暇そうに座っている。
入ってきたコルベールの方に視線を投げかけると慌てたように喋り出した。

「いらっしゃい…って貴族様?うちは何もやましい商売はしてませんぜ?」

「心配しなくても私達はただの客ですよ。それに私は彼女の買い物の付き合いでいるだけですから」

コルベールがやんわりと言うと店主が今度は私の方に目を向けた。

「ん…嬢ちゃんは…おお、あの時の嬢ちゃんか!元気だったか!!どうしたい?剣買う金が溜まったのかい?」

「そうですよ。１００エキューで買える長剣を見せてください、出

来るだけ軽い物がいいんですが」

「軽い剣ねぇ…そういえば良い剣があるぜ！持ってくるからちょいと待ってな」

そういうと店主は店の奥からすらっとした剣を持ってきた。
装飾などは一切ついていないが剣自体がキラキラと光を反射させている。
そして重い。軽いと言うのはもしかしたら装飾がない分軽いという意味かもしれない。
私は剣のことはよくわからないがなかなか良い剣のような気がする。

「これは…なかなか良い剣ですね」

横からコルベールが口を出してきた。

「貴族様…剣のことがわかるんですかい？」

「ええ、多少のことならば見ればわかります。飾り物にしかならない剣が良く出回ってるとは聞いていましたが…この剣はそういった類の物とは異なりますね」

「へぇ…ミスタ・コルベールに剣の目利きが出来るとは…人はみかけによらない。でしたか？」

私がそういうとコルベールはあっけにとられたような顔をして笑い始めた。
訳がわからないといった様子の店主に１００エキューを支払いお礼を言って店を出た。
店を出ると剣を背中に背負い歩き始める。

少し時間は早いがコルベールお勧めの店で食事をすることとなった。貴族しか入れないような店も多くある中、この店は平民でも入れる見せだった。
そのことをコルベールに聞くと、なんでも貴族しかいないような店では落ち着かないらしい。
この男は相当変わり者の貴族だと思う。
料理が運ばれてきた…おいしい。素直な感想をコルベールに伝える。

「おいしいですね。この料理」

「喜んでいただけてホッとしました。そういえば…ミス・ヒロミに一つ聞きたいことがありまして」

「なんでしょうか？」

「先日の私の授業でのことです…サイト君、つまりミス・ヴァリエールの使い魔が私の発明を見て『エンジン』と言ったんですよ。後で聞いた話によると何でも彼はロバ・アル・カリイエの出身だということでして…もしかしたら同じロバ・アル・カリイエ出身の貴方なら何か知っているんではないかと思ったんですよ」

「『エンジン』ですか、確かに聞いた事のある名前の単語ですね。しかしサイトさんと話したこともあるのですが彼と私は違う地域の出身でして…文化が微妙に違うんですよ。例えば彼の住んでいた地域には魔法が無い。といった風にです。ですから…その装置を見せて頂かない事には何とも言えないですね」

「なるほど…もし分かるのでしたら色々とご教授していただきたいと思いましてな。自分が作りだしたものが違う場所では既に実用されている…研究者としては興味の尽きない話です」

「なるほど…帰ったらその装置を見せて頂いても結構ですか?」

「構いませんよ、そうと決まればさっさと食べてさっさと帰りましょう」

もしサイトが本当に『エンジン』と言ったのならこの男はとんでもない天才だ。

魔法が普通に存在する世界でエンジンのような機械による機関を開発しようと考える人物など他にはいないだろう。

しかし…若い女性をデートに誘っておいて研究の話になったとたんそちらを優先するとは…コルベールらしいと言えばコルベールらしいのだが…

それでも私はコルベールを憎むことは出来なかったが、この人は一生結婚できないんだろうなと思った。

それから学院に帰るまでの間、コルベールは嬉々として自分の研究の事を語り続けた。

炎の破壊以外の使い道を研究しているということ。

その過程で今の『エンジン』という物の原型が出来あがったこと。

そしてその話を詳しく聞けば聞くほど、彼の作りだしたものがエンジンに類似しているものだと気付かされることになった。

学院に戻るとすぐにコルベールの研究塔に向かった。

中に入るとそこはいかにもな研究室と言った感じの空間が広がっていた。

部屋の片隅でごそごそと何かを探していたコルベールがあっと声をあげた。

「そう言えば…ミス・ヴァリエールに壊されたのを忘れていましたよ」

頭をポリポリと掻きながら恥ずかしそうに言うコルベールであった。

「実物を見て頂いたらサイト君が言っていた『エンジン』と言う物かどうか判断してもらえたんですがね…」

「ミスタ・コルベール…今までのお話を聞いていた限りでは…間違いなく『エンジン』だと思われます。正直…驚きました。魔法が普通に存在する地域の人間が発明できるものではありません」

「しかし最終的にはこれで船が飛んだりもするのでしょう？私の研究は風石無しで空飛ぶ船を作ってサイト君を東に帰してあげるまでは終わりませんよ」

「お優しいですね。他人の為に役立つ研究をなさっているだなんて。そもそもその研究は魔法が使えない平民の方々の為に始めたものなんでしょう？」

「わかりますか？しかし私はそのような偉いものではありません。これは私の贖罪なのです…」

「贖罪…ですか、でしたらこの研究は必ず完成させなければなりませんね。サイト君の為にも、貴方自身の為にも」

「ミス・ヒロミ…いや、お恥ずかしい。貴方のような若い方に贖罪などと言う話をしてしまうとは…思い返せば途中から私の研究の話ばかりしてしまいましたな」

心底恥ずかしそうな様子で言葉を発するコルベールの姿は、先ほどまで熱心に研究のことを語っていた人物とは別人のようだった。

先ほどまで居た偉大な科学者は姿を消し、今私の前には奥手な中年の男性が立っている。
そんなコルベールに私は告げる。

「そうですよ、若い女性と食事をされているんですからもう少し気を使っていただきたいですわ。次からはお気を付けになったほうがよろしいですよ」

「いやはや、面目ない」

「それでも…私は今日一日楽しかったですよ。ミスタ・コルベール」

「いや、しかし今日私は自分の研究の話ばかりを…」

「男の方が何かに一生懸命になっている姿は格好いいものですよ、特に…私はその研究の素晴らしさをわかっておりますから。ただ、他の女性を誘う時は避けたほうがいい話題かもしれませんね」

「はは…肝に銘じておきます。私の方こそ今日は一日楽しませていただきました。また今度暇な時に研究の相談にでも乗ってください」

「ええ、喜んで研究を見せて頂きます。サイトさんも呼んだら喜ぶかもしれませんね」

私がそういうとコルベールは少しがっかりした様子を見せたが、直ぐに「そうですね」と言った。
よし、これでもうデートにはならないはずだ。3人の時にだけ来るように心掛けよう…
なんて考えているが、今後も1人でしばしばこの研究室に足を運ぶことになる…だがそれはまた別のお話。

第十七話（後書き）

少し短くなってしまいましたね
今回はコルベールのお話でした
次回は誰を書こうかなぁ…

第十八話（前書き）

インドネシアに行ってきます。
この小説がうｐされている頃には私はインドネシアでしょう。
一応ＰＣは持っていきますが、更新出来るかどうかはわかりません。

第十八話

剣を購入したのはいいものの、重くてロクに扱えない事が判明した。
私はアビリティを使えるので剣を使いこなせるようになる必要は無いように感じられるかもしれないがそれは違う。
今までの戦いには接近戦、つまり剣と剣がぶつかるような戦闘は存在しなかった。私の弱点である接近戦を今までは回避出来てきたわけだ。
しかしこれからもずっと回避し続けられるかどうかはわからない。
正直今までは運が良かったと思う。今まで戦っていた相手が最初から私に突っ込んできていたら私は今生きていないだろう。
と言う訳でこれからの事を考えると接近戦があるということも十分に考えられる。
そこから剣で相手を圧倒できるようにはなれないまでも、多少持ちこたえるぐらいは出来るようになっておくべきだと判断したのだ。
そんなわけで剣を購入してからはトレーニングに剣の時間が追加された。
元々トレーニングといっても筋トレ、ストレッチ、ひたすら走るの３つしかやっていなかったのだが、今回そこにひたすら剣を振るという項目が追加された。
ひたすら振るトレーニングになったのは、衛兵の人に型を教えてほしいと相談したのだが「筋力が足りないからしばらくは型とか考えずひたすら振れ」と言われた結果だ。

第１８話「トラブルメーカー」

今日も私は中庭で一心不乱に剣を振っている。
３０回も振れば上半身が軋み始め、５０回も振れば上半身がもう無理だと悲鳴を上げる。
まだトレーニングを始めて3日目だ、早々に効果が表れるとは思っていない。
剣を放り出してその場に倒れこんだ私は自分を見つめている視線があることに気付いた。
そこには杖を持って立っている1人の少女の姿があった。

「ミス・タバサ?どうしたんです、こんな時間に?」

「この前の約束、私の部屋に来て」

どうやら治癒魔法を教えてほしいらしい。
約束してしまった以上私はタバサの後について行く。
部屋に入るとタバサが『ディテクトマジック』で周囲の確認をした後、『ロック』と『サイレント』の魔法をかける。

「…教えて」

「…私の魔法を見て魔力の練り方やイメージをしていただく方法しかとれませんが…それで構いませんね?」

「構わない」

「それでは行きますよ……エスナ」

私は『エスナ』をタバサに掛ける、元々ステータス異常が無いタバサには効果は現れないが、タバサは私の魔法を食い入るようにじっ

と見つめている。

「…どうです？わかりましたか？」

「…わからない。魔力の流れが特殊すぎる…一度やってみる。……エスナ」

タバサが呪文を唱え杖を私に向かって振るが何も起きない。

私自身魔法を覚えるという行為のことはわからないが、おそらくは『エスナ』と言う魔法を理解できなかった為発動しなかったのだろう。

「ダメみたいですね…この魔法は使える者なら一度で成功するはずです、残念ながらやはりミス・タバサには適性が無かった様です」

私の言葉を聞き、表情こそ変わらないもののタバサが見るからにガッカリしているのがわかる。

なんだかいたたまれなくなり私は部屋を後にすることにした。

「…機会があれば、必ずお力になりますので」と言い残し部屋を去ろうとした時に後ろから「ありがとう」と声が聞こえてきた。

タバサの部屋を後にした私は残っていたトレーニングに励むことにした。残すは走りこみを行うだけだ。

学生寮から出て準備運動として屈伸していると後ろから声を掛けられた。

「ねぇヒロミ。サイト見なかった？」

「どうしたんですミス・ヴァリエールこんな時間に？」

「サイトが部屋に帰ってこないから探しに来たのよ…あ、別に心配してるわけじゃないのよ！ご主人様の事をほったらかしにしてる使い魔にお灸を据えようと思ってるだけなんだからね！！」

どうやらサイトの事が心配で探しに来たらしい。なかなかほほえましい。

どうやら私はニヤニヤしながらルイズのことを見ていたらしく噛みつかれてしまう。

「何笑ってるてるのよ！！あ、あ、あなたなにか勘違いしてるんじゃないかしら？」

「いえいえ、お灸をすえる為に探してるんでしょう？」

「そ、そ、そ、そうよ、決して心配なわけじゃないんだから！で、見かけてないの？」

「私も今まで学生寮の中におりましたから…そうですね、私は今から走り込みをするつもりなのでここで待っていていただけますか？途中でサイトさんを見かけたら連れてきますよ」

「そうなの？それじゃお願いするわ、私はここにいるから」

わかりましたーと、ルイズに手を振り私は走り始める。

中庭を抜けヴェストリの広場の方に行った時にシエスタと一緒にいるサイトを見つけた。

私はサイトに近づいて話し掛ける。

「サイトさん…お楽しみのようですね？」

「ヒロミ!?いや、これはその違くて…」

「ヒロミさん、私アドバイス通り積極的に行くことに決めました!!」

「この状況もヒロミのせいじゃん!シエスタに何言ったんだ?」

「あら、サイトさん責任転嫁はよくないですね…こんな状況になる前に断ろうと思えばいくらでも断れたのでは?」

「ぐっ…」

今日のヴェストリの広場はいつもとは違う、大釜を使った風呂が出来ているのだ。
そしてサイトとシエスタが一緒にその風呂に入っている。もちろん裸どうしで。
別に私には関係の無いことなのでほうっておいてあげてもいいのだが、サイトが責任転嫁してきたことで私の嗜虐心がくすぐられた。
確かにシエスタを後押ししたのは私だが、一緒に風呂に入っていることに関しては一切関係が無いといっても過言ではない。
サイトに満面の笑みで話し掛ける。

「そういえば中庭の方でミス・ヴァリエールがサイトさんを探していたんでした…サイトさんが何をしているか報告してきてましょうか?」

「ルイズ!?ダメ、絶対!!」

「やめてください!ミス・ヴァリエールを逆上させたら、私まで何

をされるかわかりません！！」

「大丈夫ですシエスタさん、ミス・ヴァリエールには今回のことに関してはシエスタさんを罰しないで頂けるように言っておきますから、こう見えて1つ貸しがあるので大丈夫です。それを利用してここでミス・ヴァリエールにサイトさんとの仲を見せつけておくというのはいかがでしょうか？」

「うぅ…確かにそれは効果的かもしれません…」

「でしょう？サイトさん、シエスタさんもこう言ってることですし…報告してきますね」

「ちょっと待った！！ホントにそれだけは勘弁してくれ…」

「どうしてです？事実を伝えることの何がまずいんですか？」

「いや、それは…その…」

「仕方ないですね、サイトさんのしている事をミス・ヴァリエールに報告するのは止めておくことにしましょう」

「本当か！？ありがとう！！」

「ええ、私は嘘はつきませんよ……ドンムブ」

「ヒロミ！？ちょっ動けないんだけど…俺の服もってどこ行くの？」

「安心してください。ミス・ヴァリエールにはこの事は話しませんから。何も説明せずに連れてくるだけです」

「ヒロミさん!?何かお怒りで!?」

私はサイトの服とシエスタの服を抱えてルイズのもとへ向かった。
後ろの方からサイトの叫び声が聞こえてきたが全て無視することにした。
二股かけるような男は罰を受けてしかるべきだよね。うん。
学生寮の前に戻るとそこではルイズが出迎えてくれた。

「早かったわねサイトは見つかっ…ってあなた何もってるの?」

「大変ですミス・ヴァリエール、ヴェストリの広場のほうでこの服を拾ったんですが…もしかしたらサイトさんが大変なことになっているかもしれません!急いで向かいましょう!」

「なんですって!!」

私の言葉を聞いて顔を青くして走り始めるルイズであったが、ヴェストリの広場に着きサイトがシエスタと風呂に入っているところを目撃すると顔を真っ赤にし始めた。
一方サイトは顔を真っ青にして湯船につかっている。
シエスタは…涼しい顔をして風呂に入っている。意外と肝が据わっているのかもしれない。
私はルイズの後ろでニヤニヤしながら状況を見守っている。修羅場の雰囲気しかしない。

「あ、あ、あ、あんた一体こんなところでメ、メ、メイドと何してるのかしら?ヒロミに何かあったかもしれないって聞いて心配して来てみたのに、何コレ?」

「あのさ、ルイズ落ち着け。違うんだよこれはさ…」

「そうですよミス・ヴァリエール、これは双方同意の上での行為ですから心配していただかなくても大丈夫ですよ」

シエスタが満面の笑みで爆弾をぶっ放した。

この子は一度決めたら大胆になるタイプなんだろうか？さすがにここまで積極的に行動するとは思わなかった。

後ろから見ていてもルイズの肩が怒りでヒクヒクと上下しているのがわかる。

サイトが恨めしそうな目でこちらを見ているがそんなものは何の効果も無い、むしろ私にとっては喜ばしいぐらいだ。いや、Ｓじゃないっすよ。マジで。

さて、そろそろ私が介入しないとシエスタまで巻き添えを喰らうことになってしまう。

自分がけしかけた相手が被害を被るのは心が痛む、今回の被害者はサイトだけで十分です。

「ミス・ヴァリエールこんなことになってしまったのは私が不用意に貴方を呼んでしまったこと原因です。どうかお二人をおしかりにならないで頂けませんか？罰するならぜひ私を！！」

「何言ってるのよヒロミ。私には貴方の事を罰するなんて出来るはず無いじゃない！！それにこれは私と使い魔の問題なの、悪いけど口出ししないで貰えるかしら？」

「わかりました…でしたらシエスタさんだけでも許してあげてください。彼女は使い魔ではありませんよね？それにサイトさんがしっかりしていればこのような状況になる前に回避できたはずです。シエスタさんには私の方からよく言っておきますので」

「…わかったわ。シエスタはヒロミに任せるわ」

「ありがとうございます。それでは行きましょうかシエスタさん」

私が声をかけるといつの間に服を着たのかシエスタがこちらの方にやってきた。

残されたサイトとルイズの方が言い争いを始める。

「さてと…ばか犬には調教が必要よね？」

「ちょっと待てルイズ、お前ヒロミに騙されてるぞ！！」

「あんた…よりによってヒロミのせいにしようっていうの？ヒロミは平民だけどあんたとは違って立派な人なのよ？それをあんたはヒロミのせいにしようと？」

「オマエ何でそんなにあいつのこと信頼してるんだよ！いつもなら平民だからとかなんとかいうところじゃねぇか、１回あいつの歪んだ笑顔を見てみればわかるって…」

「それではサイトさんはシエスタさんとお風呂に入っていたのは私のせいだとおっしゃるんですか？」

「うっ…いや、それは…」

「ミス・ヴァリエール…流石の私も今のは傷つきました。シエスタさんと一緒に先に戻らせていただきますね」

よよよ、と泣き真似をしながら使用人宿舎の方へとシエスタと戻っ

て行く。
ルイズはそんな私を心配してくれたようであっさり戻ることが出来た。
今頃はサイトがこっぴどく怒られている頃だろう。
…あれ?私ここまで性格歪んでたっけ?そんなことなかったと思うんだけど…
何だろうサイト見てるとひどくいじりたくなるんだよなぁ…ハッ、まさかこれが恋?
今までしてきた恋とは違った形で表れてしまった?……ねーようーん…やっぱり純粋に私の性格が悪いんですね。わかります。
私が1人でウンウンと納得しているとシエスタが話しかけてきた。

「あの…ヒロミさん?もしかして…面白がってません?」

「えっ!?いや、私はシエスタさんのこと応援してますよ?」

「…ヒロミさんの意外な一面を見てしまいました」

「で、でもミス・ヴァリエールから一歩リードは出来たでしょう?ちゃんと怒られない様にもしましたし」

「確かにそうですけど…あのずっと気になってたんですけどミス・ヴァリエールを呼ぶ意味はあったんですか?」

「…ああっ!!オールド・オスマンに呼ばれていたのを忘れていました。ではシエスタさんこれで!!」

「ヒロミさん!?」

シエスタの質問に焦った。正直その考えは無かった。

呼んだ意味なんて面白そうだからに決まってるじゃないですか。
追いかけてくるシエスタを振り切り、私の一日は終わりを告げることとなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7658m/

飛ばされてその先

2010年10月19日06時46分発行